

五和町史資料編(その11)

ふと
一 尾 貝 塚
お

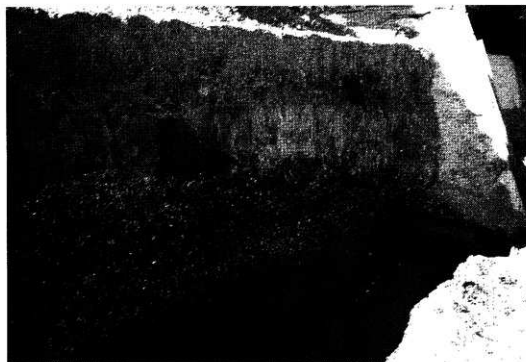
熊本県天草郡五和町大字御領字浜田所在縄文時代貝塚の調査

2000

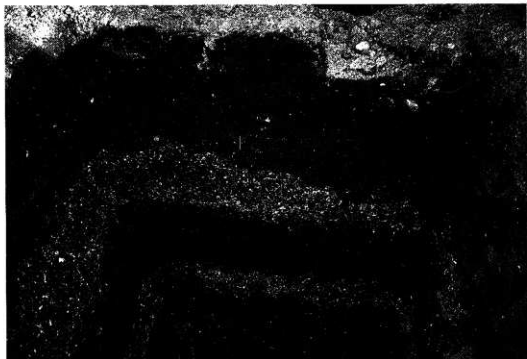
熊本県天草郡五和町教育委員会



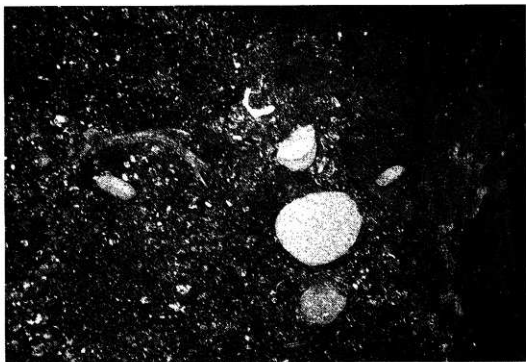
貝塚全景



A 区土層断面



B-1 区西壁断面



A-2 区遺物出土状況

発刊の言葉



西暦2000年の発刊を目指して、平成5年度から取り組んでまいりました町史編纂事業も、いよいよ仕上げの段階となりました。

これまで鶴田倉造編纂委員長を中心に委員の先牛方には、資料収集や調査研究など町史発刊へ向けての多大なご尽力をいただき、深く感謝を申し上げます。

このような中、このたび、五和町史資料編(その11)として『一尾貝塚』を発刊することができましたことは、この上もない喜びであります。

平成7年9月に実施した一尾貝塚の発掘調査では縄文時代の土器など数多くの遺物が出土し、二江にある沖ノ原貝塚とともに、有数の貝塚として注目されたところであり、町史編纂の資料としては勿論のこと、縄文文化を探る上での貴重な財産となり得るものと信じています。

ここに、発掘調査から執筆まで手懸けて頂いた山崎純男先生をはじめ、いろいろとご協力を頂いた関係者の皆様に対し、衷心より敬意を表しますとともに、本書が多くのの人々に活用されることを祈念して発刊の言葉と致します。

平成12年3月31日

五和町長 伊藤山陽

発刊にあたって

21世紀へ向けての五和町の指針となるべく、また2000年記念事業として、町史の編纂に取り組んでから早や7年が経過しました。

その間、委員の先生方のご努力により本編を含めて11編の資料編を発刊することができましたことは、町の大きな財産であるとともに、通史編纂への大きな一歩であると信じ深く感謝を申し上げます。

このたび、五和町史資料編（その11）として『一尾貝塚』を発刊することになりましたが、御領の一尾貝塚は、昭和35年に発見されて以来、二江の沖ノ原貝塚とともに、大きな注目をあびており縄文時代の人々の生き様をうかがい得る極めて貴重なものと考えます。

ここに山崎純男先生をはじめ、町史編纂委員会の先生方、御協力を頂いた関係者の皆様に厚くお礼を申し上げますとともに、本書が広く活用頂けることを願っています。

平成12年3月31日

五和町教育長 田 中 典 明

序 文

ここに五和町史資料編（その11）として町内御領の『一尾貝塚』を公刊する事になった。

もともと一尾貝塚は、同じく町内の沖の原貝塚とならんで天草でも有数な注目すべき貝塚であった。

しかし、平成7年、同地に石垣が築造されることになり、緊急に町史執筆委員の山崎氏に調査をお願いする事になったものである。しかも山崎氏は福岡市に本務をお持ちであったため、遺物包含層を900袋に及ぶ上囊袋に入れて送り、土口等本務外の余暇を利用して調査して頂くという、全く異例の調査を御願ひする事になった。

しかし結果としては、日本全土、さらにはアジアの東部等広い視野から、最新の研究成果を盛り込んだ調査をして頂く事になり幸であった。

長期にわたり苛酷な調査を継続してすばらしい報告書を完成して頂いた山崎委員及びその間さまざまな御協力を頂いた多くの方々に御礼申し上げると共に、本報告書が広く活用される事を祈って序文にかえる次第である。

平成12年3月31日

五和町史編纂委員長 鶴田倉造

例 言

1. 本書は熊本県天草郡五和町教育委員会
が、町史編纂事業の一環として、平成7年
度に実施した一尾貝塚の発掘調査報告書で
ある。
2. 本書の執筆は山崎純男がおこなった。
3. 本書に使用した遺跡の図の作成には、山
崎純男、甲元真之、平田豊弘、藤木 聡、
藤江 望、久賀登世子があたった。
4. 本書に使用した遺物実測図は山崎の実測
によるものである。
5. 本書に使用した製図は山崎があたった。
6. 本書に使用した写真は山崎によるもの
である。
7. 本書の実測図の説明は、実測図の左側の
図を基本に上下左右を定めておこなった。
8. 本書、第6章、自然遺物については、資
料の分析・整理に、今後かなりの時間を要
するので、整理・分析後、おって補遺とし
て公表する予定である。
9. 本書の編集は山崎があたった。

本文目次

第1章 はじめに	1
1. 調査に至る経過	1
2. 調査の体制	2
第2章 遺跡の位置と歴史的環境	3
1. 遺跡の位置	3
2. 遺跡の立地と周辺地形	5
3. 天草諸島の縄文時代遺跡	7
第3章 調査の概要	10
第4章 発掘調査の記録	11
1. 調査区の設定	11
2. Aトレンチと土層堆積	11
3. Bトレンチと土層堆積	13
4. 南北トレンチの状況	13
第5章 出土遺物	17
1. 土器・土製品	17
(1) 縄文土器	17
(2) その他の土器	59
(3) 土製円盤	61
2. 石器	63
(1) 石鏃	63
(2) 石錐	66
(3) 石鏃	66
(4) 尖頭状石器	67
(5) スクレイパー	67
(6) 磨製石斧	72
(7) 擦切具	74
(8) 双角状礫石器	75
(9) 磨石・叩石・凹石	77
(10) 石皿	87
(11) 石錘	88
(12) 砥石	98

3. 骨角器・貝製品	101
(1) 釣針	101
(2) 離頭釘	103
(3) ヤス	107
(4) ヘラ、その他	108
(5) 貝刃	109
(6) 貝錘	110
(7) 斧	113
(8) 耳飾り	116
(9) 貝製装飾品	118
(10) 石製品	118
(11) 貝製玉	119
(12) 歯牙製玉	119
(13) 石製玉	119
(14) 貝輪	122
(15) 切痕ある骨	128
4. 網(炭化物)	128
第6章 自然遺物	129
1. 貝類	129
2. 哺乳類	131
3. 魚類	131
4. 植物遺存体	132
第7章 総括 まとめにかえて	133
1. 土器の編年問題	133
2. 石器・骨角器・自然植物からみた生産活動	133

挿 図 目 次

Fig. 1	遺跡の位置	4
Fig. 2	遺跡の立地と周辺地形	6
Fig. 3	天草縄文時代遺跡分布図	8
Fig. 4	調査区の設定	12
Fig. 5	A トレンチ土層断面実測図	14
Fig. 6	B トレンチ土層断面実測図	15
Fig. 7	南北トレンチ土層断面実測図	16
Fig. 8	縄文土器実測図 I	18
Fig. 9	縄文土器実測図 II	20
Fig. 10	縄文土器実測図 III	22
Fig. 11	縄文土器実測図 IV	23
Fig. 12	縄文土器実測図 V	26
Fig. 13	縄文土器実測図 VI	28
Fig. 14	縄文土器実測図 VII	29
Fig. 15	縄文土器実測図 VIII	32
Fig. 16	縄文土器実測図 IX	33
Fig. 17	縄文土器実測図 X	35
Fig. 18	縄文土器実測図 XI	36
Fig. 19	縄文土器実測図 XII	40
Fig. 20	縄文土器実測図 XIII	43
Fig. 21	縄文土器実測図 XIV	46
Fig. 22	縄文土器実測図 XV	47
Fig. 23	縄文土器実測図 XVI	49
Fig. 24	縄文土器実測図 XVII	51
Fig. 25	縄文土器実測図 XVIII	53
Fig. 26	縄文土器実測図 XIX	54
Fig. 27	縄文土器実測図 XX	56
Fig. 28	縄文土器実測図 XXI	58
Fig. 29	土師器実測図	59
Fig. 30	土製品実測図 I	60
Fig. 31	土製品実測図 II	61
Fig. 32	石鍬実測図	64

Fig. 33	スクレイパー類実測図 I66
Fig. 34	スクレイパー類実測図 II68
Fig. 35	スクレイパー類実測図 III69
Fig. 36	磨製石斧・擦切具実測図71
Fig. 37	双角状礫石器実測図 I73
Fig. 38	双角状礫石器実測図 II74
Fig. 39	磨石実測図78
Fig. 40	磨石・叩石実測図 I79
Fig. 41	磨石・叩石実測図 II80
Fig. 42	磨石・叩石実測図 III82
Fig. 43	凹石実測図83
Fig. 44	石皿実測図88
Fig. 45	石錘実測図 I89
Fig. 46	石錘実測図 II90
Fig. 47	石錘実測図 III91
Fig. 48	石錘実測図 IV93
Fig. 49	石錘実測図 V94
Fig. 50	石錘実測図 VI95
Fig. 51	砥石実測図99
Fig. 52	釣針実測図102
Fig. 53	離頭蛭・ヤス実測図105
Fig. 54	ヤス・その他の骨角器実測図106
Fig. 55	貝刃実測図110
Fig. 56	貝錘実測図 I111
Fig. 57	貝錘実測図 II112
Fig. 58	斧実測図 I114
Fig. 59	斧実測図 II115
Fig. 60	骨・貝・石製装身具実測図117
Fig. 61	貝製装身具実測図120
Fig. 62	貝・歯牙・石製装身具実測図121
Fig. 63	貝輪実測図 I123
Fig. 64	貝輪実測図 II124
Fig. 65	貝輪実測図 III125
Fig. 66	貝輪実測図 IV126

図 版 目 次

- PL. 1 縄文土器 I (上・表、下・裏)
PL. 2 縄文土器 II (上・表、下・裏)
PL. 3 縄文土器 III (上・表、下・裏)
PL. 4 縄文土器 IV (上・表、下・裏)
PL. 5 縄文土器 V (上・表、下・裏)
PL. 6 縄文土器 VI (上・表、下・裏)
PL. 7 縄文土器 VII (上・表、下・裏)
PL. 8 縄文土器 VIII (上・表、下・裏)
PL. 9 縄文土器 IX (上・表、下・裏)
PL. 10 縄文土器 X (上・表、下・裏)
PL. 11 縄文土器 XI (上・表、下・裏)
PL. 12 縄文土器 XII (上・表、下・裏)
PL. 13 縄文土器 XIII (上・表、下・裏)
PL. 14 縄文土器 XIV (上・表、下・裏)
PL. 15 縄文土器 XV (上・表、下・裏)
PL. 16 縄文土器 XVI (上・表、下・裏)
PL. 17 縄文土器 XVII (上・脚台有文土器、下・脚台無文土器)
PL. 18 石鏃 (上・表、下・裏)
PL. 19 石鈎、石鋸、尖頭状石器、①表、②裏、③エイ尾刺骨製刺突具
PL. 20 スクレイパー類 I (上・表、下・裏)
PL. 21 スクレイパー類 II (上・表、下・裏)
PL. 22 磨製石斧 (上・表、下・裏)
PL. 23 双角状礫石器 (上・表、下・裏)
PL. 24 磨石、叩石、凹石類 I (上・表、下・裏)
PL. 25 磨石、叩石、凹石類 II (上・表、下・裏)
PL. 26 磨石、叩石、凹石類 III (上・表、下・裏)
PL. 27 磨石、叩石、凹石類 IV (上・表、下・裏)
PL. 28 磨石、叩石、凹石類 V (上・表、下・裏)
PL. 29 石錘 I (上・表、下・裏)
PL. 30 石錘 II (上・表、下・裏)
PL. 31 石錘 III (上・表、下・裏)

- PL.32 石鍾Ⅳ（上・表、下・裏）
 PL.33 石鍾Ⅴ（上・表、下・裏）
 PL.34 砥石（上・表、下・裏）
 PL.35 石皿（上・表、下・裏）
 PL.36 結合釣針、単式釣針、釣針未製品（上・表、下・裏）
 PL.37 離頭鈎、ヤス類（上・表、下・裏）
 PL.38 鹿角製品（①表、②裏）③骨角器類
 PL.39 貝刃（①表、②裏）③傷ある骨片
 PL.40 貝鍾（上・表、下・裏）
 PL.41 筭（上・表、下・裏）
 PL.42 鹿角製耳飾・サメ背椎骨製耳飾（玉）（上・表、下・裏）
 PL.43 貝製垂飾品（上・表、下・裏）
 PL.44 貝製玉類（上・表、下・裏）
 PL.45 貝製玉類、鹿門齒製玉類（①表、②裏、③表、④裏）
 PL.46 石製玉未製品と線刻礫（上・表、下・裏）
 PL.47 貝輪Ⅰ（上・表、下・裏）
 PL.48 貝輪Ⅱ（上・表、下・裏）
 PL.49 貝輪Ⅲ
 PL.50 壺石製品・網炭化物

表 目 次

Tab. 1	土製円盤計測表	62
Tab. 2	石鏡計測表	65
Tab. 3	磨石、叩石、凹石計測表	86
Tab. 4	石鍾計測表	97
Tab. 5	砥石計測表	100
Tab. 6	骨製刺突具計測表	107
Tab. 7	貝鍾計測表	113
Tab. 8	骨製耳飾（骨製玉）計測表	118
Tab. 9	貝製玉計測表	122
Tab. 10	貝輪（未製品）計測表	127

第1章 はじめに

1. 調査に至る経過

一尾貝塚は大草下島の東海岸の北端部近く、熊本県天草郡五和町大字御領字浜田に位置する縄文時代の貝塚である。貝塚は丘陵斜面から丘陵下の低地にかけて形成され、貝塚のすぐ北側に、丘陵上の一尾部落に通じる道路が存在するために、貝塚は一尾貝塚と通称されている。貝塚の発見は以外と新しい。昭和35年(1960年)地元、御領中学校の教諭であった鶴田文太郎氏が、屋敷開きによって生じた畑の崖面に貝塚が露出しているのを発見した。貝塚発見の報告を受けた当時、本渡中学校教諭であった鶴田倉造氏(現・五和町史編纂委員長)と本渡中学校郷土部は貝塚と周辺部の現地調査を行い、若干の縄文式土器・石器を採集した。貝塚の状況は、丘陵斜面の下位において、南側と西側がカットされ、高さ1m前後の崖面となっている。貝塚はこの崖面に露出している。南側では、崖面に現われた貝塚は長さ約10m、厚さ約50cmで、さらに下位に続いている。西側では崖面に現われた貝層は北に向かって徐々に厚さを減じ、約7m延びて貝層はなくなる。また、西側の削平部分は畑地となっているが、その南半部には貝殻の散布が顕著である。これらの所見から、貝塚の範囲は、この丘陵斜面を北限として、主体部は南側の住宅の下と考えられた。なお、採集された土器は、いずれも縄文時代後期のものであった。その後、五和町教育委員会では、標識を建てて遺跡の周知をはかっていた。

平成5年、五和町史編纂委員会が設立され、筆者も原始、古代の執筆委員として参加することとなった。そこで、内容不明であった一尾貝塚の発掘調査を編纂委員公事業として実施することを試みたが、適当な発掘場所がなく、断念するにいたった。しかるに、平成7年9月、畑の岸部の擁壁工事が無届で進められ、貝塚の一部が破壊された。これに気づいた五和町教育委員会は、急遽、擁壁工事を停止させ、現状保存に務めると共に、熊本県教育庁文化課と筆者に電話連絡を行ない、事の検討を行なった。三者で協議の結果、擁壁工事によって破壊される部分について、筆者を発掘調査担当者として、記録保存のための緊急調査を実施することとなった。なお、緊急調査ではあるが、これまでの経過を考慮し、町史編纂のための事業として実施することとなった。工事停止のための緊急調査であったために、十分な調査期間と体制をとることができなかったが、熊本大学文学部考古学研究室の甲元真之教授に協力を依頼し、教授自身と学生の援助を受け、短期間の調査ではあったが、多大なる成果をあげ、無事、調査を終了することができた。

2. 調査の体制

調査地区 熊本県天草郡五和町御領字浜田

調査期間 1995年9月15日～18日

調査主体 五和町教育委員会・教育長 岩崎直志（前任）山中典明（現）

事務局（町史編纂室）金子喜世男、井上英二、宮崎 猛（室長前任）、岩本秀久（室長現）、
神田日出紀、池崎 剛（前）林 己美、泉喜代一、森下英美

文化財保護委員 山本 繁、山下未則、宮崎照志、山田義光、長島 悟、中井彌之、
本多 隆

調査参加者 山崎純男（福阿市教育委員会）

甲之貞之（熊本大学文学部教授）

平田豊弘（本渡市教育委員会）

藤木 聡（熊本大学文学部学生）

藤江 望（熊本大学文学部学生）

久賀登世子

鶴田倉造（町史編纂委員長）

山本 繁（町史編纂委員・文化財保護委員）

調査協力者 島津義昭（熊本県文化課課長補佐）

高木正文（熊本県文化課係長）

江本 直（熊本県文化課係長）

小畑弘己（熊本大学文化部助教授）

松田公平（郷土史家、本渡市）

木下尚子（熊本大学文学部教授）

遺物整理 久賀登世子、藤 愛子、矢川みどり、小松澄江

第2章 遺跡の位置と歴史的環境

1. 遺跡の位置

一尾貝塚は天草諸島の中で、最大の下島北部の東海岸、熊本県天草郡五和町大字御領字浜田に所在する縄文時代の貝塚である。貝塚は丘陵の麓部に位置し、貝塚のすぐ北側に丘陵上に位置する一尾部落に通じる道路があり、小字名の混同から、一尾貝塚と命名され、以後、現在にいたっている。

九州島の中央部には九州山脈が東西に分断するように横たわる。西側には九州山脈に源を発する、筑後川、菊池川、白川、緑川、球磨川等、九州の有数の河川が西流し、流域には筑後平野、玉名平野、熊本平野、八代平野等、これまた九州有数の平野が広がっている。これらの河川はいずれも有明海、不知火海に流れ込み、河口には広大なデルタが形成されている。熊本平野の南端部を基部とし、宇土半島が西に向って突出し、有明海と不知火海を分断する位置関係にある。宇土半島に連なるように西に向って分布するのが天草諸島である。天草下島・上島・大矢野島を中心に大小120余の島々によって形成されている。天草諸島の存在は、有明海、不知火海の環境形成には重要で、その存在によって、両海とも波静かな内海を形成している。すなわち、有明海は東を熊本県の北部西岸の熊本平野・玉名平野、福岡県の南部西岸の筑後平野、北を佐賀県南部南岸の佐賀平野、西を長崎県の南部東岸の諫早平野、島原半島東岸、南を天草諸島北岸、宇土半島北岸によって囲まれ、外海の東支那海とは早崎瀬戸によって結ばれている。不知火海は熊本県の南部西岸の八代平野、葦北部の西岸、鹿児島県北部西岸、北を宇土半島南岸、天草上島南岸、西は大草下島東岸部、南は獅子島、長島によって囲まれ、外海の東支那海とは長島海峡・黒瀬戸でつながっている。有明海と不知火海は宇土半島と戸馳島・維和島の間のモタレの瀬戸・巖々瀬戸・大戸瀬戸と天草上島・下島の間の本渡瀬戸でつながっている。

有明海と不知火海は前述したように広大な干潟が存在し、魚類の格好の棲息地となっている。このような状況は縄文時代前期以降、大きな変化はなかったと考えられる。縄文時代はこのような自然環境を背景として、多くの貝塚が形成されている。九州で最も貝塚の集中する地域であることは周知のことである。代表的な貝塚を列挙すると玉名平野では、縄文時代前期の尾田貝塚をはじめ、中期では初資料が出土したとされる古閑原貝塚、竹崎式土器の標式遺跡である竹崎貝塚、後期の繁根木貝塚、平野の最も奥にある若園貝塚は現在の海岸線から約15kmも離れている。玉名平野の北側、荒尾市境崎貝塚は構成貝種がシオフキの単一種で占められる晩期の大規模貝塚である。熊本平野北部では都市化が速く進んだため、貝塚は多くは知られてい

ないが、沼山津貝塚・渡鹿貝塚等が所在する。熊本平野南部から宇上半島基部にかけては貝塚の密集地で、標式遺跡として著明な貝塚が多い。御領貝塚・阿高貝塚・曾畑貝塚、鼻貝塚はその代表例である。平野の最奥部にある貝塚は甲佐町辺田見貝塚で、現在の海岸線から約20kmはいり込んでいる。最近調査された城南町黒橋貝塚からは多量の遺物が出土し、縄文時代の解明に多大な成果を得ている。八代平野では山麓部に貝塚が分布するが、有佐貝塚のように低地の中にある貝塚や西平貝塚のように丘陵頂部に形成された貝塚もある。大野貝塚はエワード・モースが調査したことで有名である。八代平野より南には南福寺式土器の標式遺跡である南福寺貝塚も分布している。

貝塚は主に有明海・不知火海の東海岸部に集中している。これは両地域にデルタが発達し、貝の生息に適していたからであって、他の地域が、環境として適していない訳ではない。貝採集を除けば、他の周辺地域も縄文人にとって格好の採集地であったことは疑いない。特に、後述するように天草諸島では縄文時代遺跡の発見が相次ぎ、その内容もかなり明らかになりつつある。大部分の遺跡は表面採集による確認であるが、発掘調査を実施すると、意外に豊富な内容をもっている。松島町前島遺跡では押型文土器の包含層が確認され、牛深市椎ノ木崎遺跡では中～後期の低湿地遺跡が調査され、柄本町古江遺跡では前期の扶杖耳飾が出土している。本渡市大久遺跡は前期から後期の土器が層的に出土し、天草における縄文土器の変遷を把握することができた。五和町に目を転じると二江沖ノ原貝塚が注目される。沖ノ原貝塚の出土品は多量で、その内容も豊富である。西北九州型結合釣針、単式釣針、籠頭鉾、ヤス、組合せ石鈺、尖頭杖、双角状礫石器等の漁撈具は、天草における縄文人の特性を示すものである。このような中において、一尾貝塚の占める位置は重要である。

一尾貝塚は沖ノ原貝塚とは直線距離にして東に5kmの所に位置し、同様に大矢遺跡の北2.5kmの所に位置している。分布の上からも一尾貝塚の位置は、天草縄文人のテリトリーを考えると上でも示唆的である。

2. 遺跡の立地と周辺地形

五和町御領の周辺は、天草諸島の中においてやゝ特異な地形を示している。天草諸島の大部分の地形は、基盤層が第三紀層に覆われているために、山地はやせ尾根となり、海岸部近くまで迫り、平坦地の少ない島特有の地形を示している。これに対して、御領周辺部には阿蘇溶結凝灰岩（いわゆる灰石）である阿蘇IVが基盤層として厚く堆積している。このため、御領周辺の阿蘇IVの分布範囲では、丘陵部は標高20～30mの平坦な低丘陵状をなして広がっている。これらの低丘陵は侵蝕を受けやすく、小河川の流域には侵蝕によって形成された狭小な谷が複雑にはいり込み、特異な地形をつくり出している。なお、丘陵端部は侵蝕のために切り立った



Fig. 2 遺跡の立地と周辺地形

急崖をなしている。

御領町の中心部は、御領の南部を東流する中洲川と貝津川の合流する所に形成された低地に存在している。中洲川、貝津川は御領では比較的大きい川で、その流域の低地は比較的幅広く、奥部まで続いていて、複雑な谷地形をつくり出している。北側は中洲川の支流や御領、浜田の小谷を流れる小河川であるため、侵蝕によって形成された谷は幅も狭く、その奥行きも南に対して短い。

一尾貝塚は北部に解折された谷のうち、最も東に位置する谷の奥部に位置している。谷の開口部には現在、幅狭い平地が存在するが、最近までは海に直面していた。開口部の幅は300mを測る。開口部には幅30mの堤防状の高まりが、低く帯状に連なり開口部を塞いでいる。この高まりは近世の干拓に伴う堤防である。堤防の内側は低湿地となり、現在は水田となっている。この谷の奥行きは約600mを測る。谷の奥部には小さな舌状台地をはさむようにして二手に別れる。

貝塚は東側台地が谷の中位で西(谷部)に向かって突出した丘陵部の南麓部に位置している。この南麓部の上部は急崖となり、下部にやゝ狭いが段丘状の平坦面が形成されている。平坦面は幅15m前後で、東側台地の崖面に沿って、約150mの長さで弓状にのびている。この段丘状の平坦面と低地の間は2m前後の急崖となっている。貝塚はこの段丘状平坦部の平端部に形成され、表面的な観察からは、段丘状の平坦面の斜面から低地にかけて形成されているようにみえる。ただし、発掘調査の結果、段丘状の平坦面から低地にかけて存在する貝層の下位に砂丘が形成されていることが判明した。砂丘上部には中期土器の包含層が形成され、それに続いて貝層の形成があり、段丘状の平坦部の形成は少なくとも、貝塚形成後によるものである。砂丘の規模、分布は小範囲の発掘区から推定するのは困難であるが、段丘状の平坦面と関係あるものとみて、丘陵下に、約150mの長さで弓状にのび、幅は25～30mの規模で存在すると考えられる。よって、貝塚はこの小規模な砂丘上の西端に立地していることになる。

3. 天草諸島の縄文時代遺跡

天草諸島の縄文時代遺跡については、発掘調査が実施されるようになり、内容もかなり明らかになってきた。特に、五和町沖ノ原貝塚の発掘調査は、天草の考古学研究者に強い刺激を与え、天草各地で縄文遺跡の調査が始まった。

昭和30年までに、大草諸島で発見されていた縄文時代遺跡は、御所の浦島の飛竜山と一町田のヶ所である。採集された石器も石刃、石鏃と貧弱なものであった。天草各地で現地調査を進めたのは、教職員と所属する学校の生徒である。本渡市周辺では、鶴田倉造氏を中心とした本渡中学校郷土部、河浦町では隈昭志氏を中心とした河浦高校生。倉岳町では平岡勝昭氏、大

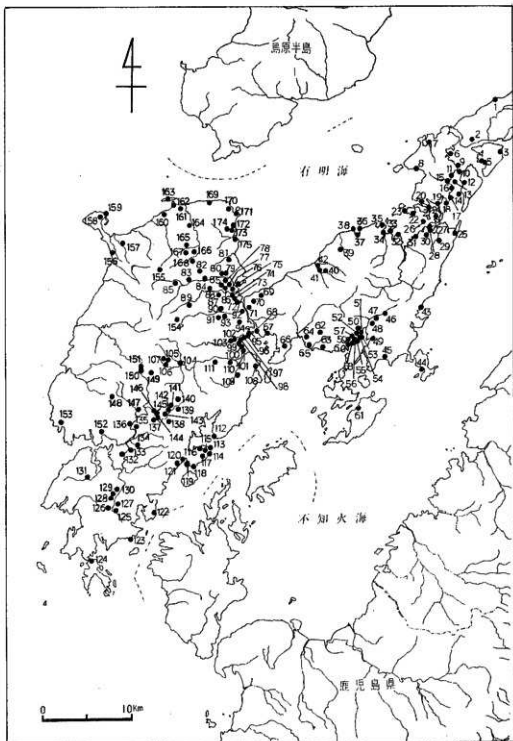


Fig. 3 天草縄文時代遺跡分布圖

矢野町、松島町では阿部堅二、徳永公路氏を中心とした大矢野高校生たちによって多くの縄文時代遺跡が明らかにされた。また、最近では本渡市在住の黒木雄二氏の天草全土における精力的な現地踏査によって明らかにされた遺跡も多い。また、全国的な開発ブームによって、各教育委員会によって明らかにされ、発掘調査された遺跡も多い。現在、天草諸島で明らかになった縄文時代遺跡は約200ヶ所にのぼる (Fig. 3)。これまで発掘調査が実施された縄文時代遺跡は松島町カルワ島遺跡 (Fig. 3 の分布図26. 以下同じ) 前島遺跡 (27) 柄木町古江遺跡 (65) 本渡市大矢遺跡 (75) 五和町一尾貝塚 (本報告書. 172) 沖ノ原貝塚 (162) 河浦町仕山遺跡 (152) 牛深市椎ノ木崎遺跡 (122) 等がある。草創期を除いて、早期から晩期まで存在している。

天草諸島における遺跡分布の特徴の一つとして海底遺跡群の存在をあげることができる。大矢野町、松島町、有明町、本渡市、新和町、河浦町、牛深市の二市五町にわたって存在する。現在、確認されている海底遺跡は38ヶ所以上である。時期的には早・前期の遺跡が多いが、早・前期～後・晩期と継続する遺跡も存在し、すべての遺跡を海進・海退現象で説明することはできない。海底遺跡の分布を検討すると、一部、上島の山間部を間にはさむが、大矢野、松島、有明の海岸部から本渡、新和、河浦、牛深の海岸部にかけて、すなわち、ほぼ北東から南西にかけ一直線にならんでいる。地震などの地殻変動との関係も強く示唆される。

また、遺跡分布に一つのパターンが存在する。遺跡が海岸部近くに位置する比較的大きな拠点的な大規模遺跡と小河川流域の山間部の小規模遺跡と二分されることである。大規模遺跡は前期以降に出現し、一定の地域の中で移動し、完結する。山間部の小遺跡は大規模遺跡に呼応するように分布し、その内容は、発掘された遺跡がないので判然としないが、石斧、石匙が数点存在し、他は多数の石鏝によって占められ、キャンプ的な遺跡である。大規模遺跡群と小規模遺跡群のまとまりが、テリトリーとして把握される。このテリトリーは5km四方の範囲で、その中に1～2本の小河川をもち、川口部にある程度の沖積地が存在し、その沿岸部も範囲に含んでいる。このテリトリー内での生活は、狩猟、漁撈、植物採集のすべての作業をそなえており、比較的、安定した生活を送っていたと考えられる。天草の遺跡分布から割り出されるパターンである。

出土遺物から見ると、沖ノ原貝塚、一尾貝塚、大矢遺跡、椎ノ木崎遺跡等から出土する西北九州型結合鈎針、オサンニ型結合鈎針、組合せ石銚 (銚頭、石銚)、礫石器は環状界灘漁撈文化圏を特徴づける漁撈具である。天草諸島の縄文文化遺跡は、環状界灘漁撈文化をささえた有力な地域であることがわかる。

第3章 調査の概要

発掘調査は擁壁工事に伴う緊急調査であったため、十分な調査体制、調査期間をとることができず、十分な現地調査を実施することができなかった。その欠を補うために、排土は層位ごとに採集し、後日、水洗選別を行うことにした。

先ず調査区の設定にあたっては、擁壁工事によって破壊される南側と西側の崖面に沿って、幅2m、東西10m、南北4m、面積約60㎡を調査対象とした。埋土、表土層をスコップで除去後、移植ゴテで層位的に発掘し、排土はすべて取りあげた。

貝層は当初考えた以上に厚く、分層が可能で、さらに間層をはさんで下部貝層を確認し、基盤層が砂層となっている。かつて、丘陵下に小規模ながら砂丘が形成され、遺跡はその上に立地していることが確認された。

出土石器は中期の並木式石器、阿高式石器、後期、南福寺式石器、出水式石器、市来式石器、鐘ヶ崎式石器、北久根山式石器が出土している。今回の調査区の主体を占めるのは後期石器で、中期石器はきわめて少なく、場所を異にしているとみられる。

出土石器には石鏃、石銛、石鋸、尖頭状石器、スクレイパー、磨製石斧、擦切具、双舟状礫石器等があり、そのうちの大部分は環玄界灘漁撈文化を特徴づける漁撈具であり、本地域の特異性を良く示している。擦切具の存在も貴重である。出土石器は多彩で、天草縄文人の生業活動を良く反映したものである。

骨角器、貝製品は主に水洗選別によって検出した。釣針、離頭銛、ヤス、骨ベラ、筭、耳飾り、貝刃、貝錘、貝製装飾品、貝製玉、歯牙製玉、貝輪等、約150点が出上している。量的には沖ノ原貝塚に次ぐものであり、天草では骨角器、貝製品の製作、活用が盛んであったことがわかる。釣針、離頭銛は先の石鏃等と同様に環玄界灘漁撈文化を特徴づける漁撈具の一つである。特に、今回出土したテングシの殻軸で作られたオサンニ型結合釣針の軸部は朝鮮半島との関係を知る上でも貴重である。各種の貝製玉や耳飾り、筭、貝輪は服飾の資料を資料を追加した。なお、オオッタノハの貝輪は南島との関連を示すものであり、縄文時代の交流範囲を知る上において、上記、オサンニ型結合釣針の存在と共に貴重な資料を提供することとなった。

水洗選別を行ったため、通常では見すぐす微小な遺物も検出することができた。特に自然遺物には有効で、獣骨、魚骨、植物依存体は多数検出することができた。今後、種の同定作業を進めるが、道具とその対象を有機的に把握することができるものと考えられる。

第4章 発掘調査の記録

1. 調査区の設定

調査区の設定は、擁壁工事が進行中であったため、今後擁壁工事によって破壊する部分についてのみ対象として設定した。擁壁工事が予定されていたのは南・西側の岸で、南側崖の東半分は既に工事が終了していたので、工事終了の西端を基点として、西に向かって8mの長さで、幅2mのトレンチを設定し、それぞれ2mで区画し、西より、A-1区、A-2区、A-3区、A-4区とした。また西側崖についてはAトレンチに接して直交するBトレンチ（幅2m、長4m）を設定し南側からB-1区、B-2区とした。Bトレンチの北側延長部分については、本波市教育委員会の平山豊弘氏に依頼し、土層断面実測をお願いした。

2. Aトレンチと土層堆積 (Fig.5)

Fig.5-1、2はAトレンチ北壁の土層断面図、3はA-1区東壁土層断面図、4はA-2区西壁土層断面図である。北壁を中心に土層をみていく。

第1層、昭和40年代の盛土。第2層、旧表土層。第3層、黄褐色粘土層、東に向かって厚さを増す。第4層、ブロック貝層。第5層、黒褐色粘土層。第6層、黒褐色粘質土層。第7層、第8層は純貝層。第9層、黄褐色粘土層、部分的に泥貝粘土層となっている。第10層、第11層、純貝層。第12層、黄褐泥貝粘土層。第13層、純貝層。第14層、赤褐色粘土層。第15層、黄褐色泥貝粘土層。第16層、赤褐色粘土層。第17層、純貝層、上部貝層の主要な貝層で、最も厚い所は50cmに達している。やゝ黒色をおびている。第18層、灰色をおびた純貝層、東側に片寄って堆積し、最も厚い所は約40cmに達する。第19層、第18層の下位にレンズ状に堆積。砂質土を含む貝層。第20層、調査区の全域に水平に堆積する。褐色砂層、部分的に貝を含む泥貝層である。第21層、褐色砂層。第22層、褐色泥貝砂層。第23層、部分的に褐色砂層を含む白色砂層。遺物はあまり包含されず間層として把握できる。第24層、赤褐色砂層、部分的に粘質土がみられ、生活面かと考えられる。B-1区では大部分が純貝層となっている。A-1区ではブロック状に貝層が形成されている。この層位を下部貝層として認識した。第25層、褐色砂層、遺物が包含されるが量は少ない。並木式土器、阿高式土器がある。第26層、黒色砂層、基盤層をなすと考えられる。湧水が激しい。海面下に位置していると考えられる。

3、4も基本的な層位は北壁と同じである。ベルトの最上層は第3層、黄褐色粘土層である。

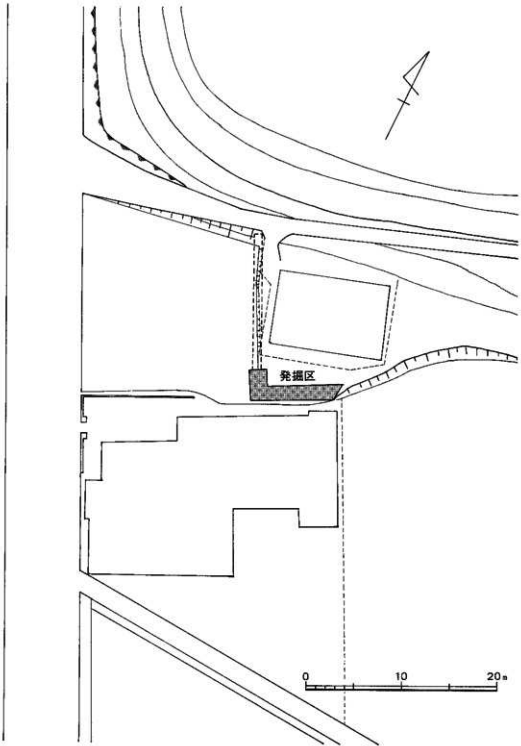


Fig. 4 調査区の設定

第3'層は中世の攪乱層、土師器が1点出土している。純貝層になっているので、判別が困難である。第7層、純貝層であるが、小さく分層できる。第17層と第24層の間には北壁にはない11層がある。第17'層は赤褐色粘土層、第17''層は混貝土層である。

3. B トレンチと土層堆積 (Fig.6)

B トレンチは崖下の西側畑地にあたるため A トレンチと上部は大きく異なるので、新たな層位番号をつけ、後で同一層を対応させる。

B-1 区北壁には表面から攪乱がはいっているが、これは、崖下に掘り込まれた溝と考えられる。第1層、畑の耕作土。第2層、黄褐色砂層。第3層、黒褐色粘土層。第4層、黄褐色粘土層。第5層、赤褐色粘土層。第6層、黄褐色粘土層。第7層、純貝層、厚い所で約40cmを有する。部分的に赤褐色混貝粘土層がレンズ状に介在している。一部に焼土を交えている。第8層、褐色砂層で部分的に貝を含み混貝砂層となっている。第9層、褐色砂層中に形成された純貝層。第10層、部分的に褐色砂層を含む白色砂層、遺物はほとんど含まず、間層となっている。第11層、赤褐色砂層、部分的に粘性が強く、焼土も含まれている。本調査区では大部分が貝層となっている。貝層は上下に分かれ上部を11'層、下部を11''層とする。第11'層はスガイの焼けた貝層で灰色をなす。純貝層である。第11''層は黄色混貝粘土層である。共に厚さ10cm前後で、下部貝層を形成している。第12層、褐色砂層で遺物を若干包含している。第13層、黒色砂層で基盤層となっている。第3層以下は A トレンチと大差ない。対応関係を示すと、B トレンチ第3層が第9層、第4層が第14層、第5層が第15層、第6層が第16層、第7層が第17層の上部貝層、第8層が第20層、第9層が第21層、第9'層が第22層、第10層が第23層、第11、11'、11''層が第24層の下部貝層、第12層が第25層、第13層が第26層に対応する。

4. 南北トレンチの状況

工事と併行して作図したために上記土層断面のつながり等不明な部分が多い。丘陵下の状況を知るためには有効である。

第1層、第1'層は埋土。第2層、灰層。第3層、近世の攪乱である。第4層、灰石の基礎。第5層、茶褐色粘土層。第6層、灰石礫。第7層、茶色粘土層。第8層、黄褐色粘土層。第9層、茶色粘土層。第10層、茶褐色粘土層。第11層、褐色粘土層。第12層、黄色粘土層。第13層、阿蘇溶結凝灰岩。第14層、黄灰色粘土層となっている。

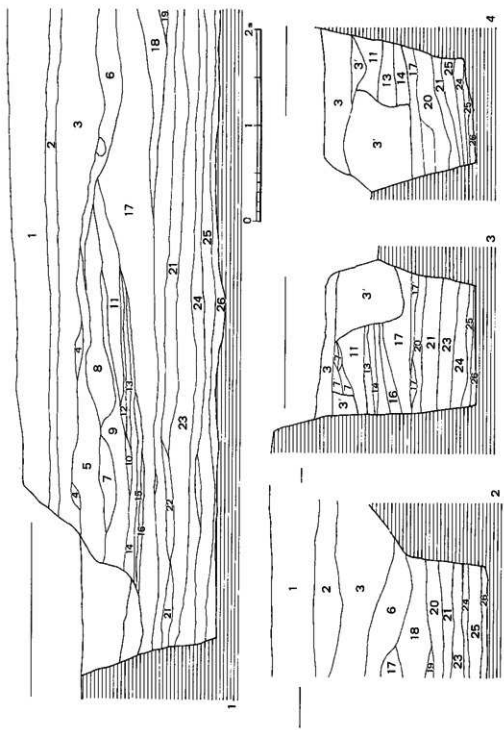


Fig. 5 A トレンチ土層断面実測図

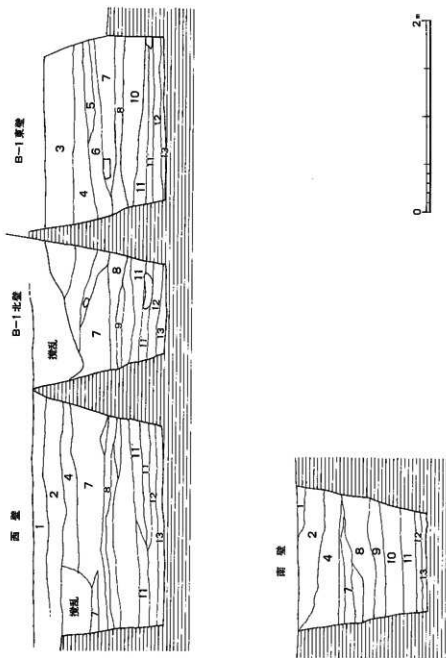


Fig. 6 B トレンチ土層断面実測図

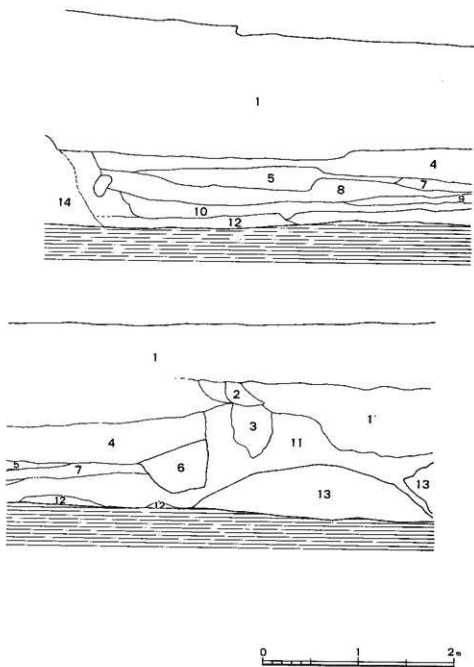


Fig. 7 南北トレンチ土層断面実測図

第5章 出土遺物

出土遺物は人別し、人工遺物と自然遺物とがある。人工遺物には、縄文土器、中世土器、土器片利用円盤、石器、骨角器、貝器、網炭化物等がある。自然遺物には貝殻、獣骨、魚骨、植物種子炭化物等がある。以下、それぞれの遺物についてみていく。

1. 土器、土製品 (Fig.8~31)

縄文土器は各層から出土し、その量は多い。型的には中期から後期中頃までの土器を含んでいるが、出土層位と出土土器の関係を整理時間の関係で十分把握していないので、代表的な土器を紹介し、詳細な分析等は後Hを期したい。なお、攪乱部には中世の土器、土製品、鉄滓等が若干含まれている。

(1) 縄文土器 (Fig.8~28)

Fig. 8-1はA-1区最下層の白色砂層より出土した土器である。やや磨滅している。本道跡で最も古い土器である。凹線で文様を描き、凹線間を刺突文で埋める。口縁部は同様の刺突で刻みを入れる。いわゆる並木式土器である。2は口縁部に近い胴部破片、凹線で曲線文様が描かれる。器壁が薄いため文様は裏面にも反映している。胎土には石英等の砂粒を若干含む。焼成は良好、色調は黒褐色をなす。3は口唇部を指頭によって刻む。口縁下に凹線二条がひかれる。胎土には石英、長石、片岩等の砂粒がやや多く含まれる。焼成は良好。外面が黄褐色、内面が黒褐色をなす。B-1区下部貝層出土。4は胴部破片。器面はヘラで調整され、そこにヘラ描きの曲線文が描かれる。内面は横位のヘラナデ調整。胎土には丸味をもった砂粒が混入されている。焼成良好。色調は外面が赤褐色、内面が黄褐色~黒色、A-1区砂層出土。5~14はいずれも口縁部破片である。5は口唇部にヘラによる刻目を入れる。口縁下は無文帯で、その下に平行凹線と列点を配し、文様を構成する。6は口唇部にヘラによる刻目を入れる。文様はヘラ描きで、口縁下にS字状文、その下に平行凹線を配している。二次的に火を受け変色している。7は口唇部にヘラによる細い刻みを入れる。文様構成は6とほぼ同じで、S字状文の下は列点文と平行凹線の組合せである。文様帯はわずかに肥厚している。8は口唇部に指頭による刻みを入れる。口縁下に指頭による列点文二列を配し、その下はヘラによる削り状の斜線を入れている。9は口唇部が平坦に仕上げられる。口縁下に指頭による列点文が三列施される。文様帯はわずかに肥厚している。内面には条痕状の調整痕が残る。粘土帯の接合部が明瞭に残っ

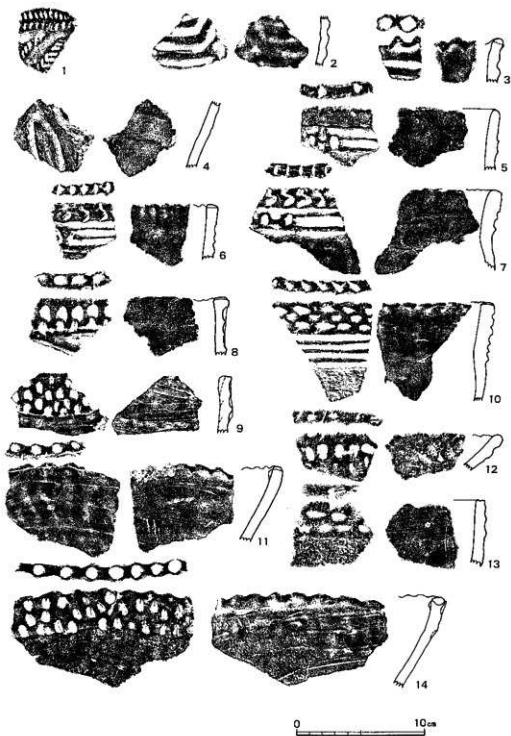
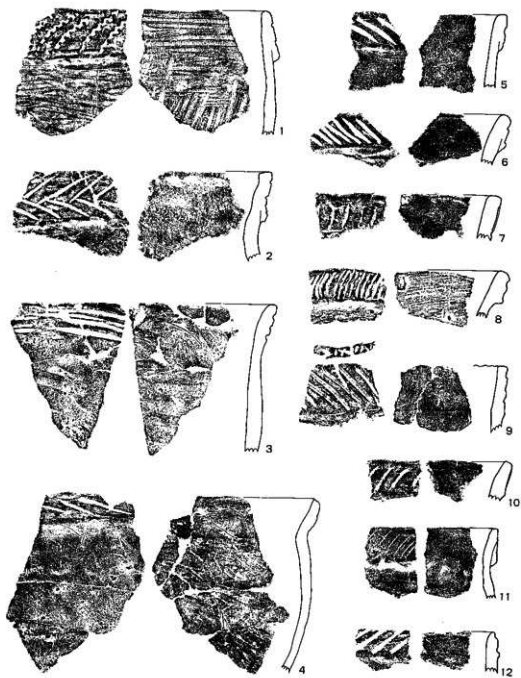


Fig. 8 縄文土器実測図 I

ている。10は口唇部がヘラによる刻み、口縁下に横位の列点文を三列配し、その下にヘラによる凹線を三条平行に配している。文様帯は若干肥厚している。11は口唇部に指頭による刻みを配す。外面は無文、粘土帯の接合部が細い線状をして明瞭に残っている。内面はナデ調整。12はやゝ磨滅している。口唇部に管状の工具で刺突し、刻目としている。口縁下は同様の工具で刺突した列点文二列を配している。13は口唇部にヘラで刻みを入れる。外面の口縁下には横位の列点文二列を配している。文様帯は若干肥厚する。内面は横の板ナデ状の調整痕がある。保存状態が悪くもろい。14はやゝ大きい破片である。口唇部には指頭による刻みを入れている。外面の口縁下には指頭による列点文三列を配している。文様帯は若干肥厚する。文様帯の下は横～斜位のヘラ研磨調整。内面には粘土帯の接合部が明瞭に残っている。粘土帯の幅は1.5cm前後である。胎土には、いずれも若干の砂粒が混入される。12は滑石のやゝ大きい粒が多量に混入されている。焼成は13がやゝ不良であることを除けば、すべて良好である。色調は5が外面黒色、内面赤褐色。6は二次加熱のため変色し、外面は白灰色～赤褐色、内面は赤褐色をなす。7は外面が灰褐色～黒褐色、内面が黄灰色をなす。8は外面黒色、内面赤褐色をなす。9は内外面共赤褐色をなす。10は外面が赤黄色、内面が黒灰色をなす。11は内外面共赤褐色で、外面に一部黒斑がみられる。12は外面が赤褐色、内面が黄褐色をなす。13は外面褐色、内面黄褐色をなす。14は外面が褐色、内面が黄褐色をなす。11、14は器形は鉢形をなすと考えられる。5、6、8、10、11、13、14はA-3区赤色砂層出土。7、9、12はB-1区下部貝層出土。

Fig. 9-1は、内外面共貝殻条調整。上半が横方向、下半が縦方向である。口唇部は粘土帯を貼り付けて肥厚させる。肥厚部にはアナダラガイ科の貝の腹縁を斜位に押しした文様をつける。胎土には砂粒を含む。焼成は良好。色調は外面が黒褐色、内面が赤褐色である。A-2区貝層4出土。2は口唇部に粘土帯を貼り付けて肥厚させる。肥厚した口唇部に沈線で矢羽状の文様を描く。口唇部内側は三角状に突出している。胎土には多量の砂粒を混入している。砂粒はやゝ大きいものも含まれ、黒曜石のチップも含まれている。焼成は良好。内外面共黒色をなす。A-3区出土。3は口唇部がわずかに外反する。口縁は凹凸がある。口縁下に4条の平行沈線をめぐらしている。内面は横位のヘラナデ調整である。胎土には砂粒を混入しているが、量は少ない。砂粒には黒曜石のチップも含まれる。焼成は良好。色調は内外面共に黒色をなす。A-1区出土。4は頸部でやゝしぼみ、口縁部は内傾気味に外反する。口縁部にはヘラ描き沈線で斜位の平行線を入れ文様としている。外面はナデ調整。口縁部内側は横位のヘラ研磨調整。胴内面は斜位のヘラ削り状のヘラナデ調整を施している。胎土には砂粒を混入しているが量的には多くない。焼成は良好。色調は外面が黒色、内面が黒褐色をなす。A-2区貝層4出土。5、6、8、10～12はいずれも口唇部に粘土を貼り付け肥厚させている。その肥厚部に斜位の平行沈線を描き文様としているが、沈線はそれぞれ特徴が異なる。5は沈線はやゝ太く、断面U字形をなす。6は5よりやゝ細い沈線で深く刻まれる。8の沈線は弧状を描き鋭いが、沈線に直交し



0 10cm

Fig. 9 縄文土器実測図 II

て細い条線がみられる。沈線が弧状を描くこと等からすると施文具は貝殻腹縁である可能性が高い。10は特徴的であるが施文具は不明。11の沈線はきわめて細い。12は6と同様の沈線である。7、9は口縁部の肥厚は顕著でない。7は肥厚する部分に横の沈線が施される。9は半截竹管状の工具によって沈線が施される。器面調整は大部分が横ナデ調整であるが、8は、内外面共に横位のヘラナデ調整である。11は横位のヘラ研磨がみられる。いずれも胎土には砂粒を混入している。焼成は良好。色調は5が内外面共黒褐色。6は外面が黒褐色で内面は赤褐色、一部黒斑がみられる。7は内外面共黒褐色。8は外面が黒褐色、内面が褐色をなす。9は外面が黄褐色、内面が赤褐色。10が内外面共黒色。11が外面黒褐色、内面黒色。12は内外面共黒色である。5はA-1区、B-1区間ベルト出土。6、8、12はA-3区出土。7はA-1区貝層出土。9はA-1区、B-1区間ベルト出土。10はA-2区、3区間ベルト出土。11はA-2区貝層4出土である。

Fig.10-1は頸部でやぐり、口縁部は外反する。口縁下に細い沈線を縦位に平行に配し文様としている。内外面共横ナデ調整。胎土には砂粒を混入するが量は多くない。焼成は良好。色調は外面が赤褐色、内面が黒褐色をなす。A-3区出土。2は、ほぼ直口する口縁部破片。外面の口縁下には、細い沈線で文様を描いている。文様構成は、2本の縦線を中心に、その両側に斜位の沈線で三角形を描くものである。内外面共横ナデ調整。胎土には砂粒を混入するが精良。焼成は良好。色調は内外面共赤褐色をなす。A-3区出土。3は胴部破片。文様は半截竹管状の工具を用いた沈線に描かれる。2本の縦線を中心に、その両側に斜位の沈線を組み合せ三角形を描いており、文様構成は2と同様である。外面は横ナデ調整。胎土には若干の砂粒を混入する。焼成は良く、色調は外面が黒褐色、内面が赤褐色～黄褐色をなす。B-1区混貝土層出土。4、8は同一個体と考えられる。口唇部にヘラで刻みを入れる。外面は無文、内面に細く鋭い沈線を入れ文様を描く。縦線と横線の組み合わせで構成される。胎土には若干の砂粒が混入される。焼成は堅緻。色調は4が褐色、8が赤褐色である。4がA-1区砂層出土。8がA-2区混貝砂層出土。5は口縁部に近い破片と考えられる。貝殻腹縁の押圧文が縦位に施文される。文様帯の下で若干くの字形に屈曲する。内面はヘラ削り調整。胎土には少量の砂粒が混入される。焼成は堅緻。色調は内外面共、上半が赤褐色で下半が黒色をなす。A-2区、貝層4出土。6は口縁部破片。口縁下に三条の平行沈線を施す。内外面共ナデ調整。胎土には砂粒を混入、焼成良好、内外面共に赤褐色をなす。A-3区貝層7出土。7は胴部破片。外面はヘラ削り状のヘラナデ調整。浅いヘラによる沈線で平行線を描く。胎土にはやや大きい砂粒を含んでいる。焼成は良好。色調は外面が赤褐色、内面が黄褐色をなす。B-1区下部混貝層出土。9は口縁下に断面三角形の貼り付け突帯をめぐらす。突帯には細い沈線で刻目が施される。口縁と突帯の間は沈線で囲んだ長方形を二段に配している。内面は細い横位の条線を施し、上からナデ調整を加えている。胎土には砂粒を混入、焼成は良好、色調は内外面共に赤褐色をなす。B-1区下

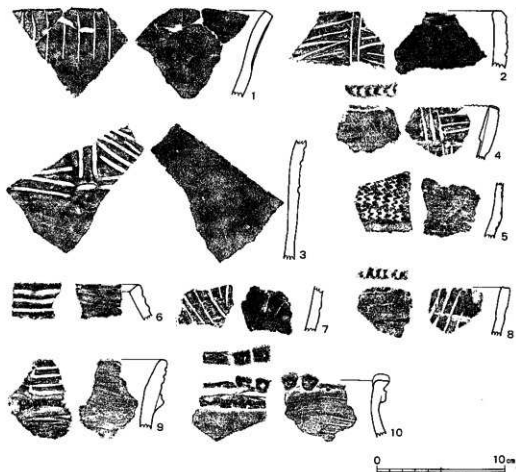


Fig.10 縄文土器実測図Ⅲ

部貝層出土。10は口縁部破片。粘土を貼り付けて肥厚させ、口縁直下に沈線一条をめぐらしている。また、口唇部には粘十紐を2ヶ所に貼り付けて装飾性を加えている。胎土は精良、焼成は堅緻で、内外面共赤褐色をなす。A-1区貝層6出土。

Fig.11-1~24はいずれも口縁部破片である。1は口唇部がやゝ肥厚し、端部にはヘラで刻みが入られる。口縁下にはヘラによる短曲線で文様を描く。胎土には砂粒を含むが精良、焼成良好で、内外面共赤褐色をなす。A-3区赤褐色砂層出土。2は口縁部直下に粘土を貼り付け肥厚させるがいびつである。口唇部外側にヘラで刻みが入られる。肥厚部より下には貝殻腹縁の押圧文が入られるが不明瞭である。胎土には大粒の砂粒を混入する。焼成は良好。内外面共褐色をなす。A-2区貝層4出土。3は口縁部に棒状工具で太目の刻みを入れる。口縁部は粘土を貼り付け帯状に肥厚させる。肥厚帯にはヘラによる斜線を入れ文様としている。胎土に



Fig.11 縄文土器実測図Ⅳ

は砂粒を混入し、焼成は良好。内外面共赤褐色をなす。A-3区亦褐色砂層出土。4は口縁部に粘土を貼り付け肥厚させる。肥厚部にはさらに粘土紐の貼り付けと三角形の彫り込みを入れ文様帯としている。器壁はヘラ研磨される。胎土には砂粒が多く混入されている。焼成はやゝ不良。色調は内外面共黒褐色をなす。A-3区貝層7出土。5は口唇部にヘラで細い刻みを入れる。口縁部には粘土紐を貼り付け区画をつくる。粘土紐には棒状工具で刺突文が入れられる。区画内にはヘラによる斜線を入れる。胎土には砂粒を含み、焼成は良好、色調は赤褐色をなす。A-3区出土。4は口縁に粘土を貼り付け狭い帯状に肥厚させ、その部分にヘラによると考えられる凧形文を施文している。胎土には若干の砂粒が混入するが精良、焼成は良く、内外面褐色をなす。A-2区貝層4出土。7は口縁部に粘土を貼り付け、断面カマボコ形の狭い肥厚帯をつくり、肥厚帯に棒状工具で斜線を平行に施文する。胎土には砂粒を混入、焼成は良く、色調は外面が黒褐色、内面が黄褐色をなす。A-1・2区間ベルトの攪乱部出土。8は口縁部に粘土を貼り付け、狭い肥厚帯をつくり、肥厚帯に指による刺突文を施文する。頸部は屈曲し、外に張る。胎土は精良、焼成は良く、内外面共黒褐色をなす。外面にスガが付着する。A-3区出土。9は口縁部内側に粘土が貼り付けられ、わずかに肥厚する。外面はヘナタリ等の小巻貝による貝殻条痕調整。内面はナデ調整。口唇直下に棒状工具による刺突文をめぐらす。胎土はやゝ大きい砂粒が含まれる。焼成は良く、色調は外面が黒褐色、内面が褐色をなす。A-1、B-1区間ベルト出土。10は内外面共ナデ調整。口縁下に断面三角形のやゝ高い突帯一条をめぐらす。口唇部外側の直下に棒状工具による細い刺突文を一列めぐらしている。また、突帯の上面には細い沈線の刻みをめぐらしている。胎土にはやゝ粒の大きい砂粒を含む。焼成はやゝもろい。色調は外面が褐色、内面が黒褐色をなす。A-1区貝層7出土。11は口縁部に粘土を貼り付け、狭い肥厚帯をつくり、そこにヘラ描きの二条の沈線を施す。胎土は精良、焼成は良く、内外面共黄褐色をなす。A-3区貝層1出土。12は口唇部を平坦に仕上げ、口縁下にやゝ幅広の断面三角形の突帯一条をめぐらす。口縁直下から突帯にかけて、棒状工具によって細い沈線が斜位に平行に施文される。胎土には砂粒を多く含む。焼成は良好、色調は内外面共赤黄色をなす。A-3区出土。13は口縁部に粘土を貼り付け、断面三角形に肥厚帯をつくり、その下半に棒状工具による細い沈線を平行に施す。胎土は砂粒を多く含む。焼成は良好。内外面共赤褐色をなす。A-2・3区間ベルト出土。14は凹線と刺突文の文様を施文する。胎土は精良、焼成は良く、内外面共赤褐色をなす。A-1区貝層7出土。15は口縁部に粘土帯を貼り付け、断面カマボコ形に肥厚させ、肥厚部に細い沈線を斜に平行施文する。粘土の接合部は明瞭に残っている。胎土は砂粒を混入するが良質、焼成は良く、色調は内外面共白灰色で一部褐色をなす。A-3区出土。16は口唇部を欠く。粘土を貼り付け、断面三角形に肥厚させ、肥厚部の中央に細い短沈線が斜位に平行に施される。内外共ナデ調整。胎土、焼成共に良く、内外面共黄赤色をなす。A-2・3区間ベルト出土。17は口縁部が肥厚する。沈線と刺突文を組み合わせた文様を施文する。内面は

ヘラ削り状の調整。径が小さいので、脚台の破片の可能性もある。胎土、焼成は良く、内外面共黒褐色をなす。A-3区出土。18は口縁部に粘土紐をめぐらし肥厚させる。胴部が張り、無頸の壺形をなす。口縁下に貝殻腹縁の押圧文(?)を平行に施す。胎土には砂粒を混入、焼成は堅緻、色調は内外面共褐色をなす。A-1・2間ベルト出土。19は口縁部に粘土を貼り付け断面三角形に肥厚させる。肥厚部にヘラで太い押え状の刺突文を施す。胎土には砂粒を多く含む。焼成はやゝもろい。外面は黒褐色、内面は黄褐色をなす。A-3区出土。20は口縁部に粘土を貼り付け、狭い肥厚帯をつくり、その部分に棒状工具で短沈線を平行に施す。胎土に多量の砂粒を混入、焼成はやゝもろい。内外面共黒褐色をなす。21は口縁部に粘土紐を貼り付け肥厚させる。胴部は外にはり、18と同様の器形をなす。粘土の貼り付けは明瞭である。胎土、焼成は共に良く、内外面共灰褐色をなす。A-2区貝層4出土である。22は口縁部に粘土を貼り付けて、狭い肥厚帯をつくり、頸部にヘラで沈線文様が施される。胴部は外に張ると考えられる。胎土、焼成は共に良く、外面は赤褐色、内面は黒褐色をなす。B-1区下部混貝層出土。23は口縁部に粘土帯を貼り付け肥厚させ、刺突文を施す。山形口縁をなし、山形の頂部には口唇部をささみ込むように、粘土紐が三本が貼り付けられている。胎土は砂粒を含むが精良、焼成は堅緻、外面は赤褐色、内面は黒褐色をなす。A-2区貝層4出土。24は口縁部を肥厚させ、肥厚部に凹線と刺突文を施す。口唇部に粘土のコブを三個並列させ、上から刺突を加えている。胎土には砂粒が多い。焼成はやゝもろい。外面は黒褐色、内面は赤褐色をなす。A-1区貝層6出土。

Fig. 12-1は口縁部に粘土を貼り付け、狭い肥厚帯をつくり、その下端に貝殻腹縁あるいはヘラで刻みを入れている。口縁部は山形口縁になるが、頂部の数は不明。器壁の内外面は横方向のヘラ研磨調整。肥厚帯の粘土の貼り付けは粗雑である。胎土には砂粒を多く含む。焼成は堅緻、色調は外面が赤褐色、内面は黒褐色をなす。A-1区貝層4出土。2は口縁部に粘土を厚く貼り付け、断面三角形の狭い肥厚帯をつくり出す。口縁部は山形をなすが頂部の数は不明。肥厚帯に文様を施す。頂部に沈線で楕円形状に曲線を描き、その両側に短沈線の斜行する平行線を配し、一定の間隔で斜線の方向を変え、文様効果をあげている。内外面共ココナデ調整。胎土には多量の砂粒を含む。焼成は堅緻、色調は外面が黄褐色～黒褐色、内面が黄灰色～黒褐色をなす。A-3区貝層出土。3は口縁部に粘土を貼り付け、断面三角形の肥厚帯をつくる。肥厚帯にはヘラによる三角形の刺突文を入れる。口縁部は山形をなすと考えられる。内外面共粗いヘラナデ調整である。胎土には若干の砂粒を含むが精良、焼成は堅緻、色調は内外面共黒褐色をなす。A-3区貝層出土。4は口縁部のやゝ下方に粘土を貼り付け、口縁部の形状を断面三角形にしている。肥厚部に三本の沈線をめぐらす。器体内外面は細い条痕の上に横方向のせまいヘラ研磨調整が加えられる。胎土には多量の砂粒が混入される。焼成は良好。色調は内外面共に黒褐色をなす。B-1区出土。5は口縁に幅2cm前後の粘土帯を貼り付け、断面三角形に肥厚させているが、やゝ粗雑である。肥厚帯にはヘラによる細い弧状の斜線を平行に施文して

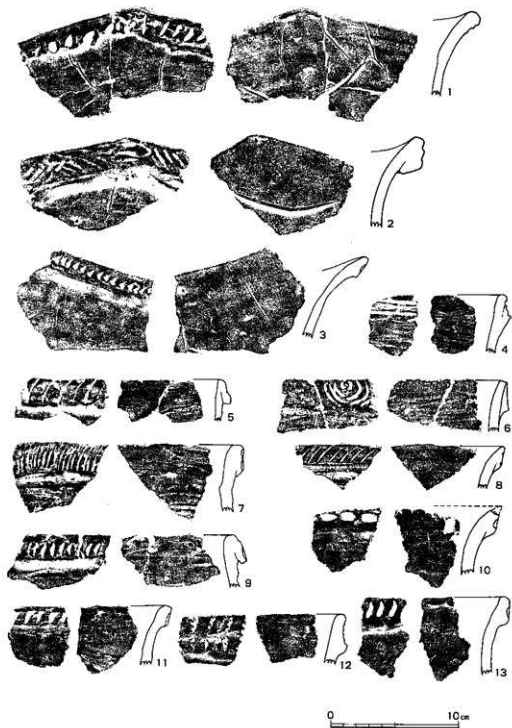


Fig. 12 縄文土器実測図 V

いる。口縁部外面は横ナデ調整、口縁下と内面はヘラ削り調整。胎土には若干の砂粒を含むが精良、焼成は堅緻、内外面共黒褐色をなす。A-2区貝層4出土。6も同様に粘土帯を貼り付け、断面三角形に肥厚させている。肥厚帯には沈線で同心半円の文様が描かれる。外面はヘラナデ調整、内面はヘナタリ等の小巻貝による横方向の貝殻条痕調整。胎土にはやゝ太い粒子の砂粒を多く含む。焼成は良好。色調は内外面共赤褐色をなす。A-1・2区間ベルトの擾乱部より出土。7は粘土帯を貼り付け肥厚帯をつくり出す。肥厚帯にはやゝ凹弧を描く細い条線のはいった原体（貝殻腹縁か）で平行斜線が施文される。内外面共、粗いヘラナデ調整、胎土は砂粒を混入するが精良、焼成は堅緻、色調は内外面共赤褐色をなす。A-3区貝層出土。8は粘土を貼り付け、断面三角形に肥厚させる。肥厚帯に細沈線の斜線が平行に施される。胎土は砂粒を混入するが精良。焼成は堅緻、色調は外面が黄褐色、内面が黒褐色をなす。A-2・3区間ベルト出土。9も同様に口縁部に粘土帯を貼り付け肥厚させる。肥厚帯の下半に片寄って短沈線が平行に施文される。施文原体は7と類似したものである。外面は上半が横ナデ、下半がヘラナデ調整、内面は粗いヘラ研磨調整である。胎土は砂粒を含むが精良、焼成は堅緻、内外面共黒褐色をなす。A-3区貝層7出土。10は口縁端部を欠損している。他と同様に口縁部に肥厚帯をつくり、凹線の短直線文を並列施文している。器壁は内外面共横方向のやゝ粗いヘラ研磨調整。胎土にはやゝ太目の砂粒を含む。焼成は良好、色調は内外面共黒褐色をなす。A-3区出土。11も口縁部に粘土を貼り付け、狭い肥厚帯をつくる。肥厚帯の下半に棒状工具でやゝ弧を描く斜線を平行して施文する。沈線の中に細い条線が観察できる。外面はヘラナデ、内面はヘラ削り調整である。胎土に砂粒を混入する。焼成は堅緻、内外面共に黒褐色をなす。A-1・2区間ベルト出土。12は口縁下に粘土を貼り付け断面三角形の肥厚帯をつくる。肥厚帯にはアナグラガイ科の貝殻腹縁の押圧文を並列施文する。胎土には砂粒を含む。焼成は良く、色調は内外面共黒褐色をしている。A-2区出土。13は口縁部に粘土帯を貼り付け肥厚させる。肥厚帯にはヘラによる短直線を並列施文する。器面は内外面共横ナデ調整、胎土には若干の砂粒を混入する。焼成は良好、色調は内外面共黒褐色をなす。A-3区間層下貝層出土。

Fig.13-1～13はいずれも口縁部破片である。1は外面に条痕状のヘラナデ（研磨）を斜位に施す。口縁部には粘土紐二本をよったように組み合せ貼り付けて突起部としている。内外面共に粘土帯の積み上げが明瞭に残っている。粘土帯（紐）の幅は1cm前後である。胎土には多量の砂粒を含む。焼成は良く、色調は外面が赤褐色、内面が赤褐色から褐色をなす。2は口縁部に粘土を貼り付けて、やゝ幅広の肥厚帯をつくる。山形口縁で、頂部口唇部に粘土紐をW字形に貼り付けている。頂部をはさんで、肥厚帯には相反する斜位の短直線を平行に施す。内外面共ヘラナデ調整。胎土には多量の砂粒を混入、焼成は良好、色調は外面が黒褐色、内面が黒灰色をなす。A-3区貝層1出土。3は口縁下に粘土紐を貼り付け、断面三角形の突帯としている。山形口縁をなし、頂部には粘土紐を口唇部をはさみ込むように三ヶ所に配し、コブ状の突

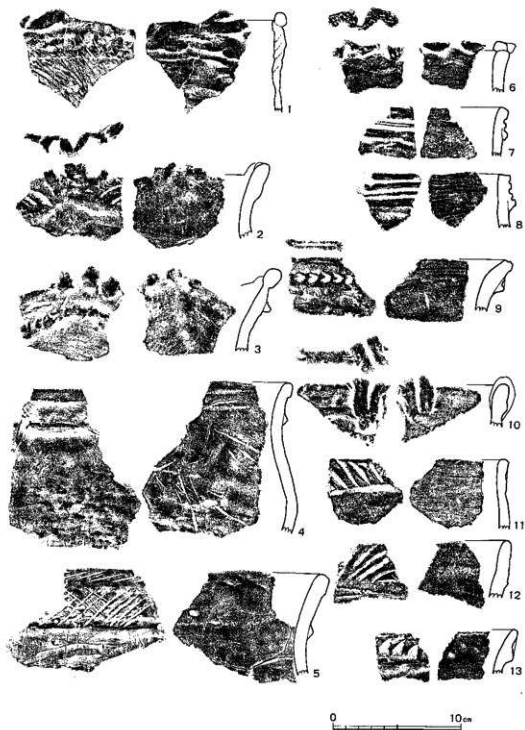


Fig.13 縄文土器実測図 VI

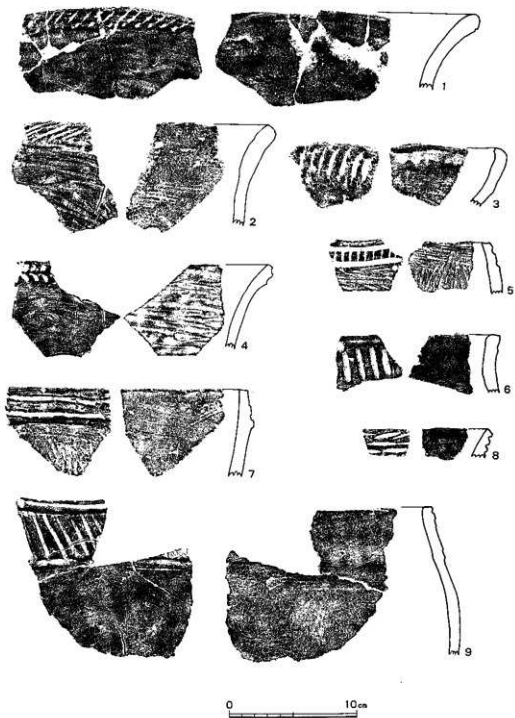


Fig.14 繩文土器実測図 VII

起としている。口縁部と突帯の間には深い横方向の短沈線を施す。また、突帯の上には小さい刺突文を連続施文する。器外面は横方向の細い条痕調整、内面はナデ調整。胎土にはやゝ粒の大きい砂粒を混入している。焼成は堅緻、色調は内外面共灰褐色をなす。A-2区貝層4出土。4は口縁部がやゝ外反し、胴部はふくらみをもつ。口縁部に粘土を貼り付け狭い肥厚帯をつくり、それより約1.5cm下位に断面三角形の突帯一条をめぐらす。口縁肥厚帯と突帯の間には薄く粘土を貼り幅広の凹線状にして文様効果を出している。内外面はヘラナデ調整で、内面には不定方向の棒状工具による沈線が多くみられる。胴部には粘土帯の痕跡が明瞭に残り、粘土帯の幅は2cm前後である。胎土には砂粒を混入する。焼成は堅緻、色調は外面が褐色、内面が黒褐色をなす。A-2・3区間ベルトの攪乱層より出土。5は口縁部に粘土を貼り付け、狭い肥厚帯をつくる。肥厚帯の下約2.5cmのところに断面三角形の貼り付け突帯一条をめぐらす。口縁肥厚帯には細沈線の斜線が施され、口縁下と突帯の間には細い沈線の斜線を組み合わせ、文様をつくり出している。内外面は横方向の粗いヘラ研磨調整。胎土には粒の大きい砂粒を含む。焼成は堅緻、色調は内外面共に黒褐色をなす。A-2・3区間ベルトの攪乱層より出土。6は口唇部に粘土紐をW字形に貼り付けている。粘土紐の上には貝殻腹縁による擬似縄文が施文される。器壁の内外面は横方向のヘラ研磨調整。胎土は砂粒を含むが精良、焼成は堅緻、色調は内外面共黒色をなす。A-1区貝層7出土。7は口縁に粘土を貼り付けやゝ幅広の肥厚帯をつくり、その部分に棒状工具による二条の沈線をめぐらしている。内外面共ヘラ削り調整、胎土は精良、焼成は良好。内外面共黒褐色をなす。8は口縁部に粘土を貼り付け、やゝ幅広の肥厚帯をつくり、棒状工具によって平行沈線三条をめぐらしている。外面はナデ、内面はヘラナデ調整で細い条線がつく。胎土には砂粒を混入、焼成は良い。内外面共褐色をなす。A-3区出土。9は口縁下にやゝ幅広の断面三角形の貼り付け突帯一条をめぐらす。突帯上面はヘラによる幅広の刺突文をめぐらす。外面はヘラ研磨調整。内面はヘラ削り。胎土には小石を含む。焼成はやゝあまい。内外面共黒褐色をなす。A-2・3区間ベルトの攪乱部出土。10は粘土を貼り付け口縁部に肥厚帯をつくる。この肥厚帯をはさみ込むように粘土紐二条を配し、文様効果を出している。外面から口縁内側は横ナデ、内面下半はヘラ削り調整。胎土には砂粒を混入するが良質、焼成は良く、色調は外面が褐色、内面が黒褐色をなす。A-3区出土。11は口縁下に凹線一条をめぐらし文様帯を区画し、文様帯にはヘラ描きの斜線を平行に施している。内外面共横方向のヘラ研磨調整、胎土は砂粒を混入するが良質、焼成は堅緻、内外面共赤褐色をなす。A-3区出土。12は口縁部に粘土を貼り付けわずかに肥厚させている。肥厚部の境の段の部分にヘラ描きの沈線を施す。肥厚帯にはヘラ描きの斜行平行線を施すが、破片の右側で斜線は直交するように変化し、三角形の文様を描くと考えられる。胎土に多量の砂粒を含む。焼成は良く、内外面共赤褐色をなす。二次的に火を受けている。B-1区下部泥貝層出土。13は口縁部に粘土を貼り付け、肥厚帯をつくり出す。肥厚帯の段は明瞭である。肥厚帯にはたい列点文が一列めぐ

る。胎土には砂粒を含む。焼成は堅緻で、内外面とも褐色をなす。A-3区出土。

Fig.14-1~9はいずれも口縁部破片である。1は口縁が大きく外反し、端部は肥厚しながら丸くおさめる。口唇部から口縁にかけてヘラによる細い斜沈線と刺突文が施される。内外面共横位のヘラ研磨調整。胎土には砂粒を含むが、良質、焼成は良好。色調は外面が褐色、内面が黒褐色をなす。A-1区貝層4出土。2は口縁部がやや肥厚し、丸くおさめている。口唇部から口縁部にかけてヘラによる細い沈線を斜位に施している。外面はヘラナデ後、粗い横位のヘラ研磨調整、内面は横位の貝殻条痕の上に横位のヘラナデ調整を加える。胎土に多量の砂粒を含む。焼成は良好。色調は外面が黒褐色で、ススが少量付着している。内面は黄褐色をなす。A-1・2区間ベルト出土。3は口縁部が内傾している。口縁内側に粘土を貼り若干肥厚させている。口縁部にはヘラ描きの縦沈線を平行に配している。外面はヘラナデ調整。内面は口縁直下は指押えの痕跡が明瞭で、その上にヘラ削り状のヘラナデを施している。胎土には多量の砂粒が混入されている。焼成はややもろい。色調は外面が赤褐色、内面が黒褐色をなす。A-2区貝層4出土。4は口縁部が外反する。口縁部には粘土を貼りつけ、狭い肥厚帯をつくり、そこに上下二段に刺突文をめぐらす。刺突文は互に向き合い八字状をなす。内外面共に横方向のヘラ研磨調整。胎土には少量の砂粒を含むが良質。焼成は堅緻で内外面共黒色をなす。A-2区貝層4出土。5は口縁部が内傾する。外面はヘナタリ等の小巻貝による横方向の条痕調整。内面も同様であるが、口縁直下が横方、それより以下は縦方向である。文様は口縁部下に棒状工具によって二本の平行沈線を施し、沈線間にヘラ状工具による縦線を平行に入れて埋めている。胎土は砂粒を混入するが精良、焼成は堅緻、色調は外面が赤褐色、内面が黄褐色をなす。A-3区出土。7は口縁部と胴部の境がゆるやかに屈曲する。屈曲部はわずかに肥厚する。口縁部にはやや太い凹線2条が平行にめぐる。外面の上半は横ナデ調整。下半は縦方向の粗いヘラナデ調整。内面は横方向のヘラナデ調整である。胎土には多量の砂粒を含む。焼成はややあまい。内外面共黒褐色をなす。A-1区貝層7出土。6は縦の短かい凹線を平行に配し文様としている。下半部を失っているため器形は不明であるが、下位で胴部が拡がる傾向をみせ、Fig.15-3の器形のような壺形土器の可能性もある。胎土には砂粒を含む。焼成は堅緻、内外面共褐色をなす。A-2・3区間ベルト出土。8は横の短沈線を三条にめぐらす。内外面共横ナデ調整。胎土に砂粒を含むが良質。焼成は良い。色調は外面が黒褐色、内面が黄褐色～黒褐色をなす。A-3区出土。9は口縁部に粘土を貼り付け、幅広い肥厚帯をつくるが、肥厚はわずかである。肥厚帯には口縁直下に凹線一条をめぐらし、その下位に斜位の平行凹線を配する。内外面共横方向のヘラ研磨調整。口縁は山形口縁をなすと考えられる。胎土には砂粒を含むが良質。焼成は堅緻、内外面共赤褐色をなす。A-3区貝層7出土。

Fig.15-1は復原口径25.0cm、口縁部は外に開き、頸部はややくびれ、胴部はゆるやかにふくらむ。山形口縁をなし、頂部は復原すると4ヶ所になる。山形はゆるやかにあがり、頂部は平

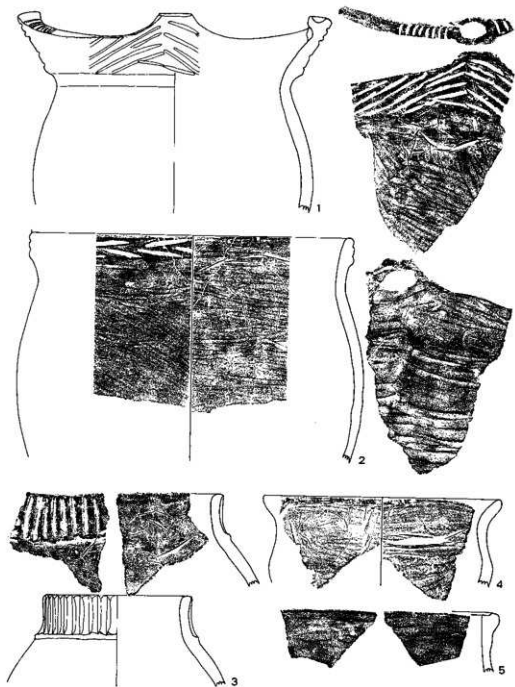


Fig.15 縄文土器実測図Ⅶ

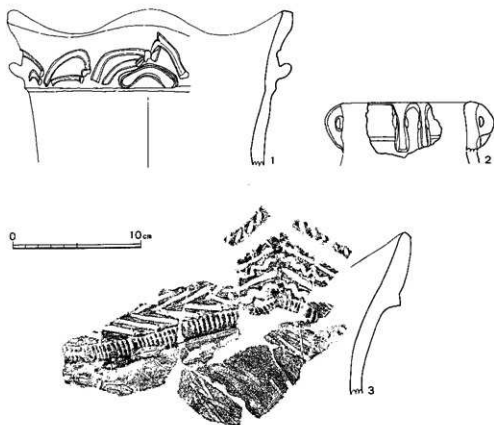


Fig.16 縄文土器実測図 IX

州にして、凹みを入れている。頂部の左右の口唇部には8本の刻み目を入れている。口縁部には粘土を貼り付けて、やや幅広の肥厚帯をつくり出し、斜位の沈線で施文しているが、頂部ではそれらの斜線が組み合い三角形になっている。胴部外面は横位から斜位にかけてのへら研磨調整。へら研磨には細い条線がつく。内面は粗い横方向のへら研磨調整である。胎土には砂粒を若干含むが精良、焼成は堅緻、色調は外面は黄赤色、内面が黒褐色をなす。B-1区下部只層出土。2は胴部上半の3分の1を残す大きな破片である。復原口径24.5cmを測る。口縁は直立し、胴部はやや膨らむ。口縁部には粘土を貼り付け、幅2.0cm前後の肥厚帯をつくり出す。肥厚帯には棒状工具による沈線を上下に相反するように組み合せた文様を入れる。外面は口縁部が横ナデ、以下は横位～斜位の丁寧なへら研磨調整。内面は横位の粗いへら研磨調整である。胎土には砂粒を混入しているが良質。焼成は良好、色調は外面が黄褐色～黒褐色、内面が褐色を

なす。A-3・4区出土。3は口唇部が平坦、口縁部はわずかに粘土を貼り付けているが、ほとんど肥厚していない。胴部は大きく外に張る。壺形の器形をなしている。口縁部にはヘラの縦線を削り状に平行に施文している。内外面共横ナデ調整。口縁部内側には黒色の付着物がみられる。復原口径11.8cmを測る。胎土には若干の砂粒を混入するが精良、焼成は堅緻、内外面共赤褐色をなす。A-3区出土。4は復原口径18.0cmを測る。口唇部は丸くおさめる。口縁部は外反し、胴部はやゝ膨む。内外面共横方向の丁寧なヘラ研磨調整。胎土に砂粒を含むが良質、焼成は良い。色調は外面が褐色～黒褐色、内面が黒灰色をなす。A-2区貝層4出土。5は口縁部が肥厚し、口唇部は段をもって面が異なる。内外共横方向のヘラ研磨調整であるが、やゝ粗雑である。胎土には若干の砂粒が含まれるが精良、焼成は堅緻、色調は外面が黒褐色、内面が黒灰色をなす。A-2・3区間ベルト出土。

Fig. 16-1～3はいずれも口縁部破片である。1は復原口径22.6cmを測る。口縁部はあまり外反せず、胴も張らない円筒形をなす器形を有する。口縁部は内側に粘土を貼り付け、やゝ肥厚する。口縁部は山形口縁になり頂部は4ヶ所に復原できる。頂部はゆるやかな山形をなす。口縁下3cm前後の所に、断面三角形の貼り付け突帯一条がめぐる。頂部の下、突帯に接して粘土を貼り付けて耳がつくられている。口縁部と突帯の間にはヘラ描きの太い凹線、刺突を組み合せて曲線文が施されている。外は上半部が横ナデ、下半部が縦方向のヘラナデ調整である。内面は上半部がナデ調整、下半部が横方向の貝殻底調整である。突帯接合部の内側には粘土帯の接合痕が明瞭に残っている。色調は外面が赤褐色、ススの付着が著しい。内面は黒褐色～黒色をなす。胎土には砂粒を混入しているが良質、焼成は堅緻である。A-1区、B-1区間ベルト出土。2は復原口径10.8cmを測る。口唇部は平坦に仕上げ、口縁部には粘土を貼り付け肥厚させる。口唇部から肥厚帯にかけて粘土紐2本を縦に貼り付け、ヘラで整形し、縦耳としている。耳の間の器壁には丹が塗られている。下半部を欠失しているため器形を知ることはできないが、壺形になる可能性が高い。内外面共、丁寧なナデ調整である。胎土には砂粒が多く混入されている。焼成は良好。色調は外面が黒褐色、内面が黒色をなす。A-1区、B-1区間ベルト出土。3は山形口縁をなす。大型の深鉢形土器である。山形になる部分は直線に高くなり、頂部は尖る。頂部には縦に突帯が貼り付けられ、口縁下めぐらされた断面三角形の貼り付け突帯と接合される。口唇部には頂部を境に方向の異なる斜線の刻目が入られる。口縁部と突帯の間には棒状工具で上下に向い合う斜線を入れ、山形では、その間に波状の沈線を入れ文様としている。突帯の上面にはヘラで押し引き風に平行沈線を施文している。器壁は内外面共横方向のヘラ研磨調整。胎土には砂粒を含み、大きい粒子もみられる。焼成はやゝもろい。色調は外面が赤褐色～黒褐色、内面が黄褐色である。A-3区出土。

Fig. 17-1～4はいずれも口縁部から胴部にかけての破片である。棒状工具によって沈線のみで文様を描き、磨消縄文をもたないものである。1は口縁部を肥厚させ、口唇部に浅い凹線



Fig.17 縄文土器実測図 X

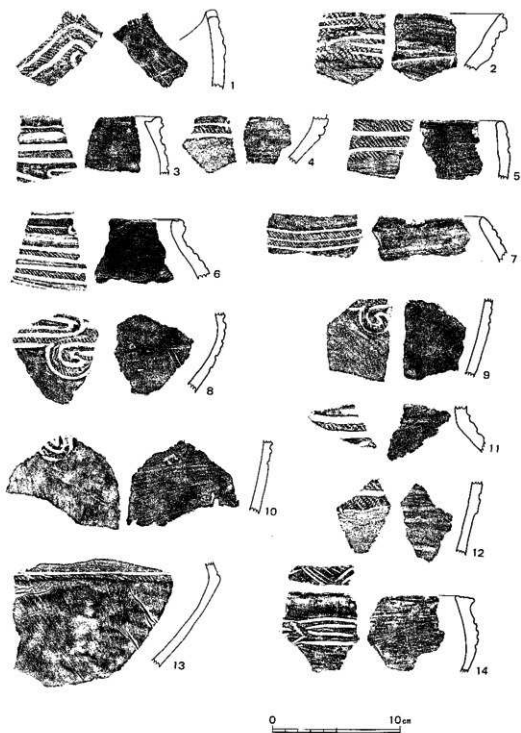


Fig.18 縄文土器実測図XI

をめぐらす。頸部がややくびれ、胴部はゆるやかに張るが、膨みは大きくない。器壁外面は口縁部から頸部にかけてはヘラナデ調整、胴部は横位～斜位のヘラ研磨調整。内面はヘラ削り状の粗いナデを加えた後に、さらに横方向の粗なヘラ研磨調整を加えている。文様は胴上半部に施文されている。棒状工具で平行した沈線を6条施し、下に渦文がみられる。渦文の位置が文様の集約部で、この部分の口縁が突起部分と考えられるが、欠失している。胎土には細い砂粒を若干含むが精良、焼成は堅緻、色調は外面は褐色～黒褐色をなすが、口縁部から胴部上半部にかけて大きい黒斑がみられる。内面は赤褐色をなす。精製土器である。A-3区出土。2は復原口径32.0cmを測る。口縁部が外反し、頸部はあまりくびれず、胴はほとんど膨らまず下半部に移行する深鉢形の土器である。わずかに山形口縁をなすが、突起はほとんどみられない。口縁部はわずかに肥厚する。口唇部は内側に一段低い平坦面をつくる。口縁部は突起部を中心に文様が施される。文様は中心部で曲線を組みあわせ、その左右は対称に短曲線の刻目を入れている。口唇部の下段にも短直線の刻みを左右対称に施す。突起の下には波状曲線を対照的に配し、その下に四条の平行沈線をめぐらしている。さらに突起部の下に渦文を配する。器壁外面は丁寧なヘラナデ後、ヘラ研磨を加えている。内面は同様に横位のヘラナデ後、口縁部のみに横位のヘラ研磨調整を加えている。胎土は精良、焼成は堅緻、色調は外面が黒褐色、内面が黒灰色をなす。A-2・3区間ベルト出土。3は山形口縁をなす。口縁部は肥厚する。口縁直下に一条の沈線をめぐらし、山形の頂部はコブ状に張り出す。口唇部の文様構成は前者とほぼ同様で左右対称である。胴部文様もほとんど同じであるが、突起部の直下で沈線でT字形に囲まれ飛び出している。器面は内外面共に横位～斜位のヘラ研磨調整、胎土は砂粒（黒曜石チップも入っている）を含むが良質、焼成は良好で、色調は外面が黒色～黒褐色、内面が黄褐色～黒色をなす。A-2・3区間ベルト出土。4は器形は前三者と同様であるが、胴部文様をもたず無文である。口縁部は他と同様に肥厚する。口唇部に二条の沈線をめぐらす。左端に沈線と重複してヘラで粗雑な刻目がみられるので隆起部に近い可能性がある。内外面は粗い横方向のヘラ研磨調整。胎土には若干の砂粒を含む。焼成は堅緻、色調は外面に鉄分の付着が激しいが本来は黒褐色、内面は灰褐色をなす。A-2区貝層4出土。

Fig. 18-1～3, 5～7, 14は口縁部破片、残りの4, 8～13は胴部破片である。1は山形口縁をなし、高く隆起する。頂部にはV字形の刻みが入られる。山形の隆起に沿って、ヘラ描きの沈線を二条入れ、その下に入組文を配し、入組文より上に磨消縄文が施文されるが、縄文は沈線を引いた後に入れられる充填縄文である。器面は内外面共ヘラ研磨調整。胎土には少量の砂粒を含むが良質。焼成は堅緻、色調は内外面共に赤褐色をなす。A-2区貝層4出土。2は口縁部に粘土を貼り付け、肥厚帯をつくる。口唇部から肥厚帯に文様が施文されている。文様は、口唇部に二条、肥厚帯に三条の棒状工具による短直線を一定の間隔をおいて平行に配し、その上に縄文を施文し、磨消縄文的な効果を出している。内外面は粗い条痕の上に横位のヘラ

ナデ調整を加えている。胎土には少量の砂粒が混入されている。焼成は良好。色調は内外面共黒褐色をなす。B-1区下部貝層出土。3は口縁部が肥厚する。棒状工具によって、口唇部、口縁肥厚部に一条の沈線がめぐり、胴上半部には五条の沈線が配され、口縁部の沈線の下位、胴上半の沈線間には無文帯をはさんで細かい縄文が施文されている。さらに縄文施文部の両側の沈線には丹彩がおこなわれている。器壁は内外面共横方向の丁寧なヘラ研磨調整。胎土は砂粒を混入するが良質、焼成は良好。色調は外面が黒褐色、内面が灰褐色をなす。A-1区貝層7出土。4は胴の下半部の破片と考えられる。断面三角形の平行沈線三条がめぐり、下の沈線間に充填縄文が施文される。器面の内外面は横方向のヘラ研磨調整。胎土には若干の砂粒を含むが良質、焼成は堅緻で、色調は外面が褐色～黒色、内面が黒色をなす。A-3区出土。5は口縁部がわずかに内傾する。口縁下に条線のつく棒状工具で二条の平行沈線をめぐらし、その上に縄文を施文しているが、縄文は下の沈線より下までおよんでおり、沈線との切り合い関係でも縄文があとであり、一見磨消縄文風であるが充填縄文であることがわかる。外面の横位のヘラ研磨調整は縄文施文後である。内面も横位の丁寧なヘラ研磨調整。内面に約半分にわたって赤色顔料(丹)が厚く残っている。鉢形土器で丹の入れ物としていたと考えられる。胎土には若干の砂粒が混入されるが良質、焼成は堅緻、色調は外面が褐色～黒褐色、内面は黒褐色をなす。A-1区出土。6は3とほぼ同様の器形をなす。口縁部は肥厚する。口唇部に一条、口縁肥厚部に一条の沈線がめぐり、口縁部沈線下に縄文を施文する。胴上半部には五条の平行沈線をめぐらし、上下二段に磨消縄文(充填縄文)が施文されている。器壁内外面は丁寧なヘラ研磨調整。なお、縄文施文帯とその上下の沈線部には赤色顔料が塗られていたと考えられ、わずかにその痕跡を残している。胎土には若干の砂粒が混入されているが良質、焼成は堅緻で、内外面共黒褐色をなす。A-1区・B-1区間ベルト出土。7は浅鉢形土器の口縁部でわずかに内傾する。口縁下に棒状工具による沈線三条が平行にめぐり、口縁直下は無文のままで、沈線間に細い縄文が施文される。器壁は内外面共横方向のヘラ研磨調整。胎土は多量の石英砂粒を混入する。焼成は堅緻、色調は内外面共黒色をなす。A-3区出土。8は胴部破片。渦文を主とした磨消縄文の文様を配する。縄文は充填縄文である。器面は内外面共横方向のヘラ研磨調整、胎土には砂粒を混入、焼成堅緻、色調は外面が黒褐色、内面は黒色をなす。A-2・3区間ベルト出土。9は胴下半。上半部に渦文が配され、沈線間には縄文が施文されているが、渦文の部分はその後斜方向のヘラ研磨調整によって大部分が消されている。内面も斜位のヘラ研磨調整。胎土には若干の砂粒を含むが精良、焼成は堅緻、色調は外面が褐色～黒色、即断はできないが、黒色顔料が塗られている可能性もある。内面は黒褐色をなす。A-2区貝層4出土。10も9とほぼ同じような部位の破片である。渦文の一部があり、沈線には赤色顔料がつめられていて、色あざやかである。焼成後に塗布されたものである。器面は内外面共斜位の丁寧なヘラ研磨調整、胎土には若干の砂粒が混入されるが精良である。焼成は良好で色調は内外面共黒褐色をなすが、

外面は9と同じように黒色顔料が塗られた可能性もある。B-1区出土。11は頸部から胴上半部にかけての小破片である。縄文を施文した後に棒状工具によって太い沈線が施されている。内外面共横方向のヘラ研磨調整であるが、内面はやゝ粗雑である。胎土にはやゝ太目の砂粒を混入する。焼成は堅緻、色調は内外面共赤褐色をなす。A-1・2区間ベルト出土。12は上部を肥厚させ、その部分に縄文が施文され、その後、棒状工具によって沈線二条が入れられている。下半部は巻貝による細い条痕の上に横位のヘラ削り調整を加える。内面には横位の細い条痕を施す。胎土には太目の砂粒が含まれる。焼成はやゝあまい。色調は内外面共褐色をなす。A-1区貝層7出土。13は胴下半部の破片で、胴中位でくの字に屈曲する。屈曲部よりやゝ上に沈線一条をめぐらし、沈線と屈曲部の間に縄文が施文され、その上にヘラ研磨状の浅い沈線2～3割を刻み状に間隔をおいて施している。器壁の外面は沈線より上が横位、屈曲部より下が斜位の丁寧なヘラ研磨調整、内面は横位のヘラ研磨調整、胎土には若干の砂粒を含むが精良、焼成は堅緻、色調は外面が黄褐色～赤褐色、内面が黒色をなす。A-3区出土。14は口縁が逆L字形をなす。口唇部に沈線を鋸歯状に組み合せた文様を配している。胴上半部には沈線のみを文様を配している。文様構成は二重の槽円形を横に連ねたものである。外面はヘラナデ調整、内面は横位のヘラ研磨調整、下半には細い条痕が残る。胎土には砂粒を混入する。焼成は堅緻、色調は外面が褐色、内面は黄褐色～黒色をなす。A-3区出土。

Fig. 19-1～8は口縁部破片、9～15は胴部破片である。1・2は口縁部がわずかに肥厚し、丸くおさめている。1は口唇部の下端に、2は口唇部全面に貝殻腹縁を押圧した擬似縄文を施している。1は外面は横位の丁寧なヘラ研磨調整で、頸部中位はさらに縦位のヘラ研磨調整を加えている。内面はやゝ粗い横位のヘラ研磨調整、胎土には小さな砂粒を加えているが精良、焼成は堅緻で、色調は外面が黄褐色で、一部に黒斑がみられる。内面は褐色をなす。A-3区出土。2は外面が縦位、内面が横位の丁寧なヘラ研磨調整。胎土は1と同様、焼成は堅緻で、色調は内外面共に黒色をなす。3は口頸部はちあがり、口縁部が外反する。胴部は大きく開いている。口唇部下端に貝殻腹縁を押圧した擬似縄文を施文する。内外面共横方向の丁寧なヘラ研磨調整、胎土には砂粒を混入しているが良質、焼成は堅緻。色調は内外面共に黒色をなす。2はA-2区貝層4出土。3はA-2・3区間ベルト出土。4は口縁部端の両側に粘土を貼り付け肥厚させ、断面形はT字形をなす。外面全面に縄文が施文されている。口唇部はヘラ研磨調整を加え、平坦に仕上げられている。内面は横位の丁寧なヘラ研磨調整。胎土には砂粒を混入しているが精良、焼成は良好、色調は外面が黄褐色、内面は黒褐色～黒色。A-2区貝層4出土。5は口縁部が帯状にわずかに肥厚している。肥厚部に縄文が施文されている。外面の肥厚帯以下と内面は横位のヘラナデ調整。肥厚帯の下に焼成後の穿孔がみられる。孔は径0.6cm、補修孔とみられる。胎土には砂粒を混入している。焼成は良く、色調は内外面共黒褐色をなす。A-1区貝層4出土。6は口縁部は直線的にちあがる。口縁部に棒状工具でやゝ斜位の沈線二条を

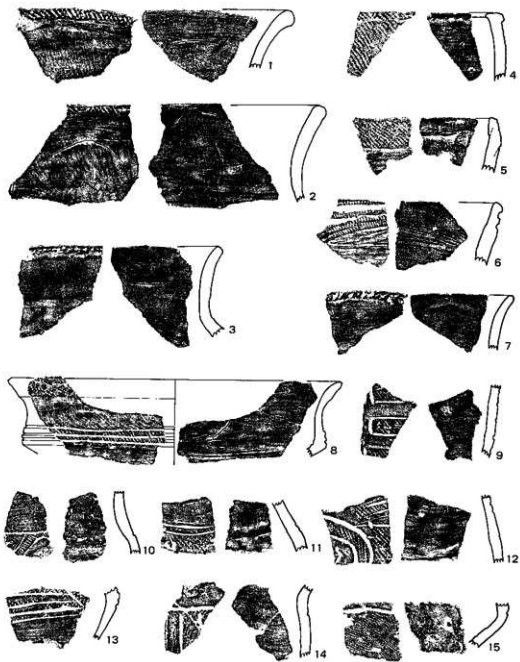


Fig.19 縄文土器実測図XII

めぐらし、その後、ヘナタリを回転させた擬似縄文を施文している。擬似縄文の範囲は下の沈線より約1cmで、それより下位は横位の細い条痕調整。内面も同様の条痕で調整されるが、さらにヘラナデを加え条痕を消している。胎土には砂粒を混入している。焼成は良好、色調は外面が黒色、内面が黒褐色をなす。7は口縁部がわずかに外反し、口縁端部は丸くおさめる。口唇部下半には貝柱の擬似縄文が施される。器壁の内外面は横方向の丁寧なヘラ研磨調整。胎土には若干の砂粒を混入するが良質、焼成は堅緻、色調は内外面とも黒褐色をなす。A-1区貝層4出土。8は復原口径26.6cm、胴屈曲部径24.4cmを測る浅鉢形土器である。口縁部は幅約1.5cmが肥厚し、外反する。頸部は直立し、胴中位でくの字に屈曲し、外面には稜線が形成される。胴屈曲部の上位に二条の平行沈線をめぐらしている。口縁部肥厚帯と胴部沈線間に縄文を施文している。また、縄文を施文された口縁部肥厚帯と沈線帯には焼成後、赤色顔料(丹)を塗布し、彩文効果を出している。頸部外面は横位のヘラ削り後、斜位の丁寧なヘラ研磨調整、胴下半および内面は横位のヘラ研磨調整である。胎土は精製され良質、焼成は堅緻である。色調は外面が褐色～黒褐色、内面が黒褐色である。A-2区貝層4出土。9は胴部破片、浅い凹線で長方形区画をつくり、区画内に縄文が施文される。無文帯部は横位の丁寧なヘラ研磨調整。内面も横位のヘラ研磨調整である。胎土は精製され良質、焼成は良好、色調は外面が黒褐色、内面が黒褐色をなす。A-3区貝層7出土。10は頸部から胴部上半にかけての破片。胴部にヘラ描き沈線一条をめぐらし、その下位は斜沈線で帯状の区画がつくられ、沈線間に貝殻腹縁による擬似縄文を施している。器面の内外面は横方向のヘラ研磨調整。胎土には砂粒が混入されている。焼成はやゝあまい。色調は外面が赤褐色、内面が黒褐色をなす。11も頸部から胴上半部にかけての破片である。頸部と胴部の境に二条の沈線がめぐり、沈線下に縄文が施文される。頸部と内面は横方向のヘラ研磨調整を加えるが、やゝ雑である。胎土には砂粒を混入するが良質、焼成は堅緻、色調は内外面共に黒色をなす。A-3区出土。12は胴部。曲線と直線を組み合わせた文様構成、沈線間に縄文帯と無文帯を交互に配する。縄文帯には赤色顔料を焼成後に塗布し彩文効果をあげ、無文帯は黒く磨研されている。内面も横位のヘラ研磨調整である。胎土には細い砂粒を含むが精製され良質、焼成は良好、色調は外面が黒褐色、内面が黒灰色をなす。B-1区出土。13は胴下半部の破片。上位に屈曲部がみられる。四条の平行沈線をめぐらし、斜線と組み合わせている。沈線間に充填縄文を入れるが、無文帯にも一部縄文がついている。縄文帯には赤色顔料が塗布されて彩文効果をだしていたとみられ、顔料が残っている。外面の無文部分と内面は横方向のヘラ研磨調整。胎土は良質、焼成は堅緻、色調は外面が黄褐色、内面は黒色、A-2区貝層4出土。14は頸部と胴部の境に棒状1具により沈線一条をめぐらし、それ以下には縦線を平行に配し縦に細長い区画を作り、交互に縄文帯と無文帯をつくり出す。縄文帯には前者同様、赤色顔料を塗布し彩文効果をあげようとしている。無文帯は縦方向のヘラ研磨調整。内面は横方向の丁寧なヘラ研磨調整である。胎土には砂粒を混入する。焼成は良好。色調は外

面が褐色～黒褐色、内面が黒褐色をなす。A-2区貝層4出土。15は胴下半の破片。上位に沈線二条がめぐる。沈線下には細かい縄文を一面に施文する。沈線間は横位のヘラ研磨調整。内面ヘラナデ調整で粗い。全体に凹凸がある。胎土には砂粒を混入。焼成は良好。色調は外面が黄褐色で一部黒斑がある。内面は黒褐色、A-2区貝層4出土。

Fig. 20-1は胴上半部の小破片。棒状工具で深く刻まれた平行沈線四条がめぐる。上、下の沈線間に磨消縄文、その間が無文帯となる。縄文帯とその上下の沈線には焼成後の赤色顔料が厚く存在し、彩文効果を出している。無文帯と内面は横位の丁寧なヘラ研磨調整。胎土は精選され良質、焼成は堅緻、色調は外面が黒灰色、内面が黒褐色をなす。A-2区貝層4出土。2は胴上半部破片。頸部と胴部の境に二条の沈線をめぐらし、また、約4cm下位にも一条（以上）の沈線をめぐらし、文様の区画帯をつくり出している。区画帯には三本組の斜沈線と縦線で文様を描いている。区画線間や文様の沈線間の磨消縄文施文部には赤色顔料の塗布が認められ彩文効果を出している。胎土は精選され良質、焼成は堅緻、色調は外面が黒褐色、内面は黒色をなす。A-2区貝層4出土。3は胴中位の破片。平行沈線三条がめぐり、沈線間に充填縄文を施文して、沈線と縄文施文部は赤色顔料が塗布され、無文帯と内面は横位のヘラ研磨調整。胎土は精選され良質、焼成は堅緻、色調は内外面共黒色をなす。A-2・3区間ベルト出土。4は直線と曲線の沈線を組み合わせ、沈線間に充填縄文を施す。無文帯は横方向のヘラ研磨調整。内面はヘラ削り調整の上に横位のヘラ研磨調整を施す。胎土には金雲母等の砂粒が若干混入される。焼成は良好。色調は外面が黄褐色、内面は黒色をなす。A-2・3区間ベルト出土。5は頸部から胴上半部の破片。胴部には沈線四条をめぐらし、沈線間に貝殻腹縁による擬似縄文が充填される。頸部および無文帯は横方向の丁寧なヘラ研磨調整、内面はヘラ削り状のヘラナデ調整。胎土には若干の砂粒を含み、やゝ大きい砂粒もある。焼成は良好。色調は外面が灰褐色～黒褐色、内面は黒褐色をなす。A-1区貝層4出土。6は口縁部破片。口縁部は肥厚し、その上端に縄文が施文され、その下位は横位のヘラナデ調整。内面は横位のヘラ研磨調整、胎土には砂粒を含む。焼成は良好、色調は外面が褐色～黒褐色、内面は黒褐色をなす。A-2区貝層4出土。7は胴中位の破片、ゆるやかにくの字形に屈曲する。屈曲部より上位に沈線四条を平行に配するが、左端で沈線は上に屈曲する。沈線間の上下に充填縄文を施文し、中央部は無文帯となり、横位の丁寧なヘラ研磨調整が加えられる。なお、縄文施文帯とその上下の沈線は丹塗りされている。胎土には細い砂粒が含まれるが精選され良質。焼成は良好。色調は外面が黒褐色、内面が黒色をなす。A-2・3区間ベルト出土。8は直線的な沈線を組み合わせ、方形の区画を作り出し、沈線間に縄文が施文されている。胎土は砂粒を混入するが良質、焼成はやゝあまい。色調は内外面共黄褐色をなす。A-3区出土。9も8と同様の文様構成をなすが、沈線は三重になっている。中心部と外側の沈線間に縄文が施文され、この縄文帯と両側の沈線には赤色顔料が塗られ、彩文されている。胎土は良質、焼成はやゝあまい。色調は内外面共黒褐色をなす。

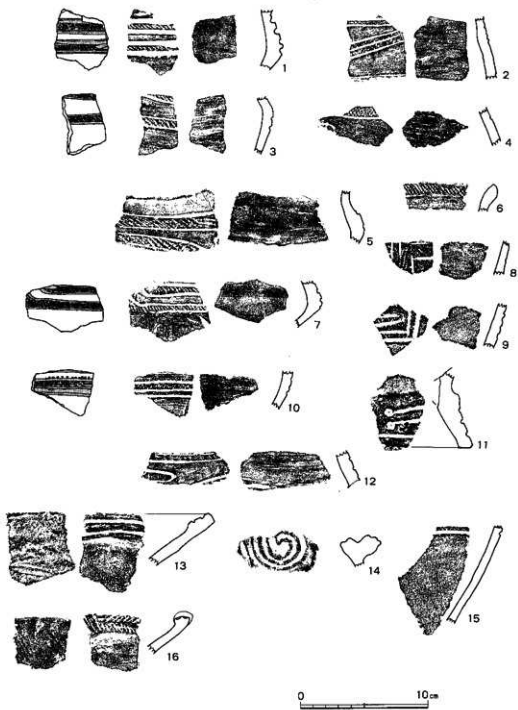


Fig. 20 縄文土器実測図XIII

A-2区貝層4出土。10も胴部破片。四条の平行沈線をめぐらし、下三本の沈線間に充填縄文が施文され、下段は一部ヘラ研磨が加えられている。沈線と縄文帯には赤色顔料が塗布され、彩文効果を出している。胎土は精良、焼成は堅緻、色調は外面が灰褐色～黒色、内面は黒色をなす。A-2区貝層4出土。11は脚台の破片である。脚のくびれ部に段がつく。端部は平坦に仕上げ安定をよくしている。沈線と刺突文を組み合わせた文様を施す。内外面ともナダ調整。胎土にはやゝ大きい砂粒を含む。焼成は良好。色調は外面が灰褐色、内面が赤褐色。12は胴上半部破片。平行沈線と曲沈線を組み合わせた文様を施した後、横位の丁寧なヘラ研磨調整を加える。その後、沈線間に貝殻腹縁を利用した雑な押斥文を施し、縄文風に仕上げている。内面はヘラ削後、横位のヘラ研磨調整を加える。下端には粘土接合部が擬口縁として残っている。胎土には砂粒を混入。焼成は良好。色調は外面が褐色、内面は黒褐色をなす。A-3区出土。13は口縁部破片。直線的に外方に拡がり皿状の器形をなすと考えられる。口縁部内側に粘土を貼り付け肥厚させている。この肥厚部に棒状工具による沈線二条をめぐらしている。胎土には砂粒を混入、焼成は良好、色調は外面が黄褐色、内面が赤褐色をなす。A-1区出土。14は口縁部破片。口縁部は大きく外に張り出し、平坦な口唇部に粘土を貼り付け盛り上げ、その部位に沈線で渦文を描く。沈線間には縄文が施文される。内面には横ナダが加えられる。色調は黒色をなすが顔料が塗られている可能性が高い。胎土は精選され良質。焼成は良好。A-3区出土。15は胴下半の破片、上部に沈線二条がめぐり、沈線間には縄文が施文される。外面は縦位のヘラ研磨調整、黒色をなし、14同様、黒色顔料が塗られている可能性がある。内面は横位のヘラ研磨調整。灰褐色をなす。胎土には若干の砂粒を含むが良質、焼成は堅緻である。A-1区出土。16は口縁部破片、器形は13と同じように皿状をなすと考えられる。口唇部には粘土を貼り付け肥厚させる。幅広い口唇部には細い沈線で綾杉文が入れられ、一部に粘土縞を貼り付け、さらに加飾している。粘土上には貝殻腹縁による擬似縄文が入れられている。外面は縦位、内面は横位のヘラ研磨調整。胎土には多量の砂粒を混入している。焼成は良好、色調は内外面共黄褐色～赤褐色をなす。A-3区出土。

Fig. 21～24の大部分は粗製無文の深鉢形土器である。器面調整の異なるものを選んでのせている。

Fig. 21-1はほぼ全形を知ることができる。復原口径24.0cm、器高20.6cm、底部径11.2cmを測る。底部がやゝ大きく、器高がやゝ低目である。器形は、復原すると安定した平底となる底部を有し、体部は外傾しながら立ちあがり、体部の2/3ぐらいのところまでわずかに屈曲し、口縁部にむかってほぼ真すぐにたちあがる。口縁部には幅1cm弱の薄い粘土を貼り付け肥厚させている。肥厚部の下端は粘土貼り付けの状態が明瞭に残っている。体部外面は粗い横方向のヘラナダ調整を加えた後、底部から口縁部に向け縦位のやゝ粗いヘラ研磨が加えられている。なお、ヘラ研磨によって動いた砂粒等によって縦位の条線が無数についているが、上半の屈曲部より

上位にはヘラ研磨がおよんでいないので、条線は体部下半に集中している。内面は斜位の板ナデ調整が丁寧な施されている。胎土には砂粒が多く混入されているが良質、焼成は堅緻、色調は外面が黒褐色、内面は赤褐色をなす。A-3区出土。2は大型の無文の深鉢形土器である。復原口径31.0cm。口縁部は内傾し、胴部がやゝ張る。胴部最大復原径35.0cmを測る。口唇部は平坦に仕上げ、口縁部内側に粘土がはみ出し、やゝ肥厚する。外面は縦位の丁寧なヘラナデ調整後、口縁部に横位のやゝ粗い条痕状のヘラナデ調整を加えている。内面は斜位の丁寧な板ナデ調整、一部ではヘラ削り状になるところがある。なお、口縁部のやゝ下方に焼成後に穿孔された孔がある。孔は外側から行われたもので、径0.7cmを測る。補修孔と考えられる。胎土には多量の金雲母、石英、長石等の砂粒が混入される。焼成は良好。色調は外面の下半が黄赤色、上半が黒褐色、内面は逆に下半部が黒褐色、上半が黄赤色をなす。煮沸用に使われたと考えられるが、スス等の付着はみられない。A-1・B-1区間ベルト、B-1区下部混貝層出土。3も大型の土器である。復原口径35.8cm。口縁部はほぼ直立し、頸部から大きく外にひろがる。外面は縦位のヘラナデ調整、内面は口縁部が横位のヘラナデ調整、胴部は下方から上方にかきあげた斜位のヘラ削り調整。胎土には多量の砂粒を混入している。焼成は良好。色調は内外面共に赤褐色～黒褐色をなす。A-2区貝層4出土。

Fig. 22-1は口縁部に指の押圧によって刻みを入れ、内側に粘土のはみ出しがみられる。内外面共横位のヘラナデ調整。胎土には多量の砂粒を含むが良質、焼成は良好、色調は外面が黄褐色、内面が赤褐色をなす。A-2・3区間ベルト出土。2も1と同様の破片、口縁は棒状工具によって刻みを入れている。内側に粘土のはみ出しがみられる。内外面共ナデ調整を加えている。胎土には砂粒、特に滑石粒が多量に混入されている。焼成は堅緻、色調は内外面共赤褐色をなす。A-3区出土。3は胴部破片、外面にはヘラ描きの斜線を組み合わせた文様が施文されるが、器壁に指押えの凹凸がある。内面は横位～斜位のヘラ削り状のヘラナデ調整。胎土には砂粒を多く含む。焼成は良好。色調は外面が赤褐色、内面が黒褐色をなす。全体にやゝ磨滅している。A-2区貝層4出土。4は椀状の小型土器。復原口径10.0cm、復原器高4.5cm前後を測る。手づくねで口縁は波打っている。外面は指押えの調整で凹凸が著しく、口縁下に粘土接合部が沈線状に残っている。粘土帯の幅は1.0～1.5cmである。最終的に横ナデ調整が加えられている。内面は横ナデ調整。胎土には砂粒を混入。焼成は堅緻、色調は内外面共赤褐色をなす。B-1区貝層2出土。5は口縁部破片。口縁部は頸部で屈曲し外反する。口唇部はヘラナデによって平坦に仕上げられる。内外面共に横位のヘラナデ調整であるが、内面は若干ヘラ削り状をなす。胎土には多量に砂粒を混入する。焼成はやゝあまい。色調は内外面共黒灰色をなす。B-1区下部貝層出土。6も口縁部破片。頸部で屈曲し、口縁部は外反し、胴部は大きく張ると考えられる。口唇部はヘラナデによって平坦に仕上げ、やゝ肥厚する。内外面共横位のやゝ粗いヘラナデ調整。胎土は砂粒を多量に含みやゝ粗悪、焼成もあまい。色調は内外面共に褐色をなす。A-

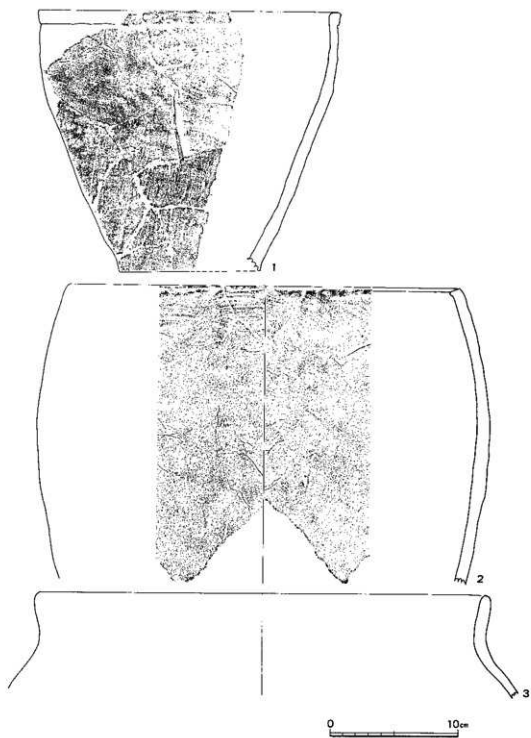


Fig.21 縄文土器実測図XIV

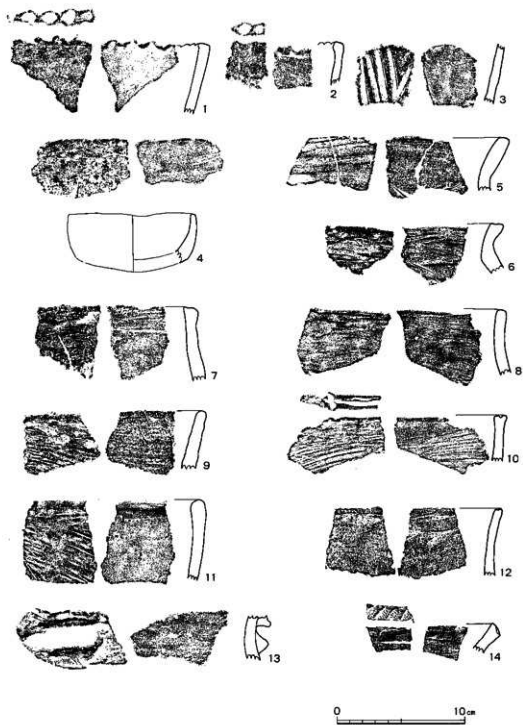


Fig. 22 縄文土器実測図XV

1区出土。7は口縁部破片。口縁部外面に粘土を貼り付け肥厚させ、断面三角形に仕上げている。口唇部はヘラナデを加え平坦にしている。内外面共に横位のやゝ粗いヘラナデを加えた後、ヘラ研磨を加えているが、研磨は部分的である。胎土には砂粒を混入、焼成は良好。色調は外面が褐色、内面は赤褐色～灰黒色。A-3区出土である。8は内外面共横位のやゝ粗いヘラ研磨調整された深鉢形土器の口縁部である。口唇部は丸くおさめている。胎土には若干の砂粒を混入するが良質。焼成は堅緻、色調は内外面共黒色をなす。9は口縁部が直口し、口唇部は丸くおさめている。内外面共横位の粗いヘラナデ調整を加えた後、やゝ粗いヘラ研磨調整を加えている。胎土は多量の砂粒を混入し不良、焼成は良く、色調は外面が黒褐色、内面は褐色をなす。A-2区貝層4出土。10は口縁が直口した深鉢形土器の口縁部、口唇部は平坦、沈線一条がめぐらされ、部分的にヘラによる刻みが施される。外面に粘土のはみだしがみられる。外面は棒状工具による横位の幅のせまい研磨調整。内面は横位のヘラナデ調整。胎土には砂粒を混入するが良質、焼成は堅緻、色調は外面が黒褐色、内面は赤褐色をなす。A-3区出土。11は口縁部破片。口縁はやゝ内湾気味にたちあがる。器壁は口縁にむかって厚くなり、口縁端部は丸くおさめている。外面は横位～斜位の貝殻条痕を施した後に横ナデ調整を加えている。内面は横ナデ調整を加えている。胎土にはやゝ大きい砂粒を含んでいる。焼成は良好。色調は外面が黄褐色～褐色、内面が黄褐色をなす。A-3区出土。12は口縁部がゆるやかに外反する。口唇部はヘラナデによって平坦に仕上げ、わずかに肥厚している。内外面共やゝ粗い横位のヘラナデ調整。胎土には砂粒を混入しているが良質。焼成は堅緻。色調は内外面共黒色をなす。A-1・2区間ベルト出土。13は頸部付近の破片。口縁部は段をもって肥厚するが、形態を知ることはできない。口縁部の段の部分とそれに対応する部分に幅広い粘土紐をはりつけてコブ状の隆起をつくりつけている。外面は横ナデ調整、内面は横位のヘラ削り調整である。胎土には多量の砂粒を混入し良好でない。焼成はやゝあまい。色調は外面が赤褐色～黄褐色、内面が褐色をなす。A-3区出土。14は口縁部の小破片。口縁部は外反し、口縁端部にむかって厚くなる。口唇部はヘラナデが加えられ平坦で角ばっており、平坦面には小巻貝の体部を連続して押し施している。内外面はやゝ粗いヘラ研磨調整。胎土には砂粒を混入するが良質。焼成は堅緻、色調は内外面共黒褐色をなす。A-1・B-1区間ベルト出土。

Fig. 23は無文の土器である。1は碗形の土器である。復原口径22.6cmを測る。体部は内傾気味にたちあがり、口縁はやゝ内傾し、端部は平坦である。外面は横位～斜位のヘラ削り調整。内面は丁寧な横位ヘラナデ調整を加えている。胎土には砂粒を混入している。焼成は堅緻。色調は外面が黒褐色、内面が赤褐色～黒褐色をなす。A-1・B-1区間ベルト出土。2も碗形土器と考えられる。体部はほぼ直線的にたちあがり、口縁部にむかって器壁が厚くなり口縁部は肥厚し、端部は丸くおさめる。復原口径18.4cm。外面は横位のヘラ削りを加えた後、横位～斜位のヘラ研磨調整が加えられる。内面は横位の丁寧なヘラ研磨調整が加えられている。胎土には

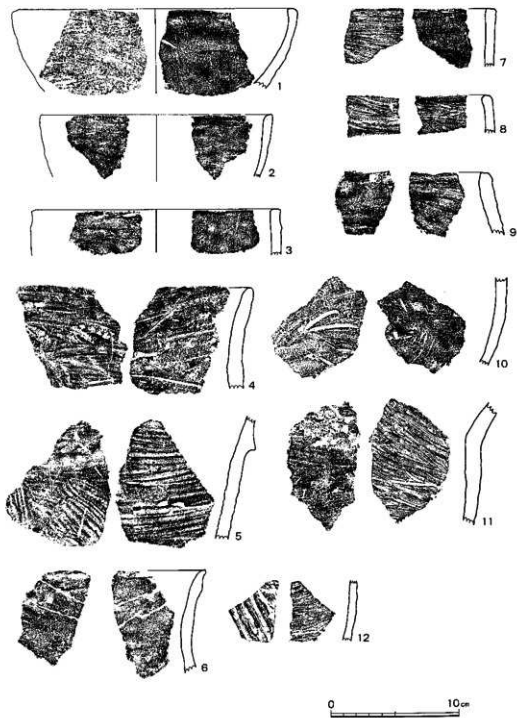


Fig. 23 縄文土器実測図XVI

細かい砂粒を含むが良質。焼成は堅緻。色調は内外面共黒褐色をなす。A-3区出土。3は復原口径19.8cmを測る。体部はほぼ直線的にたちあがる。口唇部はヘラナデによって平坦に仕上げられる。外面は横位の粗いヘラナデ調整。内面は丁寧な横位のヘラナデ調整である。胎土には砂を混入するが良質。焼成は普通、色調は内外面共に黒褐色をなす。A-3区出土。4は深鉢形の粗製土器。口縁部はわずかに外反する。口唇部は丸くおさめられる。外面は小巻貝による横位を主とした貝殻条痕が施される。内面はやゝ粗い斜位のヘラナデ調整を施す。胎土にはやゝ大きい砂粒を含み、質は良くない。焼成はやゝあまい。色調は内外面共黒褐色、外面にはススの付着が認められる。A-2区貝層4出土。5は口縁上半部を失う深鉢形土器破片である。口縁部外面に粘土を貼り付けて肥厚させ、断面形は三角形をなす。外面の上半部は横位、下半部は斜位の小巻貝による貝殻条痕が施されている。内面も同様の条痕が横位に施されている。胎土には砂粒が多量に混入され不良。焼成はあまい。色調は内外面共赤褐色をなす。A-2区貝層4出土。6も深鉢形土器の口縁部破片。口縁部は外反し、端部は尖り気味におさめているが、内側からのヘラナデによって外側に粘土が張り出す。外面は横位の粗いヘラナデ調整を加えた後、下半部には横位の丁寧なヘラナデ調整が加えられている。内面は横位のヘラナデ調整を加えている。胎土には細かい砂粒を多量に含んでいるが良質。焼成は良好。色調は内外面共黒褐色をなす。7～9は口縁部破片。7は直口する。外面はヘラナデ調整後、小巻貝による条痕を横位に施す。内面はヘラナデ調整である。8は口縁部がやゝ内傾する。口縁端部は丸く仕上げている。外面には斜の条線を施した後、横ナデ調整が加えられている。内面は横方向の棒状工具によるナデ調整が加えられる。7・8は共に胎土には砂粒を含んでいるが良質。焼成は良好。色調は7の外面は黒褐色、内面は赤褐色。8は外面が赤褐色、内面が黒色をなす。7はA-1・B-1区間ベルト出土。8はA-3区出土。9は前者に比較し厚手の深鉢形土器口縁部である。口縁部はやゝ内傾する。口縁端部は丸くおさめている。外面は横位のやゝ粗いヘラナデ調整。内面は横位～斜位のヘラナデ調整である。胎土には砂粒を混入している。焼成はやゝあまい。色調は外面が黒褐色、内面が黒色をなす。A-3区出土。10～12は深鉢形土器の胴部破片である。10は外面が横位～斜位の粗いヘラナデ調整。内面も同様のヘラナデ調整であるが、上半部が横位、下半部が斜位に施されている。胎土にはやゝ大きい砂粒も含まれるが良質。焼成は堅緻、色調は内外面共黒褐色をなす。B-1区下部貝層出土。11は口縁部に近い破片で頸部で屈曲し、上部は外反する。外面は横位～斜位の小巻貝の貝殻条痕調整。内面は丁寧な横位の横ナデ調整。胎土には砂粒がやゝ多く含まれ不良。焼成はやゝあまい。色調は外面が赤褐色、内面が黒褐色をなす。外面にはススが付着している。B-1区下部混貝層出土。12は外面にヘラナデ沈線の斜線を組み合わせた文様が施文される。内面はヘラナデ調整。胎土には滑石粒を多く混入しているが良質。焼成は良好、色調は外面が黒褐色、内面が赤褐色をなす。A-1・B-1区間ベルト出土。

Fig. 24-1～4 はいずれも粗製深鉢形土器の胴部破片である。1は粘土帯の接合部が凹部として残っている。粘土帯の幅は2.5～3.0cm前後である。粘土帯接合後、斜位～縦位のヘラナデ調整が加えられているが、凹部を消しきるまでにはいたっていない。ヘラナデはやゝ粗雑である。内面は横位の丁寧なヘラナデ調整である。胎土には砂粒を混入しているが良質、焼成は堅緻、色調は外面が褐色、内面が黒褐色である。A-1区下部貝層出土。2は頸部がやゝくびれ、口縁部が外反すると考えられるが口縁部を欠く。外面は割り状の調整後、斜～縦位のやゝ粗雑なヘラ研磨を加えている。内面は繊維質の板状工具による粗い条痕が横～斜位に入れられている。胎土には多量の砂粒を混入、焼成は良好。色調は外面が赤褐色、内面が赤褐色～黒褐色を

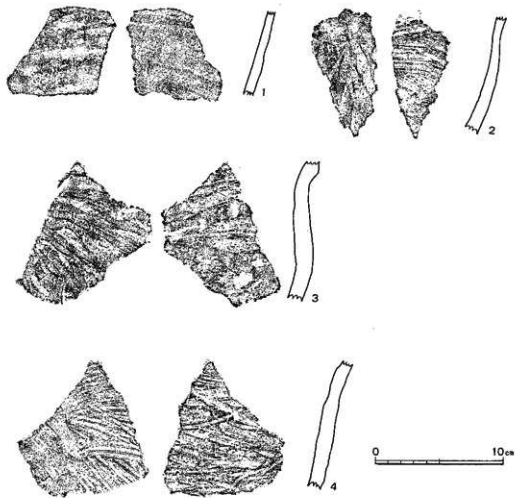


Fig. 24 縄文土器実測図XVII

なす。A-3区出土。3は口縁部から胴上半部にかけての破片である。口縁端を欠くが、口縁部は屈曲してたちあがり、やゝ肥厚すると考えられる。頸部がくびれ、胴部はやゝ張る。外面は横方向の幅広のヘラ研磨調整であるが、ヘラの動きが速く、粘土がかすれた状態になっている。内面は外面と同様の幅広のヘラによる削り調整が横～斜位で施されている。器壁は厚く1.0～1.3cmを測る。胎土には多量の砂粒を混入し、良質ではない。焼成は良好。色調は外面が赤褐色～黒褐色、内面が黒色をなす。A-3区出土。4は頸部から胴部にかけての破片。頸部がわずかにくびれ、胴部がやゝ張る。外面には貝殻（ヘナタリ等の小巻貝）による条痕が横位～斜位に不規則に施されている。内面は横位～斜位のヘラ削り調整を加えた後、外面と同様の貝殻条痕を加えているが部分的である。胎土には多量の砂粒が混入されており、質が悪い。焼成はやゝあまい。色調は外面が赤褐色、内面が黒褐色である。A-1区貝層7出土。

Fig.25～28は底部資料である。代表的なものを紹介する。Fig.27、28は脚台状をなす底部である。

Fig.25-1は浅鉢形土器の底部で、わずかにあげ底状をなす。底部径8.0cm前後。内外面に共に丁寧なヘラ研磨調整が加えられている。体部は大きく外側にひらくものとみられる。胎土には砂粒を混入しているが良質、焼成は堅緻、色調は内外面共黄褐色をなす。A-1区出土。2～8は平底の底部である。2はあげ底状をなす。外底部は多方向からのヘラ研磨調整、底部径10.8cmを測る。体部は外傾しながら直線的にたちあがるとみられる。底部付近はヘラによる粗い面とりがみられる。内底部は指による押圧調整。内壁はヘラ削り状のヘラナデ調整。一部に底部と体部の接合痕が明瞭に残っている。胎土には砂粒を混入している。焼成は良好。色調は外面が赤黄色、内面が黒褐色～黄褐色をなす。A-3区出土。3はやゝあげ底状をなす。復原口径10.2cmを測る。体部は丸味をもってたちあがる。体部外面は縦位のヘラナデ調整である。内底部は指による調整。体部内面は斜位のヘラ削り状のヘラナデ調整を加えている。胎土には多量の砂粒を混入し、不良。焼成は普通である。色調は内外面共黒褐色をなす。A-2区出土。4は若干あげ底状をなす。底部復原径12.0cmを測る。体部は外傾しながら直線的にたちあがる。外底部は多方向からのナデ調整。体部外面は縦方向のヘラナデ調整。内面は横方向のヘラ削り状の調整であるが、底部付近はやゝ粗い。胎土には若干の細かい砂粒を混入しているが良質。焼成は普通。色調は内外面共に黒褐色をなす。粗製の深鉢形土器の底部である。A-2区出土。5は底部径11.8cmを測る。外底部は多方向のヘラナデ調整であるが、施し方はやゝ粗い。体部外面は横位～斜位のヘラ研磨調整、内底部は多方向のヘラ研磨調整。体部内面は横方向のヘラ研磨調整であるが、やゝ粗雑である。胎土にはやゝ大きい砂粒を混入している。焼成は堅緻。色調は内外面共黒色をなす。A-3区出土。6は底部復原径13.7cmを測る。外底部には多くの凹みがみられるが、これはいわゆるクジラの背椎骨の圧痕である。体部外面は横方向～縦方向の貝殻条痕を施した後、横ナデ調整を加えている。内面は横ナデ調整であるが、粘土接合部が凹み

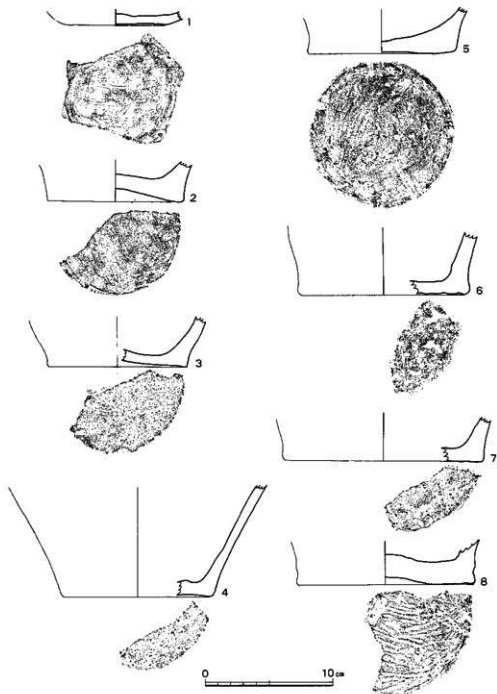


Fig. 25 縄文土器実測図XVII

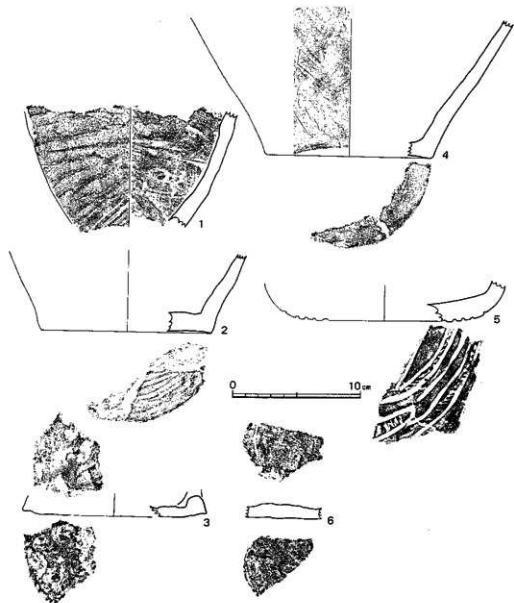


Fig. 26 縄文土器実測図XIX

となり凹線状をなしている。粘土帯の幅は1 cm前後である。胎土には多量の砂粒を混入し不良。焼成はあまい。色調は外面が褐色、内面が黒褐色をなす。A-3区出土。7も外底部にクジラの背椎骨圧痕を有する。底部復原径15.6cmを測る。体部外面は縦方向のヘラ研磨調整であるが

やゝ粗い。内面は多方向のヘラナデ調整である。胎土には砂粒を混入している。焼成は堅緻、色調は外面が黒褐色、内面が赤褐色をなす。A-3区出土。8は底部中央があげ底になる。底部復原径は19.2cmを測る。外底部はクジラ背椎骨圧痕(?)の上に小巻貝による条痕を施している。体部外面は粗い横ナデ調整。内底部は多方向のヘラナデ調整である。中央部がもりあがっている。胎土にはやゝ多量の砂粒が混入されている。焼成はやゝあまい。色調は内外面共赤褐色～黒褐色をなす。B-1区下部混貝土層出土。

Fig. 26はいずれも底部資料である。1は底部直上の体部破片である。底部は失われているが復原すれば底部径は9cm前後となろう。体部外面は縦方向の小巻貝による貝殻条痕調整を加えた後、その境の稜線部分にヘラ研磨調整を加えている。内面は横位～斜位のヘラナデ調整であるがやゝ粗雑。粘土の接合部が凹部として残っている。胎土には砂粒を混入しているが良質。焼成は堅緻、色調は外面が黒褐色、内面は褐色をなす。A-3区出土。2はわずかにあげ底になる。外底部には棒状工具によって同心円状に深いナデが施されている。体部は外反気味にたちあがる。外面は下が横位、上が縦位の小巻貝による条痕調整が施され、さらに、底部近くには横ナデ調整が加えられている。内底部は指による調整。体部内面は棒状工具による縦位の細かい研磨が加えられている。胎土には多量の砂粒が混入され質は良くない。焼成は良好。色調は外面が黒褐色、内面は褐色～黒褐色をなす。底部復原径は13.6cmを測る。A-2区貝層4出土。3は底部復原径14.6cmを測る。外底部にはアバタ状のクジラの背椎骨の圧痕が明瞭に残っている。内底部はヘラ状工具による粗い調整。器壁と底部の接合部は鋸口縁状に残っている。胎土には細かい砂粒が含まれるが、少量のやゝ大きい砂粒も含まれているが質は良い。焼成は堅緻。色調は外面が褐色、内面は褐色～黒色をなす。A-3区出土。4は底部復原径13.2cmを測る。体部は外傾しながら直線的にたちあがる。外底部は多方向からのヘラ研磨調整。体部外面は斜位のヘラ研磨調整であるが、破片の中で研磨が交差し、その状態から研磨は正位の状態、下から上に、左まわりに施されたことがわかる。内面は横位のヘラ研磨調整、底部周辺はやゝ粗いヘラ研磨である。内底部もヘラ研磨調整と考えられる。精製の深鉢形土器である。胎土には若干の砂粒を含むが精良、焼成は堅緻、色調は内外面共黄褐色をなす。A-3区出土。5は浅鉢形土器の底部である。丸底に近い平底をなす。底部復原径15.0cm前後である。外面には丁寧なヘラ研磨調整を施した後に底部を中心に文様が施文されている。文様は棒状工具によって底部を中心に同心円状に5条の沈線をめぐらし、そのうちの三つの沈線間にはヘラによる刺突文が擬似縄文風に施されている。ヘラは板と考えられ、細かい条線がみられる。底部の中心部は沈線によって区画されるが、文様全体は明らかでない。体部は内湾気味にたちあがる。内底部は板による擦痕がほぼ同心円上に施されている。胎土には砂粒を多量に混入していて良質でない。焼成は良好。色調は外面が黒褐色、内面が灰褐色をなす。やゝ厚手の土器である。B-1区下部貝層出土。6は5同様に浅鉢形土器と考えられる。粘土帯の接合状態が明瞭に残っている。外

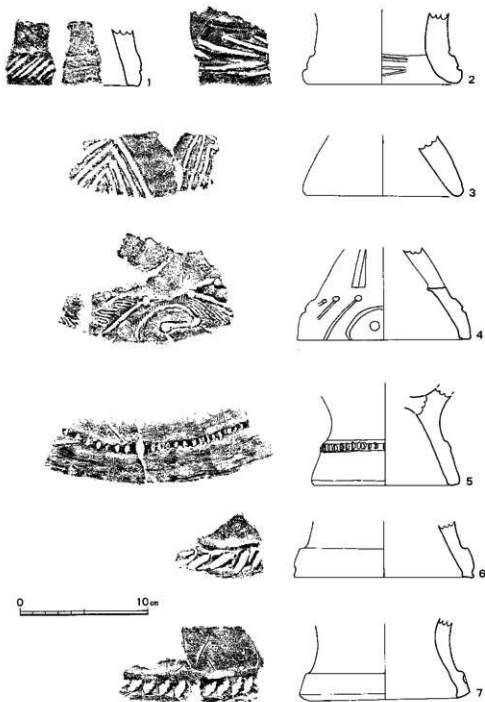


Fig. 27 縄文土器実測図XX

底部は平行するへら削りが施されている。内底部は指圧による調整をおこなっている。胎土には砂粒を混入するが良質。焼成は堅緻、色調は外底部が黒褐色、内面が黄白色をなす。

Fig. 27、28は脚台状をなす底部の諸例である。形態的、文様も多種多様である。以下、特徴的なものについて説明する。

Fig. 27-1は脚台の破片である。脚端部には段を有して幅のせまい肥厚帯をつくり出し、肥厚帯にはへらによって斜位の平行沈線を施文している。外面は横ナデ調整、内面は板ナデ調整、胎土には多量の砂粒を含み良くない。焼成はあまい。内外面共に黄褐色をなす。A-1区出土。2は脚端部復原径12.6cmを測る。脚端部にむかって厚くなり、脚端部は厚く肥厚し外側に張り出す。端部は丸くおさめている。外面はやゝ凹凸があり、横ナデ調整が加えられている。端部には二本の沈線をめぐらす、下の沈線は途中で終っている。上の沈線の上にはわずかに段が形成されている。段の上位には左あがりの沈線が平行に施文される。沈線は下から上に施したものである。内面下半には横方向の貝殻条痕を施した後、横ナデ調整を加えている。上半部は横位～斜位のへらナデ調整である。胎土にはやゝ大き目の砂粒を含めて多量の砂粒が混入されていて質が悪い。焼成はあまい。色調は外面が赤褐色、内面は褐色をなす。B-1区下部貝層出土。3は直線的に外に広がる脚台である。脚端部は丸くおさめている。脚端部復原径12.8cmを測る。外面は横ナデ調整後、沈線で文様を施文する。文様は4条の沈線で複雑山形文をくりかえしている。内面も横ナデ調整である。脚部の下半部は二次加熱のため変色し、白灰色をなす。胎土にはやゝ大き目の砂粒を混入している。焼成は堅緻、色調は外面と内面の下半は前述のとおりで、内面の上半部は赤褐色をなす。A-2・3区間ベルト出土。4は器形的には3の発展的なものとして把握できる。脚端部復原径13.8cmを測る。形状は3に近く端部がひろがるが、下半部は直線的でなく、内湾気味である。底部から約3cmの所に段を形成し、それから下は粘土を貼り付け肥厚させている。脚端部は平坦で、内側に粘土がはみ出している。脚端部の肥厚帯には刺突文と曲線文を組み合わせた文様を施文し、沈線間には貝殻復縁を押しし擬似縄文を施している。脚の上半部には透し窓があげられている。透しは隅丸の長方形をなし、3ヶ所にあると考えられる。内外面共に丁寧なナデ調整である。胎土には砂粒と共に貝殻の粉末が混入されている。焼成は堅緻、色調は内外面共に黒褐色をなす。精製深鉢形土器の底部になると考えられる。A-2区貝層4出土である。5は脚端にむかって直線的に広がる。端部は平州に仕上げられる。脚端部復原径11.8cmを測る。脚の内外面は横方向の丁寧なへら研磨調整である。脚台の中位には断面台形の刻目突帯が貼り付けられる。刻目はへら状工具によってつけられる。深鉢の体部は脚部と一体でつくられ、体部は外傾気味にたちあがる。底部は後から充填されていて、接合痕が縦縁状に残っている。胎土には砂粒を混入しているが良質。焼成は堅緻で、色調は内外面共赤褐色をなす。A-1区出土。6は脚端部復原径14.4cmを測る。端部より約2cmの所に明瞭な段が形成される。段より下は粘土の貼り付けによって肥厚している。肥厚帯には棒状工

具（細かいスジがはいる）によって右あがりの太い平行沈線が施される。脚端部は平坦に仕上げられ安定している。内側に粘土のはみ出しがみられる。脚の内外面はヘラによる横ナデ調整である。胎土には多量の砂粒が混入され質は良くない。焼成は堅緻。色調は外面が二次加熱のため変色し、黄赤色～白灰色をなし、内面は赤褐色をなすが脚部に近い部分は白灰色に変色している。A-3区貝層7出土。7は脚端部復原径13.5cmを測る。ゆるやかなカーブを描いて広がるが脚端部がちかづくにしたがい内湾気味になる。端部から約1.5cmの幅で粘土が貼り付けられ肥厚し、その上部には明瞭な段が形成されている。粘土帯には斜位に板状の工具による押圧文が連続して押圧されている。脚端部は平坦に仕上げられ、内側には粘土のはみ出しがみられる。脚部外面は横ナデ調整、内面は横位のヘラナデ調整である。胎土には細かい砂粒を含むが良質、焼成は良好、色調は外面が黄褐色、内面が赤褐色をなすが、脚端部は二次加熱のため白灰色になっている。A-2区貝層4出土。

Fig. 28はいずれも文様のない無文の脚台である。1は脚端部復原径12.8cmを測る。脚は端部にむかってゆるやかにひらき、端部は尖り気味におさめる。外面は小巻貝による斜位の貝殻条痕、内面の下端はヘラで面取り後、小巻貝による条痕を施している。上部はヘラナデ調整。全体につくりは良くない。胎土には砂粒を混入している。焼成は良好。色調は二次加熱によって

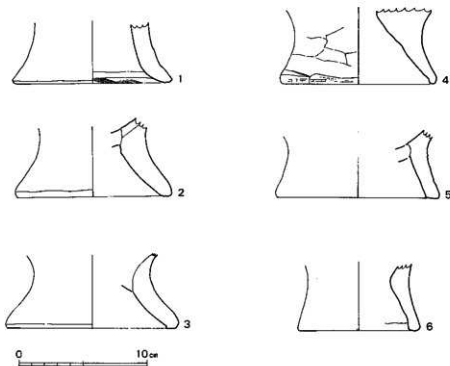


Fig. 28 縄文土器実測図XXI

赤く変色している。外面にスガが付着する。B-1区下部貝層出土。2は脚端部復原径12.4cmを測る。端部にむかってゆるやかに広がり、端部は丸くおさめている。安定した脚台である。体部は外に開きながら立ちあがると考えられる。底部は体部形成後、充填されている。粘土接合痕が擬口縁状に残っている。脚部外面はヘラナデ調整後、横方向のヘラ研磨調整。内面もほぼ同様の調整をおこなっているが研磨は上半部におよばず、上半部はヘラナデ調整のままである。胎土にはやゝ大きい砂粒も含まれるが全体に良質、焼成は良好、色調は外面が赤白色～褐色、内面は褐色～赤褐色をなす。A-2区出土。3は脚下半部で大きく外に開く。脚端部復原径13.8cmを測る。脚端部はわずかに内湾し、丸くおさめるが、内側に粘土のはみ出しがみられる。外面の調整は横ナデであるが、上部のくびれ部は指による調整で指圧痕が残る凹凸が著しい、内面は横位のヘラ削り状の調整。胎土にはやゝ大きい砂粒が混入される。焼成はやゝあまい。色調は内外面共に赤黄色をなす。A-2・3区間ベルト出土。4は脚端部復原径12.4cmを測る。全体に粗雑なつくりである。器壁は脚端部にむかって薄くなる。内外面共、粗いヘラナデ調整されているが器表は凹凸が著しい。胎土には砂粒を混入するが良質。焼成は良好。色調は内外面共に黄褐色をなす。5は脚端部復原径13.0cmを測る。脚部は外にひろがらず直立する。脚端部は平坦で安定をはかっている。脚部外面は縦位にヘラナデされ面とりされるが粗雑である。内面は横位のヘラナデ調整を加えている。体部は外にむかって開くと考えられる。胎土には若干の砂粒を含むが良質。焼成は良好。色調は外面が赤褐色、内面が褐色をなす。A-2・3区間ベルト出土。6は脚端部復原径9.8cmを測り、他例よりはやゝ小型である。脚端はあまり外にひろがらず、たちあがっている。脚端部はわずかに内湾気味になっている。平坦に仕上げ、脚の安定をはかっている。脚外面には縦方向の丁寧なヘラナデ調整を加えている。内面は横方向のヘラナデ調整であるが、粘土の接合痕等でやゝ凹凸がみられる。胎土には砂粒、貝殻粉末が混入されている。焼成はやゝあまい。色調は外面が黒褐色～褐色、内面が褐色～赤褐色をなす。A-1・2区間ベルト出土。

(2) その他の土器 (Fig. 29)

縄文式土器以外の土器として土師器がある。A-2区の攪乱部から出土したものである。復原口径13.6cm、底部径8.8cm、器高3.5cmを測る。底部はヘラおこし、他は横ナデ調整。胎土は精良、焼成は良好。黄赤色をなす。

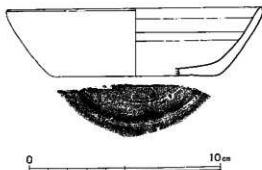


Fig. 29 土師器実測図

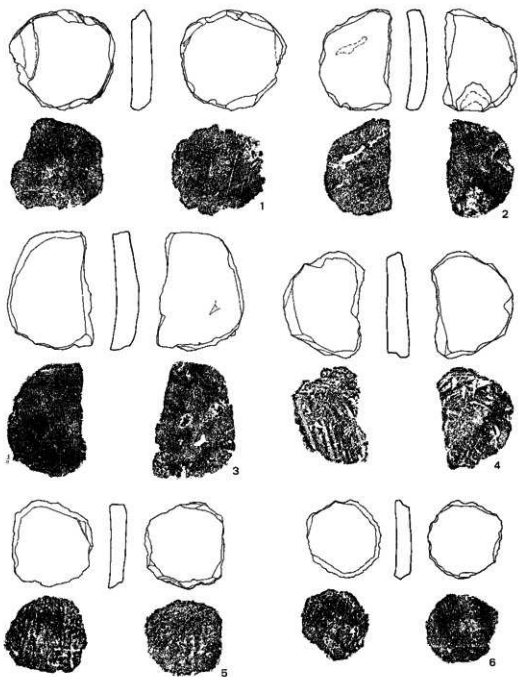


Fig.30 土製品実測圖 I

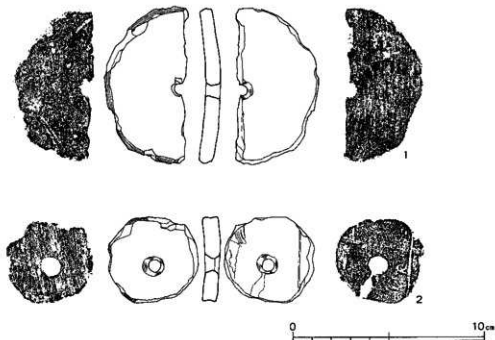


Fig. 31 土製品実測図Ⅱ

(3) 土製円盤 (Fig. 30, 31)

いずれも土器片を再利用してつくられた土製円盤である。中には中央部に穿孔した例もある。計8点がある。縄文時代のほぼ全期間を通じて存在するが、特に中期以降に増加をみせる。用途については明らかでない。

Fig. 30-1は一部を新しく欠くが、ほぼ完形である。内外面共にヘラ研磨された半粗製の土器片を利用している。周辺を打欠き整形した後に、研磨を加えているが割れ口全面にはおよんでいない。胎土には多量の砂粒を混入している。色調は外面が黒褐色、内面が赤褐色をなす。長径5.6cm、短径5.3cm、厚1.1cm、重40gである。A-2区貝層4出土。2は半欠した資料である。外面はやゝ粗いヘラ研磨調整、内面は丁寧なヘラナデ調整の土器片を利用している。細かい打割を加え、円形に整形している。その後、割口に研磨を加えているがその範囲はせまい。土器はわずかに湾曲している。胎土には若干の砂粒を混入する。焼成は堅緻、色調は外面が黒褐色、内面は赤褐色をなす。長径5.3cm、短径3.8cm+α、厚0.8cm、重24+αg。A-1区・B-1区間ベルト出土。3も半欠した資料である。外面はやゝ粗いヘラ研磨、内面は丁寧なヘラ研磨が施された深鉢形土器の胴部破片を利用、土器片はわずかに湾曲している。大きな打割を加え整形す

る。割れ口は部分的に磨滅している。胎土には小さな砂粒を含むが良質、焼成は堅緻、色調は外面が褐色、内面は灰褐色をなす。長径6.3cm、短径4.4cm+ α 、厚1.2cm、重さ44+ α g。A-1区貝層4出土。4も半欠した資料である。外面が指押えで一部に貝殻条痕、内面は不定方向の貝殻条痕が施されている。破片は直線的で湾曲はみられない。底部破片を利用している可能性が強い。破片の周囲は磨滅している。胎土には砂粒を混入している。焼成は良好。外面が黒色、内面が黒褐色をなす。長径5.7cm、短径4.3cm+ α 、厚1.2cm、重さ32+ α g。B-1区下部貝層出土。5は完形。内外面共にやや粗いヘラ研磨された深鉢形土器の胴部破片を利用している。細かい打割を加えて、ほぼ完形に整形している。他の資料にみられるような研磨や磨滅はみられない。胎土には砂粒を混入しているが良質、焼成は良好。色調は内外面共黒褐色をなす。長径4.5cm、短径4.2cm、厚0.8cm、重さ21g。A-2区貝層4出土。6も完形の資料である。外面は粗いヘラ研磨、内面はヘラナデ調整の深鉢形土器の胴部破片を利用している。周囲には細かい打割を加え整形している。わずかに磨滅が認められる。胎土は砂粒を含むが良質、焼成は良好、色調は外面が赤褐色、内面は灰褐色をなす。長径4.0cm、短径3.9cm、厚0.8cm、重さ16g、A-1区貝層7出土。Fig.31は、円盤の中央に穿孔した、いわゆる有孔円盤である。1は半欠品、2は完形である。1は内外面共に丁寧なヘラ研磨調整。外面にススが付着する。土器片の湾曲は小さく、大型の深鉢形土器の胴部破片を利用したものと考えられる。周縁部には小さい打割を加え円形に整形している。また、部分的ではあるが、研磨が加えられているところもある。中心部の孔は両面から穿孔されたもので、孔径0.5cmを測る。胎土には多量の砂粒を含むが良質、焼成は堅緻、色調は外面が褐色、内面が黒褐色をなす。長径8.4cm、短径4.2cm+ α 、厚0.8cm、重さ37+ α g。A-2区貝層4出土。2は内外面共ヘラナデ調整の深鉢形土器の胴部破片を利用している。周縁部に細かい打割を加え円形に整形しているが、張り出し部にさらに研磨を加えている。孔は中心部をややはずれ縁辺に片寄っている。孔は両面から穿孔されたもので、径0.6cmを測る。胎土には多量の砂粒を含んでいる。焼成は堅緻、色調は外面が褐色、内面が灰褐色をなす。長径4.7cm、短径4.5cm、厚0.8cm、重さ22g。A-3区出土。

Tab.1 土製円盤の計測表発掘区

発掘区	図号	長 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重 (g)	備 考
1	A-2区 Fig.30-1	5.6	6.3	1.1	40	部分研磨
2	A-1 B-1 ベルト Fig.30-2	3.8+ α	5.3	0.8	24+ α	部分研磨
3	A-1区 Fig.30-3	4.4+ α	6.3	1.2	44+ α	磨滅
4	B-2区 Fig.30-4	4.3+ α	5.7	1.2	32+ α	磨滅
5	A-2区 Fig.30-5	4.2	4.5	0.8	21	
6	A-1区 Fig.30-6	3.9	4.0	0.8	16	磨滅
7	A-2区 Fig.31-1	4.2+ α	8.4	0.8	37+ α	穿孔、部分研磨
8	A-3区 Fig.31-2	4.7	4.6	0.8	22	穿孔、部分研磨

2. 石器

出土石器は、石鏃をはじめ、石銛、石鋸、尖頭状石器、スクレイパー、コンケーブスクレイパー、磨製石斧、接切具、双角状礫石器、磨石、叩石、凹石、石皿、石錘、砥石等があり、他に石核、剥片、チップ等が多量に出土している。狩猟具、漁撈具、植物質食料の加工具、石器製作・加工具等と多種多様である。以下、それぞれの石器について説明を加える。

(1) 石鏃 (Fig. 32)

15点の出土がある。黒曜石、古銅輝石安山岩を素材として利用している。Fig. 32-1は小型の剥片鏃である。一部に原石の表皮を残している。剥片の打点側を基部としている。基部の挟り部と先端の一部に押圧剥離の細部加工を加えている。腰岳産（以下、肉眼的観察による）の黒曜石を素材としている。A-3区出土。2は不定形の剥片を利用した剥片鏃である。剥片の打点側を基部としている。挟り部と脚部に細部加工を加えている。片方の脚は欠失する。また、側辺の一边には片側から細い剥離を加えて鋸歯列をつくり出している。いわゆる剥片鋸歯鏃である。透明度の強い腰岳産の黒曜石を素材としている。A-3区出土である。3も不定形の剥片を利用した剥片鏃である。剥片の打点側を石鏃の先端部としており、前二者とは逆である。脚部を欠失する。側辺の一边と挟り部に両面からの押圧剥離による細部加工を加えている。腰岳産の黒曜石を素材としている。A-2区出土。4は長脚の鏃で、片脚の一部を欠失する。主要剥離面を大きく残し、周辺部に両面から丁寧な押圧剥離を加えて整形している。佐世保東浜産の黒曜石を素材としている。A-1区西半部の出土。5は基部の挟りの浅い三角形鏃である。不定形の剥片を素材とし、主要剥離面を大きく残し、周辺に両面から押圧剥離を加え整形しているが、側辺の一边は片面からの押圧剥離のみである。一部に原石の表皮を残している。石材は腰岳産の黒曜石。A-2区の出土である。6は基部の挟りが浅い三角形鏃である。不定形の剥片を利用している。主要剥離面を大きく残し、周辺部に両面から押圧剥離を加えている。側辺の一边が打面となっており、この部分には刃部が形成されていない。一部に原石の表皮が残っている。腰岳産の良質の黒曜石を素材としている。A-1・2区間のベルトより出土。7は基部の挟りが深い石鏃である。先端部と脚の片方を欠失する。整形の剥離は中央部までおよんでいるが、やや粗雑であり、主要剥離面の一部が残っている。佐世保東浜産の黒曜石を素材とする。A-2・3区間のベルトより出土。8はやゝ幅狭の長身の鏃。先端部と脚の片方を欠損する。整形の剥離は丁寧で、両面から押圧剥離を加えるが、側辺の一边には剥離は加えられない。細部加工が加えられた側辺の鋸歯列は明瞭でないが、片側の側辺が剥片のままであること等から剥片鋸歯鏃に含めうるものである。透明度のきわめて強い良質の腰岳産の黒曜石を素材としている。A-3区出土。9は左右対称でなく、やや片寄った形をしている。細部加工は先端部と基部

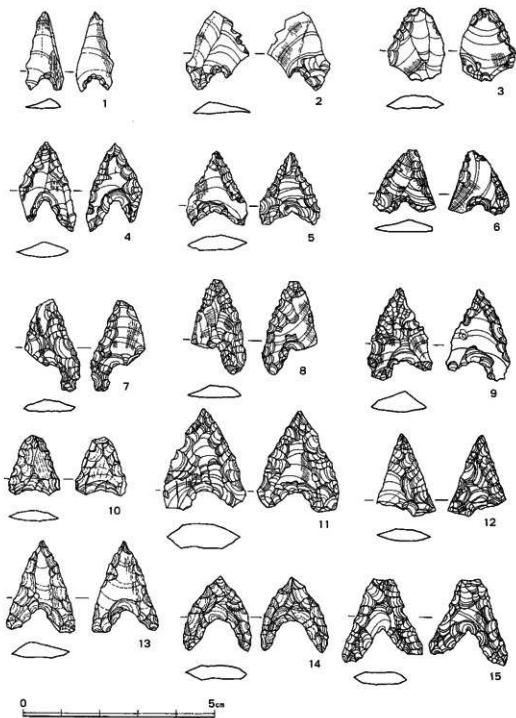


Fig. 32 石鏃実測図

の挟りの部分に集中している。主要剥離面を大きく残している。断面形は三角形をなし、0.5cmと厚い。腰岳産の黒曜石を利用。A-1・2区間ベルト出土。10は挟りの浅い三角形の小型鎌である。整形のための剥離は粗雑である。先端部は尖らず丸味をもっている。古銅輝石安山岩を素材とする。A-1区、B-1区間ベルトより出土。11は基部の挟りが比較的浅い大型の石鎌である。整形のための細部加工は両面からの押圧剥離である。やゝ粗雑で、剥離は中心部まで及ばず、主要剥離面を大きく残している。断面は六角形をなし、0.6cmと厚い。腰岳産の黒曜石を利用するが、不純物の混入がみられる。A-3区出土。12は脚部を欠失している。全体に丁寧な押圧剥離を加え整形しているが、側辺の一边は片面からのみの剥離である。良質の腰岳産黒曜石を使用。A-2区出土。13はやゝ基部の挟りの深い石鎌である。主要剥離面を大きく残している。周辺部に加えられた押圧剥離はやゝ粗雑である。石材は古銅輝石安山岩を使用。A-2区出土。14は長脚の石鎌である。側辺部は丸味をもっている。全体に丁寧な押圧剥離を二次加工として加え、整形している。特徴的な形態を示している。古銅輝石安山岩を素材として利用している。A-2区出土。14は基部の挟りは三角形状に深く、長脚の石鎌である。先端部を欠失している。脚部は直線的に外方に延びている。全体に丁寧な押圧剥離による二次加工を加え、主要剥離面は部分的に残っているにすぎない。透明度の強い良質の腰岳産の黒曜石を素材としている。A-3区出土。

石鎌の計測表は Tab. 2 に示した。

Tab.2 石鎌計測表

() は復元値

	発掘区	神区No	石材	長 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重 (g)
1	A-3区	Fig.32-1	黒曜石 (腰岳)	2.1	1.0	0.3	
2	A-3区	Fig.32-2	黒曜石 (腰岳)	2.1	1.6 (1.8)	0.3	
3	A-2区	Fig.32-3	黒曜石 (腰岳)	(1.8)	(1.5)	0.3	
4	A-1区内側	Fig.32-4	黒曜石 (東浜)	2.3	1.5	0.4	
5	A-2区	Fig.32-5	黒曜石 (腰岳)	1.7	1.6	0.3	
6	A-1・2区ベルト	Fig.32-6	黒曜石 (腰岳)	1.65	1.6	0.3	
7	A-2・3区ベルト	Fig.32-7	黒曜石 (東浜)	2.4 (2.7)	1.4 (1.6)	0.3	
8	A-3区	Fig.32-8	黒曜石 (腰岳)	2.5	1.4 (1.6)	0.3	
9	A-1・2区ベルト	Fig.32-9	黒曜石 (腰岳)	2.4	1.7	0.5	
10	A-1・B-1区ベルト	Fig.32-10	古銅輝石安山岩	1.5	1.35	0.3	
11	A-3区	Fig.32-11	黒曜石 (腰岳)	2.6	2.15	0.65	2 g
12	A-2区	Fig.32-12	黒曜石 (腰岳)	1.7 (2.5)	1.5 (2.0)	0.3	
13	A-2区	Fig.32-13	古銅輝石安山岩	2.4	1.75	0.4	
14	A-2区	Fig.32-14	古銅輝石安山岩	2.0	1.8	0.3	
15	A-3区	Fig.32-15		2.2 (2.6)	2.1	0.3	1 g

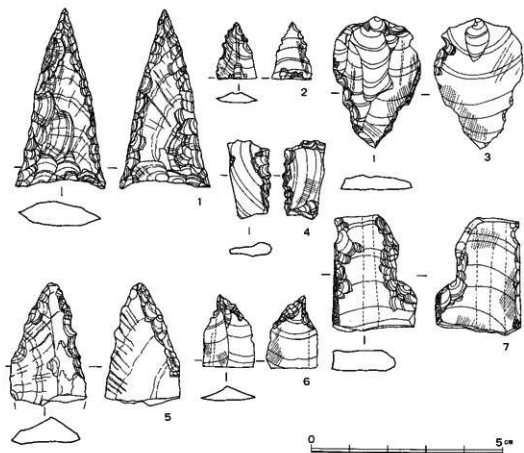


Fig. 33 スクレイバー類実測図 I

(2) 石鋸 (Fig. 33-1)

長身の二等辺三角形をなす。大型の石鏃とみることもできるが、4.7cmと長く、他の例からみて、組み合わせ石鋸の鋸頭とみの方が良い資料である。基部は浅い切りがあり、両端部は心もち外に開き、逆刺の役割を果たしている。周辺部には整形のための二次加工として丁寧な押圧剥離が両面より加えられている。主要剥離面は大きく残っている。長4.7cm、最大幅2.4cm、厚さ0.6cmを測る。古銅輝石安山岩の横刺ぎの剥片が素材として利用されている。後述する石鋸と組み合わせ鋸として使用されたものであろう。B-1区、下部貝層下の貝層ブロックからの出土で、南福寺式土器に共伴するものである。

(3) 石鋸 (Fig. 33-4)

1点の出土がある。佐世保東浜産とみられる黒曜石の不定形の剥片を素材として利用している。剥片を半折し、長方形に整形し、打点側の一边に両面から押圧剥離の二次加工を加え刃部を形成する。鋸齒は浅く明瞭でないが、形状から石鋸の粗製品とみられる。長さ2.1cm、最大幅1.1cm、厚さ0.3cmを測る。A-2区出土。

(4) 尖頭状石器 (Fig.33-2・5・6)

剥片石器で、一端を尖頭状に尖らせた石器を一括した。3点がある。Fig.33-2は縦長剥片を半折し、その先端部を素材として利用している。尖頭部は剥片先端をうまく利用し、先端部に片面より鋸行的に押圧剥離を加えている。また、折断面の中央部の両面に押圧剥離を加えている。抉りの整形途中とも考えられる。小型の剥片鏃とも考えられるが、基部の抉りが整形されていないことから剥片鏃の未製品と考えられる。あまりに小型になるために製作を中断したものであろうか。透明度の強い良質の腰岳産の黒曜石を利用している。A-1・2区間のベルトより出土。5は横剥きの不定形の一端を尖頭状に整形した石器であるが、途中で折れていて全形を知ることができない。二次加工は押圧剥離であるが、側辺の一边は両面から、他の一边は片面から刃潰し状におこなわれる。原石の表皮が側部に残っている。古銅輝石安山岩を素材としている。A-2区出土。6は縦長剥片を半折し、剥片の打点側に再加工を加え、打点部を尖らせた石器である。二次加工は押圧剥離を両面から加え、加工は特に尖頭部に集中している。2の剥片鏃未製品と類似しており、木資料も剥離鏃未製品の可能性が高い。折断面には二次加工はみられない。腰岳産の良質の黒曜石を素材としている。A-1区東側からの出土である。

(5) スクレイパー (Fig.33-3・7、Fig.34・35)

15点の出土がある。いずれも黒曜石、古銅輝石安山岩の剥片を利用して製作されている。黒曜石製品は、いずれも小型品である。

Fig.33-3は不定形の剥片を利用したスクレイパーである。略三角形をした剥片の側辺に片面から刃潰し状の二次加工が加えられている。二次加工は剥片の先端に近いところが顕著である。腰岳産の良質の黒曜石が素材として利用されている。長3.5cm、幅2.3cm、厚0.4cmを測る。A-3区出土。7はコンケープスクレイパーである。不定形のやや大型の剥片を素材としている。剥片の両端を折断し、長方形に整形している。側辺の一边の中央部に両面から押圧剥離による二次加工を加え、抉りを作り出している。抉りは径約1.0cmで、矢柄の調整具等が考えられる。長3.0cm、幅2.2cm、厚さ0.5cmを測る。腰岳産の良質の黒曜石が素材として利用されている。A-2区出土。Fig.34-1は古銅輝石安山岩の不定形の大型剥片を素材としている。片面は

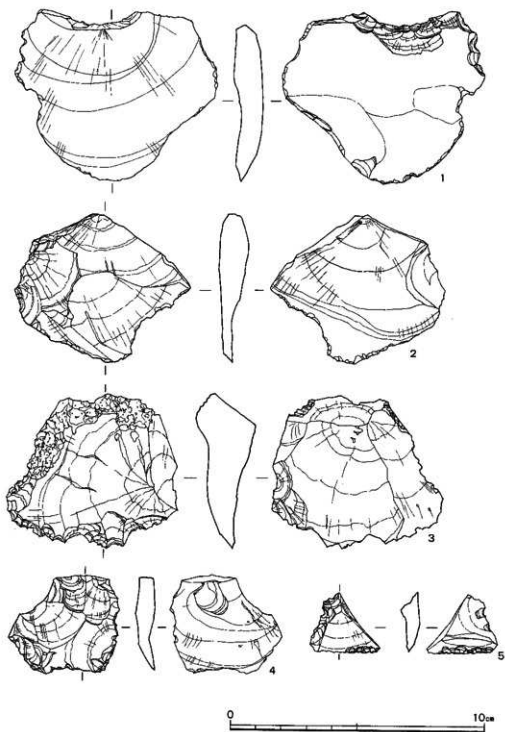


Fig.34 スクレイパー類実測図Ⅱ

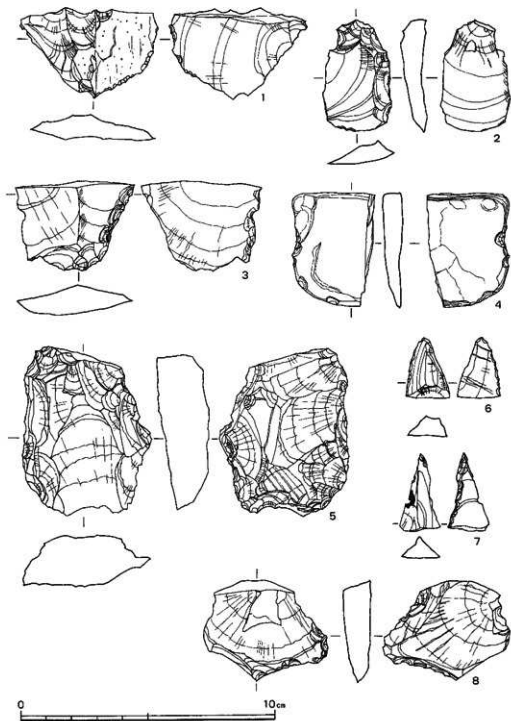


Fig.35 スクレイバー類実測図Ⅲ

原石の表皮を全面に残しており、原石から最初に剥離された剥片であることがわかる。剥離によって生じたエッジ部を刃部として使用し、使用による細かな剥離がみられる。打点を上にして、長6.8cm、幅8.0cm、厚1.1cmを測る。B-1区、下部貝層出土。2は古銅輝石安山岩の不定形の大形剥片を素材としている。打面調整は行われず、打面には原石の表皮をそのまま残している。剥離によって生じた鋭いエッジを刃部として使用するが、一部に刃部形成のための二次加工が加えられている。使用による細い刃こぼれがみられる。長5.8cm、幅6.9cm、厚1.1cmを測る。A-2区出土。3も1、2同様に古銅輝石安山岩の不定形の大形剥片を素材として利用している。剥離面を打点としているが、剥片の側辺の一边には原石の表皮を残している。自然面を残す他の一边に片面から二次加工を加えて刃部を形成している。刃部は直線的でなく粗い鋸歯状をなしている。長6.0cm、幅6.7cm、厚2.4cmを測る。A-1区東側出土。4は古銅輝石安山岩の不定形剥片を素材として利用している。剥離面を打点としている。側辺の一边と他の一边の一部に、主要剥離面側ら加えた二次加工があり刃部を形成しているが、あまり顕著ではない。大部分は剥離によって生じた鋭いエッジを刃部として利用している。使用による細い剥離が著しい。長3.9cm、幅4.4cm、厚0.8cmを測る。A-2区出土。5も他と同様、古銅輝石安山岩の不定形剥片を素材としたスクレイパーであるが、半折し一部を残すのみである。剥離による鋭いエッジを刃部として利用しているが、さらに両面から細い押圧剥離による二次加工を加え刃部の整形をはかっている。現存で、長2.3cm、幅2.8cm、厚0.8cmを測る。A-3区出土。Fig.35-1は古銅輝石安山岩の不定形の大形剥片を半折して素材として利用している。略三角形をした剥片の一边のエッジを刃部として使用している。片面に使用痕と考えられる小さな剥離が顕著に認められる。剥片の一部には原石の表皮を残している。長3.6cm、幅5.4cm、厚1.0cmを測る。A-1区最下層の砂層より出土。2は古銅輝石安山岩の不定形剥片であるが、形状は長方形をなし、打面以外は剥離によって鋭いエッジが形成されている。これらのエッジが刃部として使用されている。使用による細い剥離が顕著に認められる。いわゆる使用痕ある剥片である。長4.4cm、幅2.8cm、厚0.9cmを測る。A-2区出土。3は古銅輝石安山岩の不定形の大形剥片を素材としてつくられたスクレイパーである。半折し剥片の先端部が残るのみで、全形を知ることはできない。側辺の一边に刃潰し状の二次加工が片面より加えられ、他の側辺には錯行する関係で刃部形成のための細い剥離の二次加工が加えられている。現存で長3.6cm、幅4.7cm、厚1.2cmを測る。A-3区出土。4は扁平な礫を素材として利用している。半折しているために全形は明らかでないが、遺存部から考えると方形ないしは長方形が想定される。側辺には刃部形成のために両面から二次加工が加えられ、下辺部には両面から部分的な剥離が加えられ、刃部周辺は狭い範囲で摩耗痕が認められる。後述する擦切具かとも考えられるが、刃部に平行する条線状の擦痕が観察できないので確証はない。現存で長4.5cm、幅3.3cm、厚0.8cmを測る。A-2区出土。5は石核の残核を素材として利用している。三辺に両面から二次加工を加え刃部を形成している。刃

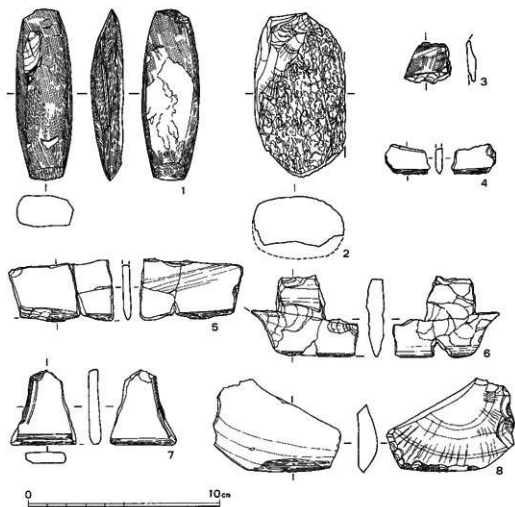


Fig. 36 磨製石斧・擦切具実測図

部は直線的でなく凹凸が著しい。長6.6cm、幅5.1cm、厚2.0cmを測る。A-3区出土。6は古銅輝石安山岩の剥片を素材としているが、折断され小破片となっているため、全形その他は明らかでない。剥片のエッジに刃澁し状の二次加工が片面から加えられている。現存で、幅1.8cm、厚0.8cmを測る。A-2・3区間のベルト出土。7は6と同様、小破片である。剥片のエッジに刃部形成のためこの二次加工の細い剥離が片面から加えられている。古銅輝石安山岩の剥片を素材としている。現存で長3.1cm、幅1.5cm、厚0.8cmを測る。A-1・2間のベルト出土。8は古銅輝石安山岩の剥片を素材として利用している。打面は原石の自然面を利用している。原石は自然面の状態から磨滅した円礫とみられる。剥片は不定形で、一部折断し欠失している。剥片の

エッジに主に片面から二次加工が加えられている。長3.9cm、幅5.0cm、厚さ1.1cm測る。B-1区出土。

(6) 磨製石斧 (Fig.36-1 ~ 3・8)

完形品1点、半折したもの2点、破片1点の計4点がある。Fig.36-1は完形品である。黒青色に白色の線や斑点がはいった蛇紋岩を素材とし、全体に丁寧な研磨を加えた優品である。長9.0cm、幅1.7~3.0cmで体中位が最も幅広く、刃部に向って狭くなる。厚さ1.1~1.6cmで、体中位が最も厚い。刃部は両端部に形成される双刃の石斧、刃部は片側から研磨される片刃石斧であるが、全体的にみた時、反対側からも研ぎが加えられるので、片寄り刃となっている。新石器時代の片刃石斧の特徴をそなえている。刃部には使用痕がみられ、刃がつけられた反対の面に、長0.4~0.7cmの長さで刃部に直交した縦の細い条線が付き、光沢をもっている。また、刃部には微小な刃こぼれがみられ、図の上部の刃部には、やや大きな欠損部がみられる。なお、図の左端の右側辺の断面形の状態や擦痕の方向からみれば、次項でのべる擦切具を用いて作られた擦切石斧の可能性が強いが、全体に研磨が施されており、当初の製作痕の大部分が消されているので断定することはできない。とはいえ、本資料を含めて、後述する擦切具は九州では類例が少なく貴重な資料である。なお、通常、石ノミとして分類され、使用は弥生時代の柱状片刃石斧と同じと考えられる。A-2区出土。2は磨製石斧の体部破片である。大部分を欠失しているが、本来の大きさは、ほぼ推定できる。現存長8.6cm、幅4.8cm、現存厚2.6cm、推定厚3.2cm前後を測る。中型の磨製石斧である。刃部、頭部は欠失するため明らかでない。体部表面は全体にわたって敲打痕がみられ、極一部に研磨痕が認められる。本資料からは完成品であるか、未製品であるかは定かでない。研磨痕が極端に少ないこと、現状で三片に分かれ、それぞれがかなり離れて出土し、接合できること等を総合すると未製品である可能性が強くなる。黒色の頁岩を素材として利用している。A-2・3区出土。3は1と同様の蛇紋岩を利用した磨製石斧の小破片である。石斧表面に残された研磨痕は非常に丁寧で、細い製作痕が二方向から残っている。製品は優品であったことがうかがえる。現存の大きさは長2.5cm、幅2.2cm、厚0.5cmと小さいが、破片の状況や現存の大きさからして1のような石ノミではなく、扁平な片刃石斧と考えられる。B-1区混貝土層の後期初頭の層より出土。8は不定形の大型の剥片の長辺の一辺に研磨によって刃部を形成した石器である。磨製石斧として分類するには躊躇するが、刃部形成の類似から、片刃石斧として取扱う。片面は原石の表皮を残し、原石から第1番に剥離された不定形の大型剥離片を素材として利用している。半折しているため全形は不明。残存する石材の長辺に、刃部と平行あるいは斜行した研磨が加えられているが、その範囲は刃部周辺の狭い部分に限られ、未製品とも思われる。後述する擦切具とも類似するが、研磨の方向が両面で異なる。

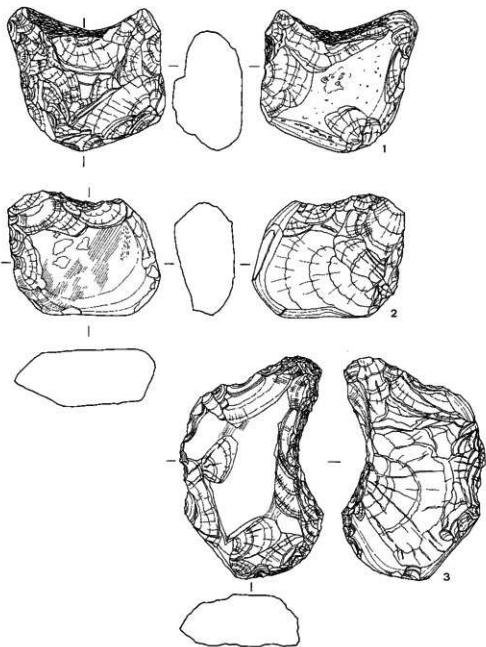


Fig. 37 双角状砾石器实测图 I

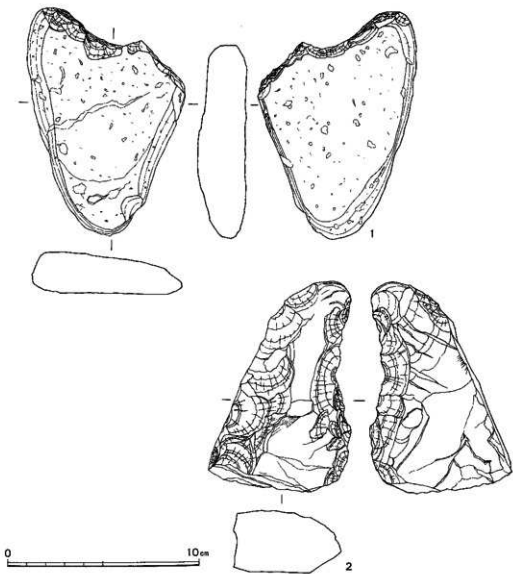


Fig.36 双角状礫石器実測図Ⅱ

ることや石材の違いから、他の用途を考える必要がある。完成品であれば石筥とも考えられる。黒色の頁岩を素材とする。現存長4.9cm、幅6.7cm、厚1.0cmを測る。A-1区出土。

(7) 擦切具 (Fig.36-4～7)

擦切技法で用いられたと考えられる石器で、一般に東日本では石鋸と称されている。しかし、西北九州では先に示したように剥片の一边に鋸齒列をつくり出した石器が同じ石鋸と呼ばれているので、混同をさけるために、本報告では擦切具という名称で説明する。擦切具と考えられる石器は4点出土している。

Fig.36-4は小破片であるが、その特徴を良くあらわしている。板状に剥離する粒子の細かい砂岩を素材として用い、その一边に両面から研磨され刃部が形成されている。研磨が加わるのは刃部のみ(0.2cm前後)で、他の面は剥離した自然面のままである。刃部は比較的鋭いが、所々に細い刃こぼれがみられ、つぶれているところもある。刃部には刃と平行した条線状の擦過痕がみられる。小破片で全形を知ることはできない。現存部は長1.6cm、幅2.3cm、厚0.3cmを測る。B-1区下部貝層出土。後期初頭、南福式土器に共伴する資料である。5も破片であるが4より大きい。4同様の板状に剥離する砂岩を素材としているが、4の石材に比較し、粒子がやゝ粗く軟質である。一边に両面から研磨した刃部がある。研磨される範囲は刃部より0.6cmの間で狭い。他の面は剥離した自然面のままである。刃部には刃に平行した条線状の擦過痕が観察できる。刃は使用による磨滅で丸味をもっている。刃部より約2cm上位に斜位の擦過痕が認められる、どのような理由によって、この痕がついたかは明らかでない。着柄と関係するものであろうか。現存部は長3.2cm、幅5.5cm、厚0.45cmを測る。A-3区出土。6は3片に割れていたが、接合することができた。粒子の細かい砂岩を素材としている。一边に刃部が形成されている。刃部は使用により丸味をもっている。刃部には刃と平行した条線が確認できる。現存で、長4.3cm、幅5.6cm、厚1.0cmを測る。A-1区東側出土。7も板状に剥離する粒子の細かい砂岩を素材としている。破片となっているが、二辺に刃部が形成されている。共に刃部は丸味をもっていて、前者とも刃部の形成に差がある。下辺の刃部は使用部分にわずかに段がついていて判別可能で、刃に平行して条線状の擦過痕がついている。側辺の刃部も段がついて明瞭なのは同様であるが刃部の形成は途中でとまり、抜け切っていない。細部加工に使用されたものであろうか。骨角器等の加工に使用された可能性もある。現存部は長3.9cm、幅3.4cm、厚0.6cmを測る。A-2区出土。

(8) 双角状礫石器 (Fig.37、38)

礫の一边に抉りを入れ、二つの突起部をつくり出す。双角状石器(礫石器)は呼ばれている石器5点が出土している。五和町沖ノ原貝塚で最初に注意された石器である。天草諸島の沿岸部遺跡から出土する特徴的な石器で、広く西北九州に分布している。

Fig.37-1は典型的な双角状石器である。頁岩質の黒い岩石の円礫を素材として利用している。片面の大部分、底面、側面の一部に原石の表皮(自然面)を残している。その他は全面に

剥離が加えられ形成されている。底辺を除く三辺に剥離後、敲打を加えられ、二辺共に挟りが形成され、三辺にはさまれた二角は角状に尖るが、先端は敲打を加えられ丸くなっている。特に上辺の敲打は顕著で、剥離の痕跡はほとんど見られないまで敲打を加えられ、挟りは半円状に湾曲している。挟りの深さは1.2cm。石器は長7.5cm、幅8.3cm、厚3.6cmを測り、重量は261gである。A-2区出土。2は頁岩の円礫を素材として利用している。全体の平面形は略四角長方形をなす。片面の大部分と底辺、側辺の二辺は円礫の面をそのまま残している。片面は大きく剥離され、側辺の他の一辺と上辺には、両面から剥離が加えられ、刃部を形成している。両辺には、さらに敲打を加えられ、刃部をつぶしているが、側辺の敲打はあまり顕著でない。上辺の敲打は顕著で、深さ0.5cmの半円状の挟りとなっている。結果として、上辺の両端に突起部がつくり出されるが、鈍く、使用の痕跡もみられない。なお、この石器は双角状礫石器と利用される前は、磨石として利用されていたとみられる。円礫面を残して片面には、磨石として利用された時の使用痕が細い条線として残っている。石器は長6.5cm、幅8.0cm、厚3.1cm、重量217gを測る。A-1区出土。3も頁岩質の黒色岩を素材としている。典型的な双角状の礫石器である。両面と側辺の一部に円礫時の表皮が残っているが、全体に剥離が加えられ整形されている。四辺共に両面から剥離が加えられ刃部が形成されている。さらに右側辺と底辺には敲打が加わる。底辺の敲打は部分的であるが、側辺部の敲打は顕著で、敲打によって半円状の大きな挟りが形成される。挟りの深さは1.3cmを測る。側辺上端の一角は挟りの形成によって、結果として嘴状の尖頭部がつくり出される。先端部は丸くなり、若干の敲打痕が認められる。先端部の片面の一部が磨滅し、剥離の稜線が消え、鈍い光沢をもっている。使用痕と考えられ、この種の石器の用途を考察する上で注意する必要がある。長11.7cm、幅7.6cm、厚2.7cm、重277gを測る。A-4区出土。Fig. 38-1は安山岩の扁平円礫を素材としている。円礫は略三角形をなし、短辺の一辺のみに敲打による加工が加えられている。敲打によって形成された挟りは半円状に深く2.0cmを測る。挟りの両端には角状の突起が結果としてつくり出されるが、右の突起は欠失している。遺存する突起部は使用によると考えられる敲打によって丸くなっている。長11.9cm、幅8.3cm、厚2.6cmを測る。重さは309gである。B-1区下部貝層出土。2は細粒の砂岩の円礫を素材としている。両面には円礫の自然面を大きく残している。両側辺に剥離を加えているが、左側部は片面のみからの打撃による剥離であり、整形と調整のための加工と考えられる。右側部は両面からの打撃による剥離を加え、刃部を形成している。剥離後に加えられる敲打は顕著でないが弧状の挟りが形成される。挟りの深さは0.8cmを測る。挟りの両端には突起が形成されているが、下辺の突起はゆるやかな丸味をもっているにすぎない。上辺の突起は両側辺からつくり出しているが、先端は丸くなる。共に突起部に細い敲打痕がみられ、その部分が磨滅している。使用痕とみられる。なお、両面の中央部の一部に磨滅面があり、細い条線も観察できることから、磨石としても使用されたと考えられる。長12.0cm、幅7.5cmも、厚3.2cmを測る。重さ

は239gである。

(9) 磨石、叩石、凹石 (Fig.39~43)

磨石、叩石、凹石は合計39点が出土している。これらの石器は植物の処理具として使用され、目的や用途が近いこともあり、併用されている場合が多いので合わせて説明する。

Fig.39-1は花崗岩質の円礫を利用している。使用面は片面で平坦になっている。細い多方向の条線が観察できる。他の面は丸味をもち、手に握るのに適しているが、やゝ大型品で筆者の手でようやく握れる程である。側面の一部も摩滅していて、使用の痕跡が認められる。A-2区出土。2は磨石の小破片である。使用面は良く使い込まれて、細い条線がみられる。側面との間に明瞭な稜線ができていて、玄武岩質の円礫を使用。A-1区出土。3は半分を失う。花崗岩質の円礫を素材としている。二面が磨石として利用されている。使用面は平坦になり、多方向の細い条線が観察でき、一部は鈍い光沢をもっている。側面の一部は叩石としても利用され、敲打痕が残っている。1と同様の大型品である。A-1区・B-1区間のベルトより出土。4は安山岩質の円礫を利用している。両面が磨石として使用されているが、顕著でない。片面の中央部にわずかに敲打痕がみられる。磨石ないしは凹石として使用された可能性もある。中型品で、手で握るには適しているが、磨石として使用する場合には指がつかえる可能性がある。A-1区出土。5は安山岩質の円礫を使用。二面が使用面となっている。使用面は平坦になり、細い条線がそれぞれ長軸と短軸に平行して走っている。小型品で、握ると完全に手の中にはいってしまう。先の大型品や中型品とは異った使用方法、あるいは対象物が異っていた可能性が強い。A-3区出土。6は安山岩質の円礫を素材している。使用面は片面で、良く磨滅し平坦になり、側面との間に明瞭な稜線ができていて、使用面には細い擦過痕が条線として残っている。未使用面とは光沢に明瞭な差があり、容易にその判断ができる。側面の一部に敲打痕がみられ、叩石としても使用されたことがわかる。中型品である。A-2区出土。7は、いわゆる石輪型をした磨石である。やゝ胴張りの長方体に仕上げているが、約半分を欠失している。やゝ風化しており、使用痕等は観察できない。安山岩質の石材を素材としている。小型品で、手の中に完全に握り込まれる。A-1・2区間ベルトより出土。

Fig.40-1は硬質砂岩の棒状円礫を利用している。断面形は隅丸長方形をなし、三面が磨石として利用されている。使用面は良く磨滅し、使用によって細い条線がついているが、その方向は長軸に平行するものと斜行するものがあり一定していない。使用面は平坦になるが、各面が接する稜線部分も磨面として使用されているために明瞭でなく、丸味をもっている。磨石として使用された後は叩石として再利用されている。敲打痕は径が大きくなる下半部には一部小範囲で認められるが、ほとんどなく、上半部に集中している。特に対向する稜線部分に顕著

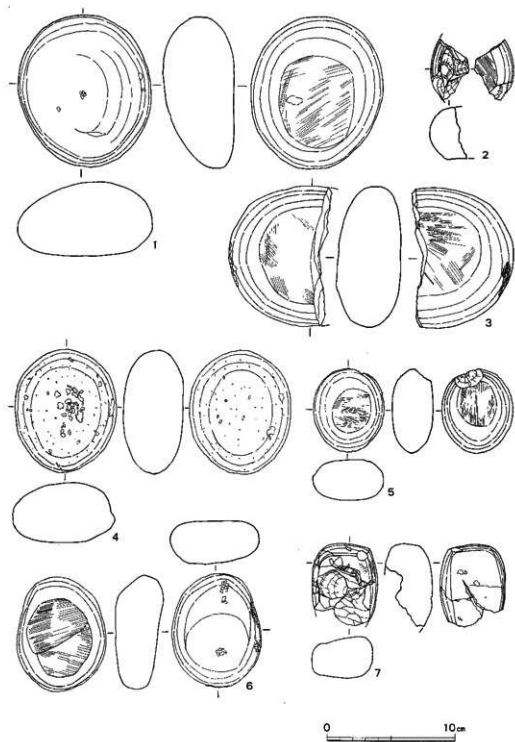


Fig. 39 磨石夷測図

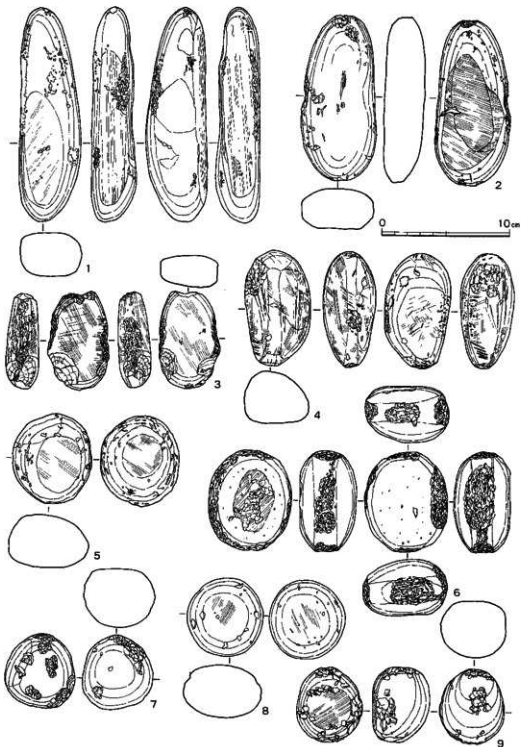


Fig. 40 磨石・叩石実測圖 I

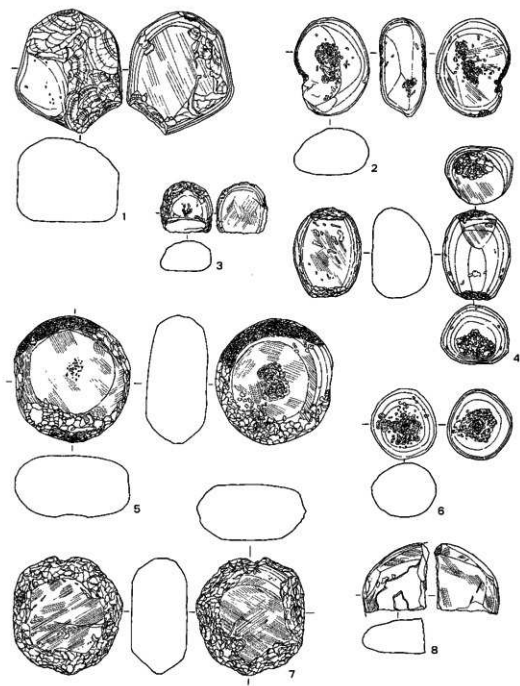


Fig. 41 磨石・卬石実測図Ⅱ

で、一部、磨石としての磨面部にも見られ、また先端部も認めることができる。打痕の範囲からみると、下半部を手に握り、上半部が打器として使用されたと考えられる。実際、下半部は握るのに適しており、横・縦方向の握り方でもしつくりとした握り方できる。打痕のつき方も加味し、この石器は単なる叩石ではなく、石器製作のための、ハンマー・ストーンとして使用されたと考えられる。B-1区出土。2は細粒の硬質砂岩の長楕円形の扁平円礫を利用している。使用面は片面で使用により平坦となり、礫の自然面との間に明瞭な稜線を形成している。使用面には長軸に直行するように細い平行条線が顕著に認められる。短辺の両端部と側辺の一部に敲打痕がみられ、特に上端部と左側辺は顕著である。断面形は長楕円形をなす。A-2区出土。3は安山岩質の扁平円礫を利用している。両面共に使用され、使用面には細い条線が確認できる。磨石としては小型で、完全に手の中にはいってしまう。敲打痕は側面と上端面が顕著で、下端面には少量の敲打痕がみられる。特に前者では、平坦面ができるまでに敲打が加えられている。下半部には敲打によって大きい剥離が内面にみられる。A-1区出土。4は安山岩質の拳大の円礫を利用している。全面が磨石として使用され、不定方向の粗い条線が顕著である。他の磨石の条線とは異なっている。対象物のちがいであろうか。磨石としては小型で、完全に手の中にはいってしまう。両側面の一部と両端面に敲打痕が認められる。側面の敲打痕はやや粗雑で大きいのに対し、下端面の打痕はこまやかで丁寧であり、一見してその相違がわかる。使用法あるいは対象物の違いがあると考えられる。A-1区出土。5は安山岩質の円礫を使用した小型の磨石である。両面が使用され、使用面は平坦になっている。叩石としても使用され、側面に敲打痕がみられる。この磨石も完全に手の中にはいってしまう大きさである。A-1区出土。6は安山岩質の円礫を利用している。やゝ丸味をもつが石鉢型の磨石に近い。両面が磨石として使用されているが、片面は使用が顕著でない。比較的使用されている面の中央部には粗い敲打痕がみられるが、凹石まではいっていない。側面はほぼ全周に敲打痕がみられ、特に顕著な部分は平坦になっている。中型よりやゝ小型の磨石で完全に手の中にはいってしまう。A-3区出土。7は安山岩質の小円礫を利用した叩石である。小型で、完全に手に握り込まれる。側面を中心に粗々しい敲打痕が部分的にみられる。A-2区出土。8は安山岩質の円礫を利用している。両面が使用されている。小型品で、手の中に完全にいってしまう。A-3区出土。9は安山岩質の小円礫を利用している。使用面は片面、良く使用され、平坦になり、礫の自然との境は明瞭な稜線がつくが、その部分に敲打が加えられている。側面と他の片面には部分的に敲打痕がみられる。完全に手の中にはいってしまう小型品である。A-1区出土。

Fig. 41-1 は玄武岩質の円礫を利用した大型の磨石である。使用されているのは片面で、良く使用され使用面は平坦になり、自然面との間に明瞭な稜線ができる。使用面には細い条線が観察できる。磨石の一部とその逆の面は大きく剥離が加えられ、敲打痕が顕著である。他は礫の自然面のままである。A-3区出土。2は砂岩の小円礫を利用している。磨石として片面が使用

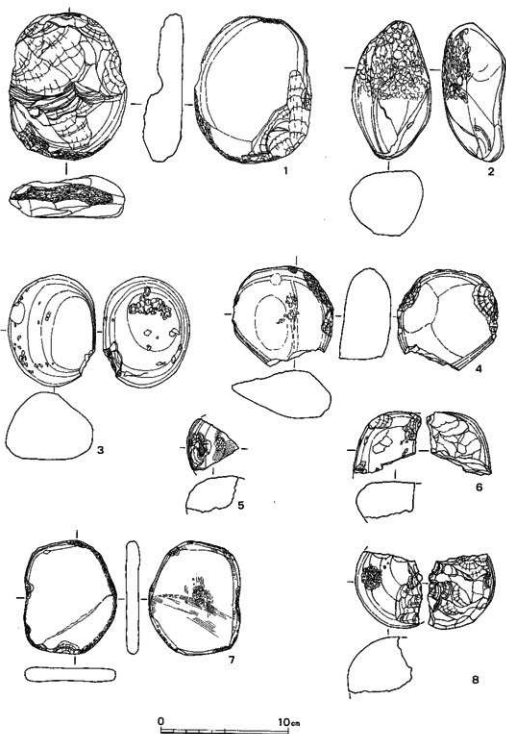


Fig. 42 磨石・叩石実測図Ⅲ

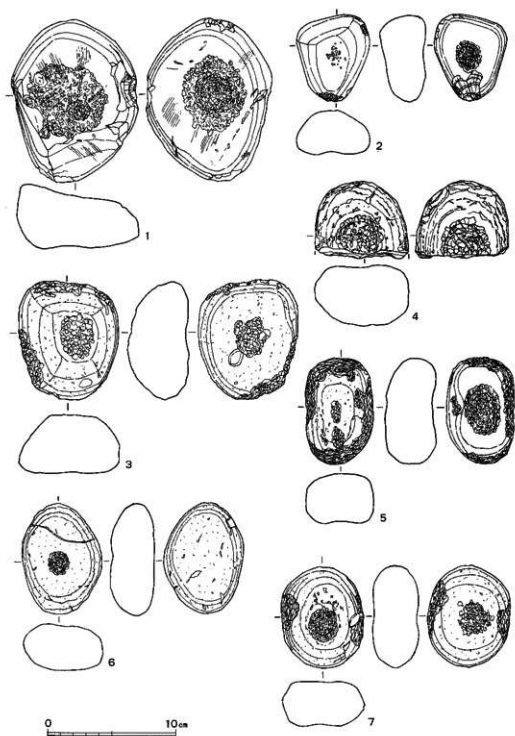


Fig. 43 凹石実測圖

されている。使用面は平坦となり、多方向の条線がみられる。使用面が異なる境には稜線がはいっている。両面の中央部には敲打痕が顕著であるが、凹石まではいっていない。凹石の初期の段階のものであろうか。左側面の敲打痕は顕著で、他の側面にも部分的に敲打痕がみられる。小型品で、完全に手の中にはいってしまう。A-1区出土。3は花崗岩質の小円礫を利用している。超小型品である。使用面は片面、良く使用され平坦になっている。側面から逆の片面にかけて敲打痕がみられる。一部を欠失している。径4cm前後、その使用目的は他の磨石とは明らかに異なることがわかる。磨石、叩石、凹石の用途については今後・充分検討する必要がある。A-3区出土。4は安山岩質の円礫を使用している。両面が磨石として使用されているが、片面は部分的使用にとどまっている。磨面は使用によって平坦になっているが、礫の自然面との境は不明瞭。両端面には敲打痕が顕著である。良く使用されたともえ、敲打痕で平坦面ができています。小型品で完全に手の中にはいってしまう。A-1区出土。5は粒子の細い硬質砂岩の円礫を利用したものである。典型的な磨石・叩石・凹石をかねた石器である。両面が磨石として使用されている。磨面は平坦になり、礫の自然面との区別は容易である。多方向からの条線が観察できるが、全体に良く磨られている。周囲の側面は一部を残して、全面に敲打痕が顕著にみられる。敲打痕を良く観察すると、場所によってその違いがあることに気づく。図上端部の敲打痕は非常に細やかで丁寧である。磨製石斧の整形時の敲打痕と類似している。この部分の敲打痕は上下面の両面からおこなわれており、側面中央には明瞭な稜線が形成されている。下半部の敲打痕は上半部の敲打痕と比較し、非常に荒々しい感じを受ける。対象物の違いによって生じたものであろうか。なお、磨面の中央部には両面共に敲打痕が加えられている。片面の敲打痕はあまり顕著でないが、他面の敲打痕は顕著で、3cm×2cmの範囲に集中して加えられ、約0.2cmの凹みを生み出している。この石器は三つの用途をこなしたことになるが、その順番は明らかにできない。A-2区出土。6は安山岩質の円礫を利用した叩石である。両面の中央部に敲打痕が顕著にみられる。一部は平坦になるまで使用されている。敲打痕が加えられた位置からすれば、凹石の初期段階のものであると考えることができる。A-3区出土。7は安山岩質の円礫を使用している。典型的な磨石・叩石を併用した石器である。磨石として使用されるのは二面で、両面共に磨面は良く使用され平坦になっている。磨面には多方向の条線が観察できる。周囲の側面は全面に敲打痕が加えられている。敲打痕はやゝ荒々しいが、両面それぞれ使い分けがあり、側面中央部には明瞭な稜線が形成され、側面を一周している。中型の石器で5とほぼ同大で、手で握るのに適している。A-2区・3区間のベルト出土。8は粒子の細い砂岩の扁平円礫を使用している。割れて4分の1を残すのみである。磨石として利用されており、両面に磨面がみられる。A-1区出土。

Fig.42-1 は粒子の細かい砂岩の扁平円礫を使用している。片面は大きな剥離がはいり、自然面を残している部分は少ないが、他の面の剥離は小さく、大部分に礫の自然面を残してい

る。これらの剥離は側面の敲打によって生じたと考えられ、この剥離によってこの石器は廃棄されたと考えられる。敲打痕は側面の全面にみられるが、側面は剥離によって大部分が失われている。敲打痕は細かい丁寧なものである。かなりの使用が考えられ打面は平坦になっている。A-3区出土。2は粒子がやゝ粗い砂岩の円礫を使用している。片面の上半部に粗い敲打痕がみられる。他は自然面のままである。B-1区出土。3は安山岩質の円礫を使用している。片面の一部と側面の一部に敲打痕がみられる。A-2区・3区間ベルト出土。4は安山岩質の円礫を使用している。一部を欠失する。片面の中央部と側面の2ヶ所に敲打痕がみられる。側面の敲打は顕著で、敲打によって平坦面がつくり出されている。A-3区出土。5は花崗岩質の円礫を使用している。磨石の小破片である。一部に剥離がみられるが、全体に良く磨れている。磨面には多方向の条線が観察できる。A-2区出土。6は安山岩質の円礫を使用している。全体の4分の1程度が遺存している。石輪型に整形された磨石であるが、やゝ風化しており、磨面等の遺存状態は良くない。7は粒子の細い硬質砂岩の扁平円礫を使用している。片面が磨石あるいは砥石として使用され、条線が確認できる。特に石材の周辺の使用が顕著で、稜線を形成している。また、中央部には小さな敲打痕がみられるが、あまり顕著ではない。側面の周囲は全面にわたって敲打痕があり、良く使用されている。非常に薄い点、特異である。A-2区・3区間のベルト出土。8は安山岩質の円礫を使用している。全体の4分の1程度を残す破片である。一部、径2cmの範囲に敲打痕がみられる。A-2区・3区間ベルト出土。

Fig. 43-1は花崗岩質の円礫を使用している。やゝ大型品である。両面の中央部にかなり広範囲にわたって敲打が加えられている。両面共にその中央部が凹んでいるが、片面はやゝ小さい凹みである。凹石として使用されている。また、敲打の周囲には研磨による条線がみられる。磨石とするには両面共に凹凸があり、そろっていないので不自然である。砥石としての使用があったと考えた方が妥当性がある。側面の一部には敲打痕も認められ、叩石として使用されたことがわかるが、あまり顕著ではない。主要な用途は凹石としての使用である。A-3区出土。2は安山岩質の小円礫を使用している。利用面の中央に敲打痕が認められるが、片面はあまり顕著ではないが、他の面は顕著で径2cmの範囲で凹みがみられる。凹みの深さは0.2cmである。下端面にも敲打痕がみられ、また、敲打による剥離も認められる。叩石としても使用されたことがわかる。小型品で完全に手の中にはいってしまう。凹石であっても、大小によって使用目的が異っていたと考えられる。今後の検討が必要であろう。A-2区出土。3は安山岩質の円礫を使用している。中型品で、手の握りとしては適当な大きさである。両面の中央部に敲打が加えられている。片面は敲打によって平坦面ができるまで使用されているが、凹みはできていない。他の面も同程度の敲打が加えられている。径2.5cmの範囲でわずかに凹んでいる。凹石として使用されたことがわかる。上下端面と側面の一部にはやゝ粗い敲打痕がみられ、叩石としても使用されたことがわかる。A-2区、3区間のベルト出土。4は花崗岩質の円礫を使用してい

る。半割している。石は二次的に焼けており、赤変している。両面の中央部に敲打が加えられている。両面とも敲打は顕著であるが、片面は平坦になった所でやめ、もう一方の面は径3.5cmの範囲で、約0.2cm凹んでいる。側面の全面にわたって敲打痕が認められるので、叩石としても使用されたことがわかる。A-2区・3区間ベルト出土。5は花崗岩質の円礫を使用している。二次的に火を受けて部分的に赤変している。両面中央部に敲打が加えられているが、片面は範囲も狭く顕著でない。他の面は4.0cm×2.5cmの範囲の楕円形に敲打が加えられ、約0.3cmの凹みがつくり出されている。側面の周囲は全面にわたって敲打痕が認められ、叩石としてもかなり使用されたことがわかる。A-2区・3区間ベルト出土。6は安山岩質の円礫を使用している。片面の中央部に敲打が加えられる。敲打痕の範囲は径1.5cmで、わずかに凹んでいる。A-3区出土。7は安山岩質の円礫を利用している。両面の中央に敲打が加えられている。片面は敲打が加えられているが、ほとんど凹みは形成されていない。他の面は径2.0cmの範囲で集中的に敲打が加えられ、0.2cmの凹みができている。両側面の一部にも敲打痕が顕著で、叩石としても使用されたことがわかる。A-2区・3区間ベルト出土。磨石・叩石・凹石の計測値はTab. 3に示した。

Tab.3 磨石、叩石、凹石計測表

	発掘区	標図No	石材	長 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重 (g)	使用用途
1	A-2区	Fig.39-1	花崗岩	11.9	10.4	5.8	978	磨石
2	A-1区	Fig.39-2	玄武岩	4.7 $\pm\alpha$	3.1 $\pm\alpha$	4.0	53 $\pm\alpha$	磨石(破片)
3	A-1・B-1区ベルト	Fig.39-3	花崗岩	11.0	7.1 $\pm\alpha$	5.0	606 $\pm\alpha$	磨石、叩石
4	A-1区	Fig.39-4	安山岩	906	7.9	4.7	397	磨石、台石or凹石?
5	A-3区	Fig.39-5	安山岩	6.6	5.6	3.2	114	磨石
6	A-2区	Fig.39-6	安山岩	8.9	7.5	3.8	256	叩石、磨石
7	A-1・2区ベルト	Fig.39-7	安山岩	6.3 $\pm\alpha$	5.1	3.5 $\pm\alpha$	142 $\pm\alpha$	磨石
8	B-1区	Fig.40-1	砂岩	16.8	4.9	3.3	431	叩石、磨石
9	A-2区	Fig.40-2	砂岩	13.0	6.9	3.1	351	磨石、叩石
10	A-1区	Fig.40-3	安山岩	7.5	4.9	2.6	127	磨石、叩石
11	A-1区	Fig.40-4	安山岩	9.1	5.2	4.1	222	叩石、磨石
12	A-1区	Fig.40-5	安山岩	7.1	6.2	4.1	190	叩石、磨石
13	A-3区	Fig.40-6	安山岩	7.8	6.5	4.4	283	叩石、凹石、磨石
14	A-2区	Fig.40-7	安山岩	5.8	5.5	4.5	152	叩石
15	A-3区	Fig.40-8	安山岩	6.2	6.0	4.1	168	磨石
16	A-1区	Fig.40-9	安山岩	5.8	5.1	4.4	160	叩石、磨石
17	A-3区	Fig.41-1	玄武岩	9.6	8.4	6.5	770	叩石、磨石
18	A-1区	Fig.41-2	砂岩	7.6	5.8	4.7	194	叩石、磨石
19	A-3区	Fig.41-3	花崗岩	4.0	3.9	2.4	50	叩石、磨石
20	A-1区	Fig.41-4	安山岩	6.9	5.3	4.6	206	叩石、磨石

	発掘区	種別No	石材	長 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重 (g)	使用用途
21	A-2区	Fig.41-5	砂岩	8.9	9.1	4.7	636	叩石、凹石、磨石
22	A-3区	Fig.41-6	安山岩	5.6	5.1	4.2	140	叩石
23	A-2・3区ベルト	Fig.41-7	安山岩	9.2	8.5	4.4	506	磨石、叩石
24	A-1区	Fig.41-8	砂岩	5.2+ α	4.8+ α	2.7	105+ α	叩石、磨石
25	A-3区	Fig.42-1	砂岩	11.6	9.2	3.0	377	叩石
26	B-1区	Fig.42-2	砂岩	10.7	6.2	5.0	383	叩石
27	A-2・3区ベルト	Fig.42-3	安山岩	8.7	6.8	5.3	329	叩石
28	A-3区	Fig.42-4	安山岩	7.9	7.9	3.7	289	叩石
29	A-2区	Fig.42-5	花崗岩	4.1+ α	4.0+ α	2.5+ α	34+ α	磨石
30	A-1区	Fig.42-6	安山岩	4.9+ α	4.5+ α	2.7+ α	71+ α	磨石
31	A-2・3区ベルト	Fig.42-7	砂岩	9.0	6.7	1.0	111	叩石、磨石、凹石(?)
32	A-2・3区ベルト	Fig.42-8	安山岩	5.5+ α	5.1+ α	4.1+ α	164+ α	叩石(破片)
33	A-3区	Fig.43-1	花崗岩	12.8	9.8	5.1	704	叩石、凹石、磁石
34	A-2区	Fig.43-2	安山岩	6.8	5.7	3.6	145	叩石、凹石
35	A-2・3区ベルト	Fig.43-3	安山岩	9.3	7.8	4.8	345	叩石、凹石
36	A-2・3区ベルト	Fig.43-4	花崗岩	6.1+ α	7.2	4.7	265+ α	凹石、叩石(半欠)
37	A-2・3区ベルト	Fig.43-5	花崗岩	8.1	5.3	4.0	243	叩石、凹石
38	A-3区	Fig.43-6	安山岩	8.7	6.3	3.4	234	凹石
39	A-2・3区ベルト	Fig.43-7	安山岩	8.1	6.5	3.6	205	叩石、凹石

10 石皿 (Fig.44)

石皿は破片2点がある。いずれも粒子の細かい砂岩を利用している。

Fig.44-1は砂岩の大型の円磔を使用している。二辺を残しているが、本来の大きさは不明。石のカーブから復元すると40cm以上の大きさが推定される。現存するのは4分の1程度である。現存で長19.5cm、幅20.4cm、厚6.3cmを測る。両面共石皿として使用されている。片面は中央部に磨面があり、若干凹んでいる。磨面には多方向からの条線がみられる。磨面と縁の境には細かい敲打痕がかなりの範囲でみられる。また、縁の部分にも磨面がみられるが、この部分は外側に傾斜している。上方の縁の部は磨面から連続して若干の凹みをもって外に傾斜している。石皿からの注ぎ口の役割をもっていたと考えられる。他の一面も中央部に磨面をもつ。中央部に向かって大きく凹んでいる。また、それに隣接した縁の部分に磨面があり、若干の凹みをみせている磨面には条線が多方向から認められる。A-2区出土。2は1に比較し、若干小さいと考えられる。側辺の二辺を残しているが、大きさは不明。板状に剥離する砂岩が使用されている。片面のみが石皿として利用されている。磨面には平行した条線が一面に観察できる。磨面はほぼ平坦であるが、石皿の中央部にむかって、凹んでいる。現存で、長15.3cm、幅11.7cm、

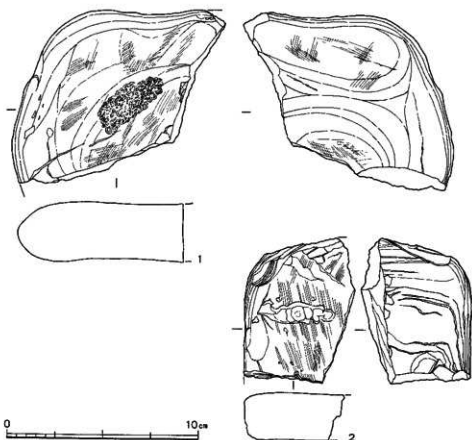


Fig.44 石皿実測図

厚4.9cmを測る。A-2区・3区間ベルト出土。

(II) 石錘 (Fig.45~50)

扁平円礫の両端を打ち欠き抉りを入れた打ち欠き石錘と敲打により溝をめぐらした有溝石錘の二者がある。有溝石錘は1点のみで、他は全て打ち欠き石錘である。計45点が出土している。打ち欠き石錘は打ち欠き部の位置によって次の4類に分類できる。

I類 扁平円礫の長軸両端に1ヶ所に打ち欠きを加え、抉りをつくり出すもの。

II類 扁平円礫の短軸両端に1ヶ所に打ち欠きを加え、抉りをつくり出すもの。

III類 扁平円礫の長軸、短軸両端1ヶ所に打ち欠きを加え、抉りをつくり出し、十字形に結

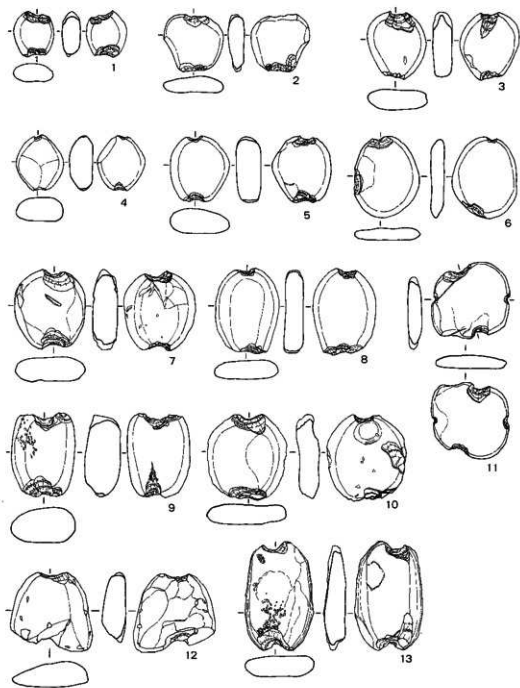


Fig. 45 石錘実測図 I

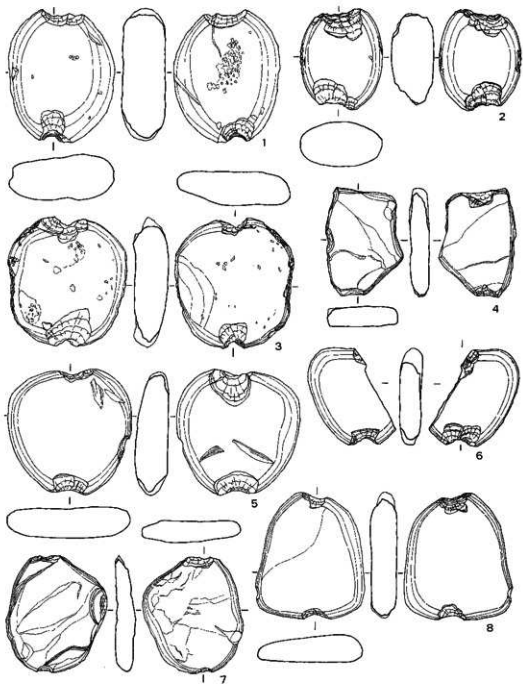


Fig.46 石錘實測圖Ⅱ

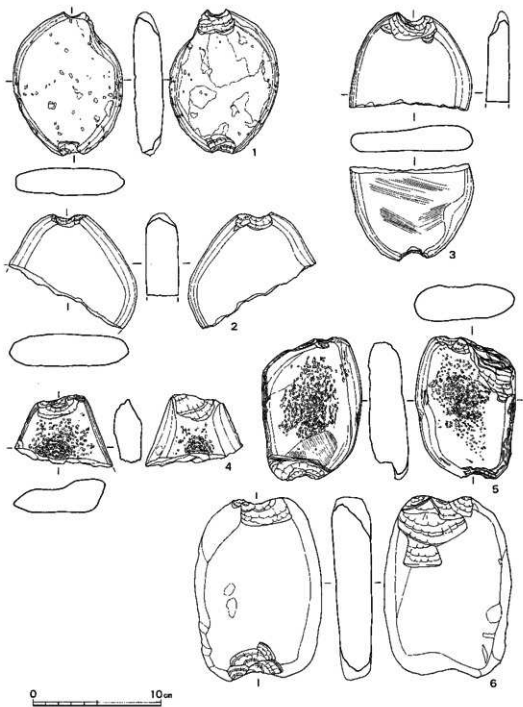


Fig. 47 石鐮实例图Ⅲ

ぶようにしたもの。

IV類 扁平円礫の長軸両端2ヶ所と短軸両端1ヶ所に打ち欠きを加え、#状に結ぶようにしたもの。

また、大きさ、重量によっても分類可能であるが、明確な境界線はなく、大きさでは漠然と大、中、小の三種に分けられ、重量も大きさに比例している。

以下、個別に若干の説明を加える。Fig.45-1は最小の石錘、打ち欠きは両端共、両面から加えられ、挟りの中央に紐ずれの痕跡が認められる。2はやゝ扁平な円礫、両端部の打ち欠きは上が片面から、下が両面から加えられる。3は両端部の打ち欠きは、上が両面から加えられ、かなり粗い。一部、石の節理にそって割れている。下は打ち欠きというより、粗い敲打を加えられ、平坦にしているだけである。4はや厚味のある円礫を利用している。両端部の打ち欠きは上下共に敲打を加え、浅い溝状の凹みをつけている。5は上下端の打ち欠き、いずれも片面から打撃を加え、割れ口の部分にさらに敲打を加えて調整している。6は扁平な円礫を利用している。打ち欠きは両端共片面から錯行で加えられている。下端の挟りはほとんど形成されていない。7の両端部の打ち欠きは、上が両面から、下が片面から加えられ、稜線部分を敲打でつぶし調整している。挟りは深く確実となっている。8の両端の打ち欠きは両面から加工、挟り部分にさらに敲打を加えたものであるが、剥離面が小さいことを考えれば、最初から敲打によって挟りを成形したと考えることもできる。なお、下の挟りの両側は欠失している。9は先ず、円礫の両端部を割り、平坦面を形成した後、敲打によって挟りを入れたとみられる。そしてさらに両面の挟りに敲打を加え、溝状にくぼめて、紐のかかりをより確実に行っている。10は両端の打ち欠きは共に同じ片面から加えられ、打ち欠きによって生じた稜線を敲打でつぶし、挟りをより確実にしている。11は長・短軸の両端4ヶ所に挟りをつくり出した石錘である。図の上下は錯行で片面から打ち欠きを加え、さらにわずかに敲打を加えて、挟りをより確実にしている。左右の挟りは敲打によるものと考えられ、挟りは上下のものに比較し、非常に小さい。補助的に入れられた挟りであるから、扁平な礫を利用している。12は両端部の打ち欠きは共に敲打によるものであるが、下の挟りは自然の割れ口を利用している。挟りは確実である。13の両端の打ち欠きは、共に両面から加えられ、後に敲打を加え、挟りを深くしている。

Fig.46-1の両端の打ち欠きは上下共に両面から加えられ、挟りの割れ口に後から敲打を加え、細部加工を施している。なお、下端部は剥離部に敲打を加え溝状に調整している。なお、片面の中央部には敲打痕が顕著に残っている。凹石にはならないが、台石あるいは叩石として使用されたとみられる。2は両端部の挟りは両面からの打ち欠きにより、後から割れ口の稜線を敲打を加えつぶし、挟りをより確実なものにしている。なお、両面の側面中央には敲打痕があり、叩石としても使用されている。3は両端部の打ち欠きは両面から加えられている。上端部には後から敲打を加えられ、挟りをより確実なものにしている。側面の一面中央部には敲打痕があり、

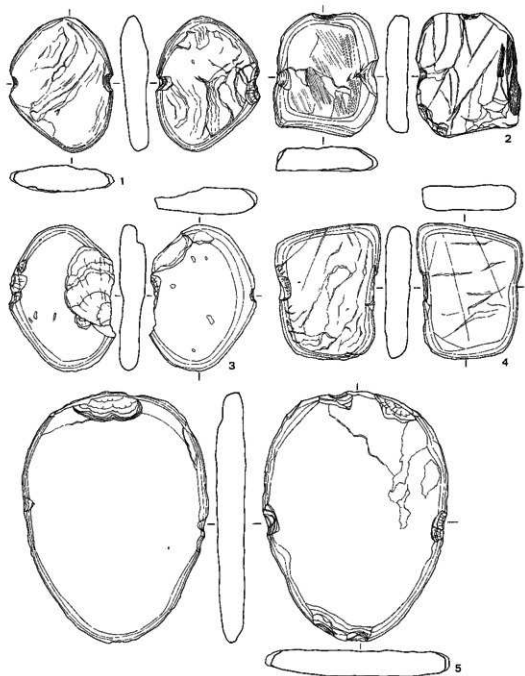


Fig.48 石錘実測図IV

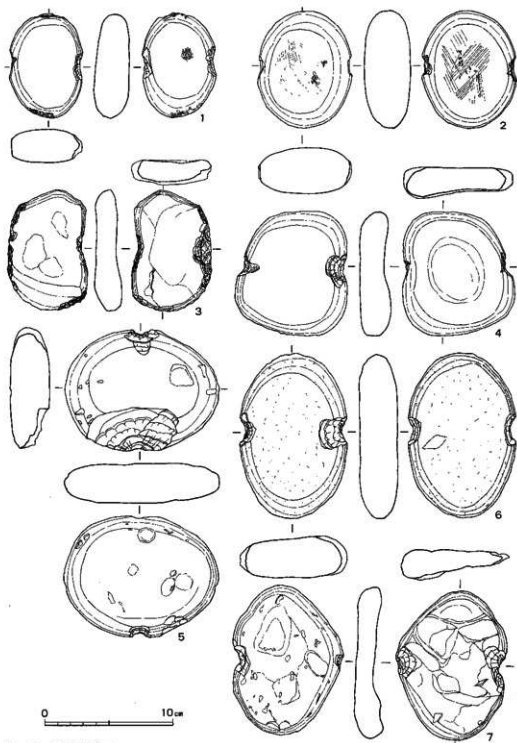


Fig.49 石籠実測図V

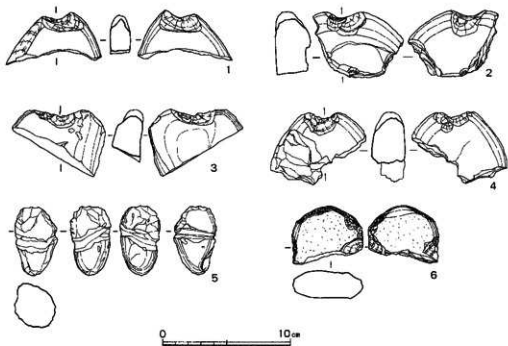


Fig.50 石錘実測図VI

前者同様に叩石に転用されている。4は扁平礫を半折して素材としている。両端部と側面の3ヶ所に打欠きがみられる。上端と側面は片面からの打欠き、下端は両面からの打欠きである。側面の一面は自然のままであるが、わずかに湾曲しており、紐を結ぶには問題ない。十字に結ぶ石錘である。5は両端の打欠きは両面からのもので、挟り部の稜線にわずかに敲打を加えている。6は一部を欠失している。両端部の打欠きは両面から加えられ、挟り部分には研磨を加え、より確実にしている。上端の挟りは約半分が失われるが、製法は同じである。7の両端の打欠きは上端が両面から、下端が片面からおこなわれている。8は両端の打欠きは両面から加えられ、挟り部に後から敲打を加えている。挟り部には紐ずれの痕跡が残っている。

Fig.47-1は両端の打欠きは上端が片面から、下端が両面から加えられたものである。2は半折している。上端の打欠きは両面から加えられ、後に挟り部を加え、確実なものにしている。3も半折し、半分を失う。上端の打欠きは両面から加えたものであるが、強弱の差が著しい。なお、片面に擦痕が観察でき磨滅している。砥石として再利用されたとみられる。4も半折し、約半分を失っている。上端の打欠きは両面から加えられる。また、後から一部に敲打が加えられているが、明瞭な挟りは形成されていない。二面とも、中央部に敲打痕が著しい。両面共叩石として利用されているが、特に片面は顕著で、径2.5cm、深さ0.5cmの凹みができている。5

は前後関係は明らかでないが、石錘、磨石、凹石の三種類に使用されている。両端の打欠きは上端は両面から加えられるが、面の強弱が著しい。下端は割れていて不明。両面共に中央部とその周辺には敲打痕が顕著であるが、明瞭な凹みは形成されていない。磨石として使用された研磨痕は両面および側面に認められ、細い条線が観察でき、良く磨滅している。6の両端の打欠きは、上端が両面から加えられたものであるが、剥離に大きな差がある。下端は片面から加えられているが、自然面との関係でバランスがとれている。

Fig. 48-1は左端の打欠きは共に両面から加えられ、挟り部に敲打をわずかに加え、確實なものにしている。2は自然の挟りに、わずかな研磨を加えている。挟りはあまり明瞭でない。両面共、部分的に研磨された部分があり、砥石として使用されたと考えられる。3は左端の打欠きは共に同一面の片面から加えられ、左端(図左を基本にする)は後から敲打を加えている。4は共に自然の挟りに、若干の研磨を加え、挟りを形成している。挟りはあまり明瞭でない。5は大型の扁平な石錘である。長軸両端に2ヶ所づつ、短軸左右端に各1ヶ所の打欠きが片面より加えられている。挟りは石質の関係もあり、あまり明瞭ではない。紐のかけ方は複雑なものとなっている。Fig. 49-1の左右端の打欠きは、共に側面からの敲打によるものと考えられる。上下端側面と片面の一部に敲打痕が認められ、叩石としても利用されたことがわかる。2は端正な楕円形の隙で、両面に条線が観察され磨石に使用されていたものを石錘に転用したと考えられる。左端の打欠きは、側面からの敲打によるもので、後から研磨を加えて調整している。両面には、わずかに打痕も認められる。3は左端の打欠きは、左端が片面から加えたもので、右端は自然の挟りに若干の敲打を加えている。側面に部分的に敲打痕があり、叩石としても使用されていたことがわかる。4の左右端の打欠きは側面からの敲打によるものである。5の左右端の打欠きは、共に同一片面から加えられたものであるが、右端は大きく欠けている。左端は後から敲打が加えられ、挟りの調整をおこなっている。6の左右端の打欠きは、側面からの敲打によるもので、挟りは明瞭で深い。7の左右端の打欠きは両面から加えられたものであるが、右端の挟りは明瞭でない。

Fig. 50-1~6は5の有溝石錘を除いて破片であり、一ヶ所の挟りをもつものである。1は両面からの打欠きで挟り部の稜線に敲打を加えている。2も1と同様の工程によって挟りが形成されている。共に挟りは明瞭である。なお、2は短軸に挟りを持つ石錘と考えられ、挟りの対応する部分に打欠きがみられるが、大部分を失っている。また、一面は砥石として利用され、凹んでいる。3は両面から打欠きを加えられている。4は両面からの打欠きで、後から挟りの部分に敲打が加えられている。6は左右端に敲打による挟りが形成されるが、あまり挟りは明瞭でない。

石錘の特徴、計測値はTab. 4にまとめた。

Tab.4 石種計測表

	発掘区	辨別No.	石材	長 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重 (g)	打5次部	備考
1	A-1西½	Fig.45-1	安山岩?	3.6	3.1	1.4	19	I	
2	A-1東½	Fig.45-2		4.4	4.7	1.3	35	I	
3		Fig.45-3	礫岩	5.3	4.7	1.6	53	I	
4		Fig.45-4		4.3	3.7	1.9	36	I	
5	A-1東½	Fig.45-5	砂岩	5.2	4.7	2.0	69	I	
6	A-3	Fig.45-6		6.4	5.1	1.1	51	I	
7	A-2	Fig.45-7	安山岩	6.3	5.6	1.9	81	I	
8	A-2・3ベルト	Fig.45-8	砂岩	6.6	5.0	1.6	78	I	
9	A-1	Fig.45-9	安山岩	5.6	5.0	2.8	119	I	
10	A-2・3ベルト	Fig.45-10		6.7	6.1	1.6	105	I	
11	A-2	Fig.45-11	砂岩	6.2	5.7	1.1	56	Ⅲ	
12	B-1	Fig.45-12		6.2	6.4		59	I	
13	A-3	Fig.45-13	砂岩	8.5	5.4	1.6	107	I	
14	A-2	Fig.46-1		10.3	8.4	3.6	266	I	叩石として利用
15		Fig.46-2	安山岩	7.9	6.5	3.3	204	I	叩石として利用
16	A-1	Fig.46-3	安山岩	10.1	9.4	5.6	319	I	
17	A-1東½	Fig.46-4	砂岩	8.5	5.9	1.5	118	Ⅲ	
18	A-2	Fig.46-5	安山岩	9.9	9.8	2.5	348	I	
19	A-3	Fig.46-6	砂岩	7.5	7.1+ α	1.7	118+ α	I	一部欠損
20	A-2	Fig.46-7	砂岩	9.2	7.9	1.6	144	I	
21	A-3	Fig.46-8	安山岩	10.0	8.5	2.0	224	I	
22	A-3	Fig.47-1	安山岩	11.1	8.6	2.1	258	I	
23	A-3	Fig.47-2	安山岩	8.9+ α	10.0+ α	2.6	220+ α	I	半欠
24	A-3	Fig.47-3	砂岩	7.5+ α	9.7	1.8	179+ α	I	半欠
25	A-2・3ベルト	Fig.47-4		56+ α	7.7+ α	1.7	101+ α	I	叩石として利用
26	B-1	Fig.47-5	砂岩	11.1	7.9	2.9	370	I	叩石、礫石として利用
27	A-3	Fig.47-6	礫砂岩	14.3	10.0	3.1	654	I	
28	A-2	Fig.48-1	砂岩	10.6	8.2	2.2	220	Ⅱ	
29		Fig.48-2	砂岩	9.7	8.1	1.7	205	Ⅱ	一部礫石に利用
30		Fig.48-3	安山岩	11.5	8.4	1.5	191	Ⅱ	
31	A-1・2ベルト	Fig.48-4	砂岩	10.7	8.3	1.6	297	Ⅱ	研磨

	発掘区	図号	石材	長 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重 (g)	打ち欠き部	備考
32	A-2	Fig. 48-5	緑泥片岩	19.5	15.6	2.2	1060	IV	
33	A-4	Fig. 49-1	安山岩	8.1	5.8	2.3	154	II	叩石として利用
34	A-4	Fig. 49-2	砂岩	9.1	7.4	3.6	344	II	磨石として利用
35	A-3	Fig. 49-3	安山岩	9.4	6.3	1.6	134	II	叩石として利用
36	A-3	Fig. 9-4	砂岩	9.7	8.9	1.9	274	II	
37	A-1・2ベルト	Fig. 49-5	礫石	12.1	9.5	3.1	369	II	
38	A-1・2ベルト	Fig. 49-6	安山岩	13.0	8.5	3.0	347	II	
39	B-1	Fig. 49-7	安山岩	11.7	8.7	2.1	202	II	
40	A-2	Fig. 50-1		3.7+α	7.5+α	1.6	49-α	I	
41	A-1・Bベルト	Fig. 50-2		6.9+α	5.5+α	2.7	120+α	II?	砥石として利用
42	A-3	Fig. 50-3		5.2+α	7.4+α	2.2	81+α	I?	
43	A-2	Fig. 50-4		5.6+α	7.4+α	2.6	78+α	I?	
44	—	Fig. 50-5	安山岩	5.4	3.4	3.2	63		有溝
45	A-1西半	Fig. 50-6		4.6+α	5.6	2.2	63+α	II	叩石として利用

12 砥石 (Fig. 51)

磨製石器、骨角器等の制作具の一つとして砥石がある。10点が出土している。

Fig. 51-1は粒子の細かい板状に剥がれる砂岩を利用している。外形はほぼ方形に整形している。表裏二面が砥石として利用されている。片面は中央部に粗い敲打痕があり、その周辺に多方向からの比較的粗い条線がついている。全面が砥石として使用されているが、特に右下半部は良く磨かれ、やゝ凹んでいる。他の一面も全面が砥石として使用されている。下半部は粗い敲打痕がかなりの範囲で認められる。これら敲打痕と重複するように粗い条線が多方向からはいつている。なお、周囲の側面には部分的に敲打痕がみられる。B-1区下部貝層出土。2は粒子の細かい硬砂岩を素材としている。この砂岩に節理がはいる、板状に剥離する。ほぼ長方形に整形している。片面はほぼ全面が砥石として利用される、細かい条線が観察できるが、石が硬いためあまり磨かれていない。他の一面は自然に剥離した面が大部分であるが、一部、小範囲に研磨痕がみられる。A-1区・2区ベルト出土。3は欠けて小破片となっている。やゝ粒子の粗い板状の砂岩を素材としている。片面と側面の二面が砥石として使用されている。特に側面は使用により挟れており、骨角器等の細部加工に利用された可能性がある。他の面は自然に剥離した自然面のままである。B-1区上層貝層出土。4は粒子の細かい板状の砂岩を素材としてい

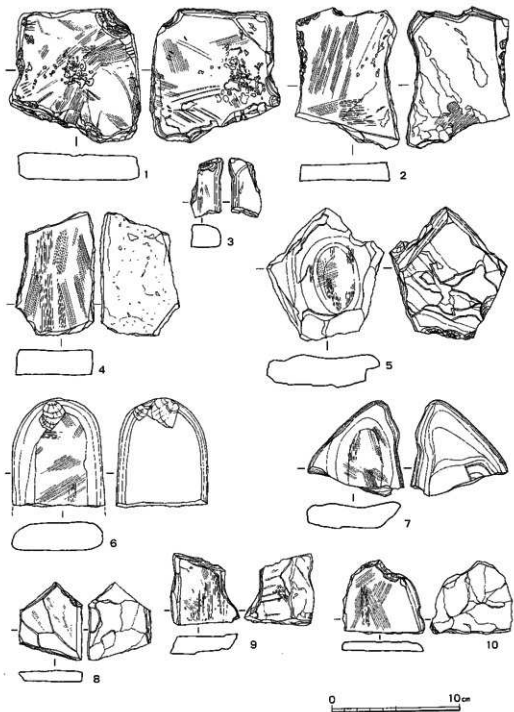


Fig.51 磁石実測図

る。割れており、原形は不明。現状ではほぼ長方形をなす。片面のみが砥石として利用されている。良く研磨され、細い条線が無数についており、使用面は若干凹んでいる。A-3区出土。5は粒子の細い板状に剥離する砂岩を素材としている。ほぼ五角形に整形されている。砥石として使用されるのは片面のみである。面のほぼ中央の5.5cm×4.5cmの範囲が良く使用され凹んでいる。凹みの深さは約0.3cm。砥石面には細い条線が存在する。A-3区出土。6は粒子の細い砂岩の扁平円礫を利用している。半折し、約半分を残している。石材は火を受け変色している。砥石として使用されるのは片面で、他は自然面のままである。砥石面には細い条線がみられる。A-1区出土。7は粒子の細い砂岩の扁平円礫を素材としている。半折してて全形を知ることはできないが、使用面からするとほぼ半分が残っていると考えられる。使用面は片面で、他は自然面のままである。砥石としてしようされたのは中央部である。良く使用されたとみられ、幅4.5cm、長5.5cm+αの範囲で凹んでいる。凹の深さ0.3cmである。砥石からみて磨製石斧等の研磨に用いられたと考えられる。B-1区上層貝層出土。8は粒子の細い板状に剥離する砂岩を素材とする。割れているため全形は不明。非常に薄いので大きいものではない。片面が砥石として利用されている。A-1区出土。9も粒子の細い板状に剥離する砂岩を利用している。砥石として使用されるのは一面である。砥石には細い条線が観察できる。また、わずかであるが、砥面に細い敲打痕がある。裏面の中央部にも敲打痕が観察される。A-2区・3区間ベルト出土。10は、粒子の粗い砂岩を使用している。片面のみが砥石として使用される。砥面には多方向からの擦過痕が条線として残っている。A-1区出土。

各砥石の計測値は Tab. 5 に示した。

Tab. 5 砥石計測表

	発掘区	図号	石材	長 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重 (g)	備 考
1	B-1区	Fig. 51-1	砂岩	10.5	10.2	2.1	326	砥石 (両面) 台石
2	A-1・2ベルト	Fig. 51-2	硬砂岩	10.8	8.0	1.5	188	砥石 (両面)
3	A-3区	Fig. 51-3	砂岩	9.4	6.0	1.9	26	砥石 (片面)
4	B-1区	Fig. 51-4	砂岩	4.3	2.3	1.8	195	砥石 (3面)
5	A-3区	Fig. 51-5	砂岩	10.1	8.8	2.3	239	砥石 (片面)
6	A-3区	Fig. 51-6	砂岩	9.6+α	7.3	2.2	228	砥石 (片面) 2次加熱
7	B-1区	Fig. 51-7	砂岩	7.5+α	7.3	2.0	107	砥石 (片面)
8	A-1区	Fig. 51-8	砂岩	5.6	4.9	0.9	33	砥石 (片面)
9	A-2・3ベルト	Fig. 51-9	砂岩	5.6	5.3	1.4	51	砥石 (片面) 台石
10	A-1区	Fig. 51-10	砂岩	5.7	6.3	0.7	40	砥石 (片面)

3. 骨角器・貝製品

本遺跡からは、貝塚という特性から他遺跡からは出土しない骨角器や貝製品が多量に出土している。骨角器、貝製品は大別して、実際に利器として使用された実用利器と腕輪、耳飾等の装身具に分けられる。

前者には単式釣針、結合釣針、離頭話、ヤス、貝鏝等の漁撈具、貝刃、骨篋等があり、後者には、笄、角・骨製耳飾(玉)、貝製飾品、貝製玉類、歯牙製玉類、貝輪等がある。

(1) 釣針 (Fig. 52)

釣針には単式釣針と結合式釣針の二種がある。また、それぞれの未製品がある。単式釣針2点、同未製品1点、結合式釣針軸部1点、同未製品1点、針部(?)1点、釣針の素材1点の計6点がある。

1は単式釣針未製品である。イノシシの牙を素材としている。牙を半截し、エナメル質部分を残した平板をつくり出すが、半截部分は打割のまま放置されている。周辺には研磨を加え、釣針の外形をつくり出している。短辺の一辺には細い打割を加え袢りを入れ、さらに擦切技法によって袢りを深くしようとしているが、中断され釣針の完全な外形の整形まで至っていない。このまま製作作業を進めれば小型の釣針ができあがるが、縄文人のイメージに合わなかったものであろうか。右上端部の一部に、外形研磨後の欠損部があり、この割れによって中断された失敗品であろうか。長2.2cm、幅1.5cm、牙の厚さ0.2cmを測る。A-2区出土。2は単式釣針の軸部、腰部で折れ、針部を失う。鹿あるいはイノシシの四肢骨を素材として利用している。軸部の先端は尖り、軸部は断面方形に仕上げている。紐を緊縛するための袢りは先端部2ヶ所にみられるが、上が軸の左側、下が軸の右側と特徴的なあり方を示している。袢り間の距離は0.7cmとやや離れている。袢り間には斜位、横位の線状に黒色の付着物が残っている。そのあり方から紐結びの痕跡とみられる。紐結びの固定のため、有機質の樹脂等が使用されていたと考えられる。腰部は軸部に比較し薄くなっている。針部は欠失しているが、他例からすると逆刺はない単純なものと考えられる。遺存する軸部は長3.8cm、幅0.3cm、厚0.3cmを測る。釣針の復原幅は1.4cm前後となる。A-1区出土。3も単式釣針の軸部から腰部にかけての破片で、針部を欠失している。鹿あるいはイノシシの四肢骨を素材として利用している。四肢骨の骨端部に近い所を利用し、軸部と腰部には骨の内側の面がそのまま残っている。軸部は先端部は平坦に取られ、軸上半部は断面長方形、下半部は円形に近い多面体となっている。腰部は素材の関節上、軸部とはねじれて外にふくらみ、やや薄くなり、断面形は楕円形をなす。紐を緊縛するための袢りは軸部上端部に接して2ヶ所がつくられている。袢りは幅が上が0.3cm、下が0.4cm、

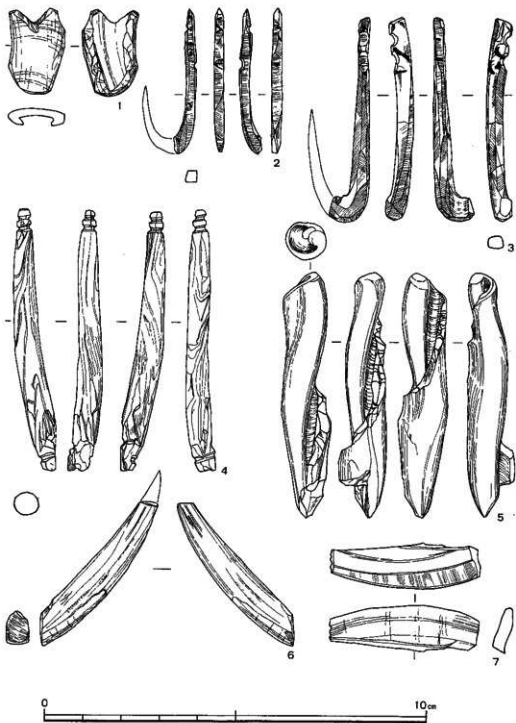


Fig. 52 釣針実測図

深0.1~0.15cmである。扱いは釣針に対し、その前後にあるのではなく、90度ぶれている。非常に特異なあり方であるが、これも素材との関係で制約があるためによるものである。本例も2同様に扱りの周辺に線状の黒色の付着物が認められる。紐結びの痕跡で、固定のため、樹脂等が使用された可能性が高い。針部は欠失しているが、2同様に無鐵の可能性が高い。軸部は長5.3cm、幅0.3cm-0.4cm、厚0.3cmを測る。腰部の遺存幅は1.0cmであるが、復原すれば釣針自体の幅は1.6cm前後となる。A-1区出土。4は結合式釣針の軸部である。テングニシの殻軸を素材として利用している。全体に良く研磨されるが、殻軸のねじれがそのまま反映している。軸の上端部には紐を緊縛するための溝が二条刻み込まれる。軸はやゝ湾曲しながら下端部へ続き、下端部には針部との結合のための溝一条が半周している。針部との接合部は破損しているが、わずかに接合面の平面が残っている。接合面は長1.4cm前後に復原できる。長6.9cm、幅0.7cm、厚0.6cmを測る。軸は先端部にむかってやゝ細くなっている。断面は円形で、殻軸をうまく利用している。また、軸そのものに自然にできた巻きがあるので強度は極めて強い。貝殻を素材とした結合釣針の出土は国内で初出である。形態は西北九州に広く分布する西北九州型結合釣針の軸部とは異なり、朝鮮半島南部に分布の中心をもつオサンニ型結合釣針の軸部と同じである。オサンニ型結合釣針の軸部は普通は頁岩製であるので、本例は材質転換した資料である。なお、本遺跡から約2.5km離れた本渡市大矢遺跡では頁岩製のオサンニ型結合釣針の軸部が出土している。本資料はオサンニ型結合釣針と西北九州型結合釣針の関係を解きあかすための貴重な資料である。5は結合釣針軸部の未製品である。4は同様にテングニシの殻軸を素材として利用している。殻部を打割し軸部を取り出したものである。殻軸は途中で切断され、切断部分は丁寧に研磨されている。研磨は軸に連なる貝殻部分にもおよんでいる。また、それより下方の打割部も部分的に研磨痕みられる。3の軸部よりわずかに短いが、現存状況から軸部未製品と考えることができる。長6.3cm、幅1.3cm、厚1.2cm、を有する。A-1区貝層4出土。6はイノシシの門歯の加工品である。歯の先端部分を削り込み研磨を加え平坦面を形成している。平坦面には研磨によって生じた条線(研磨痕)が明瞭に残っている。研磨は側面のエナメル質の部分にも一部およんでいるが、これ以外の痕跡はなく自然の形態のままである。また、基部の端が欠失していて、そこにおける加工の存否が不明のため判断できないが、もし、欠失部分に尖らせるような加工があれば、平坦部分を軸部との接合とした針部の製品と考えることができる。現在のところ類例はない。長4.9cm+α、幅0.9cm、厚0.6cmを測る。A-3区出土。7はイノシシの牙を素材としている。牙をタテに半截し、半截部分を研磨し板材をつくり出す。他面は牙のエナメル質を残している。針部製作の素材と考えられる資料である。長3.9cm、幅1.2cm、厚0.3cmを測る。A-2区貝層4出土。

(2) 離頭鉞 (Fig.53-1~4、6、7、15)

九州に分布する離頭鉞は形態的にヤスとの区別が困難であるが、尖頭部、茎槽部、尾部よりなり、かつて、田中良之氏によって西北九州型離頭鉞と仮称されたものである。尾部は逆刺の機能を有するためにやゝそりかえっている特徴がある。本貝塚から7点の出土がある。いずれも鹿の管状骨(中手・中足骨)を素材としている。Fig.53-1は調査時に半折し、一部欠損するが、ほぼ完形をたもっている。側面と尖頭部に丁寧な研磨が加えられている。尖頭部の研磨は特に丁寧で、全面に施されているが、製作痕は磨滅によって残っていない。断面形は円形をなす。先端から1.7cm前後の部分から幅約0.5cmの幅で特に磨滅する部分があり稜線部分にも凹む部分があり中柄との緊縛部分と考えられる。それより以下の側面には製作痕が細い条線として残っている。尾部はそりかえり逆刺の役目を果している。尾部先端も磨滅し、製作痕は明瞭でない。2は1よりやゝ長い。尾部が折れ、再加工を加えている。管状骨を半截し、半截部の側面に丁寧な加工を加えて整形している。尖頭部は全面からの研磨を加えるが前・後面は側面に比較し顕著ではない。尾部には製作痕が条線状に残っているが、他は磨滅して消えている。中柄との緊縛部分は上面の中位よりやゝ上に若干凹んだ部分があるので、その周辺と考えられる。3も管状骨を半截して整形されているのに上記二例と同様である。研磨は中位より上方の尖頭部にかけて顕著で、尾部は半截のまま、一部に研磨が加えられている。尖頭部の研磨は全面に施され、断面形は円形をなす。わずかに製作痕が残るが磨滅によって人部分が消え、光沢をもっている。頭部より約3cmの所より幅約1cmで側面に浅い挟りがみられる。この部分が中柄との緊縛部分と考えられる。4も上記同様の素材・製作法をとっている。全体に良く研磨されているが、特に頭部と尾部は丁寧である。尖頭部は全面から研磨され、断面形は円形に近い。尾部の約3cm幅も全面研磨である。特に左側面からの研磨が顕著で、尾部の先端部が片寄っている。また裏面からも研磨が加えられ、尾部にそりかえりをつくり出している。頭部より約1.7cmの所の左側面には幅約1.2cmの浅い挟りが認められ、それに対応する右側面に挟りが認められ、それを結ぶように磨滅がみられるので、この部分が中柄との緊縛部とみられる。6は尾部を欠する。全体に保存状態が悪く縦のヒビが無数にはいる。全体に良く研磨され、研磨痕が条線として残っている。尖頭部は断面円形をなす。茎槽部は比較的浅い。尾部は裏面でそりかえっているが折れているため全体像は不明。頭部より1.9cm下位の裏面には幅0.7cmで浅い挟りがみられ、この部分が中柄との緊縛部分とみられる。7は長さの短かい離頭鉞である。やゝ幅広で、茎槽部は浅い。前者とは形態的に異なる。尖頭部は側面と裏面から研磨が加えられている。尾部も同様に側面と裏面から研磨を加え、逆刺状に仕上げている。15は尾部を欠失している。全体に側面に研磨を加え整形している。先端部は全面から研磨が加えられている。断面円形をなすが尖らず磨滅のため丸く鈍くなっている。尾部は全面からの研磨であるが、詳細は不明。これらの計測値は第 Tab.6 表に示した。

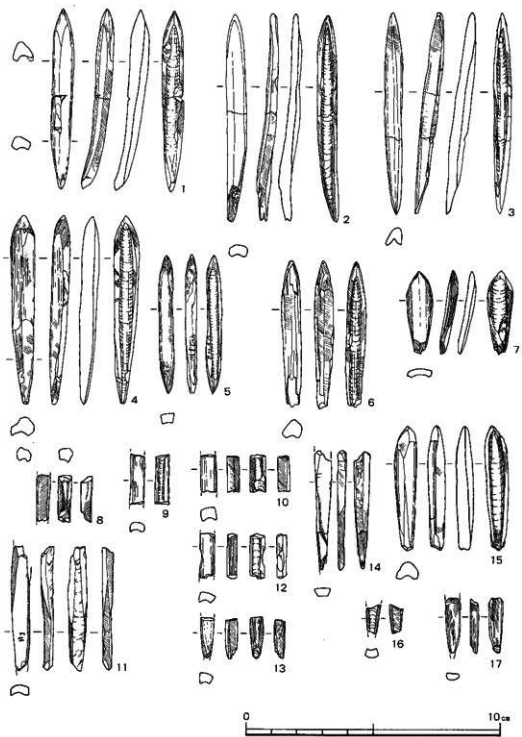


Fig. 53 離頭鋸・ヤス実測図

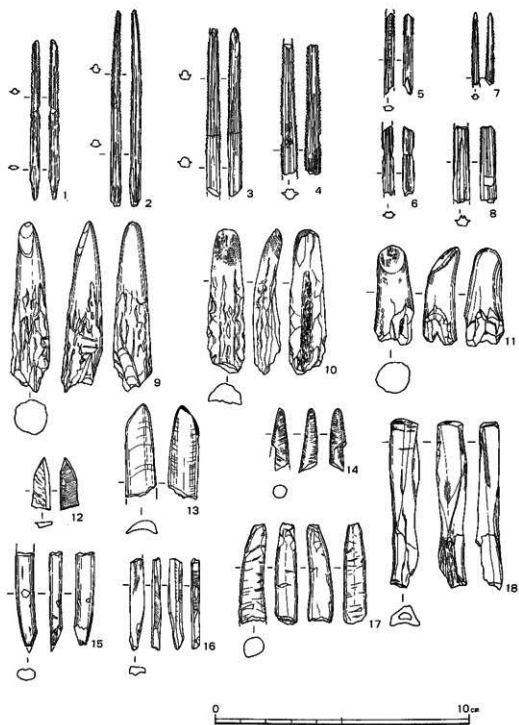


Fig.54 ヤス・その他の骨角器実測図

(3) ヤス (Fig.53-5、8~14、16、17、Fig.54-1~8)

鹿の管状骨を利用したもの (Fig.53-5、8~14、16、17) と、エイの尾刺骨を利用したもの (Fig.54-1~8) の二者がある。

5は鹿の管状骨を素材として利用したヤスの完形品である。側面部に研磨を加えて整形している。研磨は中央部では粗く、両端部は全面に丁寧な研磨を加えて尖らせている。研磨痕が条線として残っている。8~14、16、17はいずれも破片となっているが、ヤスと考えられる製品である。8は管状骨を利用している。両端部の大部分を失っている。全面共良く研磨されている。9も8と同様に管状骨が利用されているが、8に比較して薄い。10、12、13は同一個体と考えられる。同じA-2区貝層4より出土し、いずれも二次的に火を受け黒変している。10、12

Tab.6 骨製刺突具計測表

器種	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	材質	標記番号	発掘区	備考	
1	鹿頭刺	7.2	0.8	0.7	骨	Fig.53-1	貝層4	完形
2	鹿頭刺	8.2	0.7	0.4	骨	Fig.53-2	A-1東区貝層4	完形
3	鹿頭刺	6.9	0.75	0.6	骨	Fig.53-3	A-2区	完形
4	ヤス?	7.4	0.9	0.7	骨	Fig.53-4	A-2区貝層4	完形
5	ヤス	5.5	0.6	0.4	骨	Fig.53-5	A-1西区貝層4	完形
6	ヤス?	5.8+α	0.8	0.7	骨	Fig.53-6	A-2区貝層4、下部貝層	完形
7	鹿頭刺	3.3	1.0	0.2	骨	Fig.53-7		完形
8	ヤス	1.7+α	0.6	0.5	骨	Fig.53-8	A-2区貝層4	
9	ヤス	1.9+α	0.6	0.3	骨	Fig.53-9	A-2・3ベルト、カクラン	
10	ヤス	1.4+α	0.6	0.4	骨	Fig.53-10	A-2区貝層4	12・13と同一個体
11	ヤス	4.9+α	0.7	0.3	骨	Fig.53-11	A-2区貝層4	
12	ヤス	1.7+α	0.6	0.4	骨	Fig.53-12	A-2区貝層4	10、13と同一個体
13	ヤス	1.6+α	0.6	0.4	骨	Fig.53-13	A-2区貝層4	10、12と同一個体
14	ヤス	4.7	0.6	0.3	骨	Fig.53-14	A-2区貝層4	
15	ヤス	4.9	0.9	0.6	骨	Fig.53-15		完形
16	ヤス	1.2+α	0.5	0.3	骨	Fig.53-16	A-2区貝層4	
17	ヤス	2.1+α	0.6	0.3	骨	Fig.53-17	A-2区貝層4	
18	ヤス	6.3+α	0.6	0.2	エイ尾刺骨	Fig.54-1	B-1区下部貝層	完形
19	ヤス	7.8+α	0.6	0.4	エイ尾刺骨	Fig.54-2	A-2・3ベルト、カクラン	完形
20	ヤス	5.6+α	0.7	0.4	エイ尾刺骨	Fig.54-3	A-2区貝層4	
21	ヤス	5.1+α	0.9	0.4	エイ尾刺骨	Fig.54-4	A-2区貝層4	
22	ヤス	3.2+α	0.5	0.2	エイ尾刺骨	Fig.54-5	A-3区	
23	ヤス	2.7+α	0.6	0.3	エイ尾刺骨	Fig.54-6	A-3区	
24	ヤス	2.8+α	0.4	0.3	エイ尾刺骨	Fig.54-7		
25	ヤス	3.1+α	1.9	0.1	エイ尾刺骨	Fig.54-8	A-3区	

は胴部、13は基部の小破片である。全面共良く研磨されている。他と同様管状骨を利用してゐる。11、14は管状骨を半載し、側面を研磨した胴部から基部にかけてのヤスの破片である。11は基部、先端も失う。胴中央部半載のままで研磨は加えられていない。側面の研磨面には斜位の条線が残っている。また、表面には横方向のやゝ粗い傷が4ヶ所に残っている。14は11に比べてやゝ細身である。基部は三面から研磨が加えられ、研磨痕が明瞭に残っている。胴中央位は特別の加工はない。16、17もヤスの基部と考えられる小破片である。16は二次的に火を受け黒色に変色している。三面から研磨が加えられている。17は四面から研磨が加えられ、研磨痕が条線として残っている。

Fig. 54-1~8はエイの尾刺骨を利用したヤスと考えられる遺物である。加工せず、そのままの状態で使用可能であるので、ここでは加工のないものもヤスに含めた。いずれも一部を欠失し、完形品はない。1、2は細身、3、4、6、7はやゝ太身である。1は基部を加工し基部をつくり出している。先端部を欠く。2は基部に加工はみられない。先端部を欠く。3~8は共に基部と先端部を欠いている。この他、図示しなかった尾刺骨数点がある。ヤスの計測値はTab. 6に示した。

(4) ヘラ・その他 (Fig. 54-9~18)

ヘラ・その他の骨角器を一括して説明する。9~11は鹿角製品。9は鹿角の先端部を利用している。先端部の一面に剥離が加えられ、その反対の面には一部研磨痕が認められる。また、先端部は使用による磨滅が認められる。基部は折断されているが、すぐ上位に直交する三条の切断するためのキズがついている。長6.7cm、径1.3cm、A-1・2区間ベルト出土。10は9と同様に鹿角の先端部を利用しているが、現状では半載されている。先端部はヘラ状に研磨が加えられる。半断面の先端部にも一部研磨面がつくり出されている。半断面と逆の面には縦に使用痕と考えられる条線が顕著に認められる。全体は磨滅し光沢がある。基部は折断されていて、特別の加工はない。長5.7cm、幅1.0cm~1.5cm、厚0.7~1.0cm、A-1区西側貝層出土。11は先端部のみが残存する。短かい割に湾曲していることからすれば枝角を利用したものと考えられる。先端部が斜に研磨されている。研磨面の中央部には髓の一部がみえる。全体に良く研磨され光沢をもっている。製作痕はあまり明瞭でない。基部は折断されているが、まだ伸びるものと考えられる。長4.0cm、径1.0~1.5cm、A-1区東側貝層6より出土。12は骨を利用したものであるが器種等不明。面とりを行ない丁寧な研磨を加えている。細かい条線が斜についている。長2.1cm、幅0.8cm、厚0.3cm、A-3区出土。13は管骨を半載して、全体に研磨を加えヘラ状の骨器に仕上げている。先端は片寄って尖るが、丸みもち、刺突具としては不適。製作痕は不明瞭であるが、周縁部は摩滅し、光沢をもっている。半折し、全形は不明。長3.7+αcm、幅1.2cm、

厚0.5cm。A-3・B-2区間出土。14は鹿角先端部か。二次的に火を受け黒変している。先端はやゝ丸みをもつ。軸に直交する擦過痕が著しい。骨角器の製作痕であるか、鹿の角みがきによる痕跡か区別できない。長2.5cm、径0.7cm、A-3区出土。15は鹿角を素材にしている。全体に良く研磨されている。下端は尖るように側面から研磨が加えられる。先端はやゝ片寄っている。筭の端部か。長 $3.7+\alpha$ cm、幅0.7cm、厚0.5cm、A-3区出土。16は管骨を利用。半折し全形は不明。側面に研磨を加える。長 $3.7+\alpha$ cm、幅0.5cm、厚0.3cm。A-3区出土。17は海獣骨を利用している。柱状に整形している。長軸に直交し、多数の条線状のキズがみられる。長 $4.9+\alpha$ cm、径0.8cm。A-3区出土。18は管状骨の両端を切断し、切断面を研磨している。切断面近くには一〜二条の傷がついている。一部下端部を欠失する。長6.6cm、幅1.2cm、厚1.0cm、A-2区貝層出土。

(5) 貝刃 (Fig.55)

二枚貝の殻縁部に加工を施し、刃部をつくり出した貝刃4点がある。九州では出土例が少なく、大分県粉洞穴等、数ヶ所の遺跡で知られているにすぎない。この種の貝刃がもともと九州での使用が少ないのか、どうかは今後の問題として残るが、発掘時にあまり注意が払われていないことも大きな原因であろう。他遺跡では貝刃に利用される貝は、ハマグリが多いが、本遺跡出土例では、ハマグリ他にオキシジミガイ、シオフキガイが利用されている。

1、2は共にオキシジミガイを素材として利用している。1は貝殻の中央よりやや殻頂に寄った所に、内側より打撃を加え、径0.8cmの孔をあけている。腹縁中央部には幅3.5cmの範囲で刃部がつくり出される。殻高4.2cm、殻長3.9cm。2は貝殻の中央部よりやや腹縁に片寄って、1同様に内側より打撃を加え、孔をあけている。孔は1.5cm×1.0cmの不整長方形をなす。腹縁部に形成される刃部は1ほど顕著でなく、3ヶ所に二次加工が認められる。殻高4.2cm、殻長3.8cmを測る。1、2はほぼ同大で、共に左殻である。A-2区の出土である。3はシオフキガイの左殻を利用した貝刃である。殻頂部近くに内側から打撃を加え、孔があげられている。孔は径1.0cm前後の不整形をしている。刃部の形成は腹縁部の左右2ヶ所に片寄っている。殻高4.0cm、殻長4.4cmを測る。A-3区出土。4はハマグリ右殻を利用している。腹縁部の全域にわたって内側から加工され、刃部を形成している。殻高5.1cm、殻長6.0cmを測る。A-2区の出土。

4点と数が少ないが、今後注意する必要がある貝器である。ハマグリを除いた3点には穿孔が見られる。紐通しの孔とも考えられるが、紐ずれ等は観察できない。通常みられるハマグリ製貝刃と異なる貝種にみられることは、別の使用目的があったと考えられる。

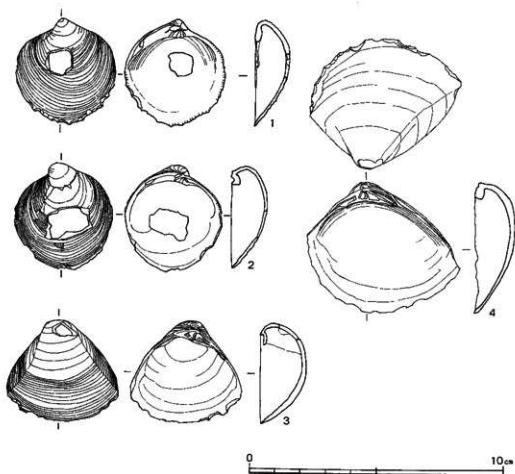


Fig. 55 貝刃実測図

(6) 貝錘 (Fig. 56・57)

貝錘はハイガイ、サルボウガイの殻頂部に孔をあけたものを一括した。孔はいずれも、打欠きによるもので、後述する貝製裝飾品の研磨による穿孔とは区別される。貝の大きさや重量には集中することなく幅がある。殻高1.8cm、殻長2.1cm、重1gを最小として、殻高4.2cm、殻長5.4cm、重22gを最大とする。図示した13点が完形で、他に数点の破損品がある。同様の貝錘は福岡市西区桑原飛梯貝塚や元岡瓜尾貝塚に類例があり、今後、貝塚の調査では注意を要する。

各貝錘の計測値は Tab. 7 に示した。

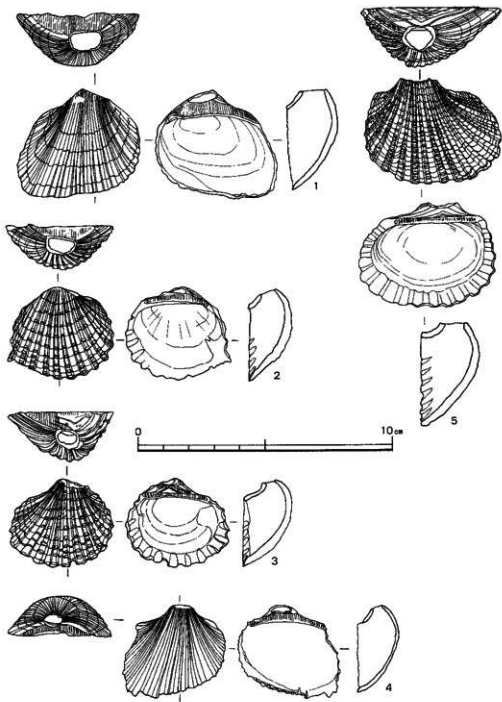


Fig. 56 貝類実測図 I

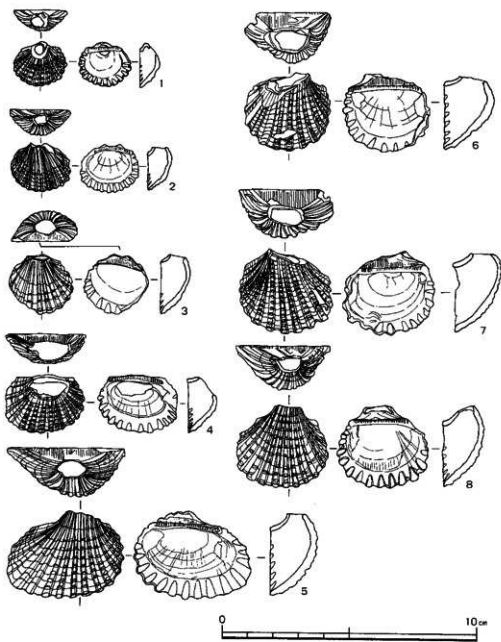


Fig. 57 貝類実測図Ⅱ

Tab.7 貝簀計測表

	発掘区	押図No.	貝種	殻高 (cm)	殻長 (cm)	重量 (g)	備考
1	A-1 東1区貝層6	Fig.56-1	ハイガイ	1.8	2.1	1.0	
2	A-2 区貝層4	Fig.56-2	ハイガイ	2.0	2.4	2.0	
3	A-2 区貝層4	Fig.56-3	ハイガイ	2.3	2.5	2.0	
4	A-3 区貝層1	Fig.56-4	ハイガイ	2.3	3.1	3.0	
5	A-3 区貝層1	Fig.56-5	ハイガイ	3.4	4.7	10.0	
6	A-3 区貝層1	Fig.56-6	ハイガイ	3.1	3.4	8.0	
7	A-3 区貝層1	Fig.56-7	ハイガイ	3.4	3.7	9.0	
8	A-?	Fig.56-8	ハイガイ	3.3	3.6	6.0	
9	A-1 区西側貝層	Fig.57-1	サルボウ	4.2	4.7	14.0	
10	A-2・3 ベルト、カクラン	Fig.57-2	ハイガイ	3.6	4.2	11.0	
11	A-3 区間層下貝層7	Fig.57-3	ハイガイ	3.5	4.3	11.0	
12	A-1、2 ベルト◎	Fig.57-4	サルボウ	3.7	4.0	7.0	
13	A-1、B-1 ベルト◎	Fig.57-5	ハイガイ	4.2	5.4	22.0	

(7) 筭 (Fig.58、59)

10点を図示した。完形品はFig.58-2の一点のみで、他はいずれも破片であるが、Fig.58-1、Fig.59-1はほぼ全形を知ることができる。装飾性に富んだ優品と装飾性に乏しい粗品の二種類がある。以下、各資料について詳述する。

Fig.58-1は鹿角を素材とした筭である。先端の一部を欠失するが、ほぼ全形を知ることができる。頭部はやゝ扁平であるが、他は厚さを増し断面は楕円形をなす。頭部の約6.0cmの間に10条の刻線を一周させている。条線は1.5~4.0mmで、下から三番目が最も大きく、文様帯を区画しているようにも見える。刻線間の幅もまちまちなので、0.2~0.7cmを測る。刻線間には部分的に短直線の刻みを入れ文様効果を上げている。文様は全体に紐あるいは帯を巻いた状態を表現したものと考えられる。全体に良く研磨され、製作痕も消されている。全体に光沢もっている。全長20cm前後になる優品である。現存長17.1cm、幅0.9cm、厚0.6cmを測る。A-2区貝層4出土である。2は端部を一部欠くが、ほぼ完形である。管骨を素材として利用している。両端部を尖らせ、全体はわずかに湾曲している。側面の割れ口に研磨を加えただけの簡略な筭である。長11.0+ α 、幅0.7m、厚0.4cm、断面形は三角形をなす。1に比較し、粗製品である。日常的にはこのような粗製品が使用され、1の着装には一定の意味があったと考えられる。B-1区下部貝層出土。3、4は筭の体部破片と考えられる。共に良く研磨され、製作痕も消されている。全体に光沢をもち、優品であったと推測される。3は断面円形、4は楕円形である。

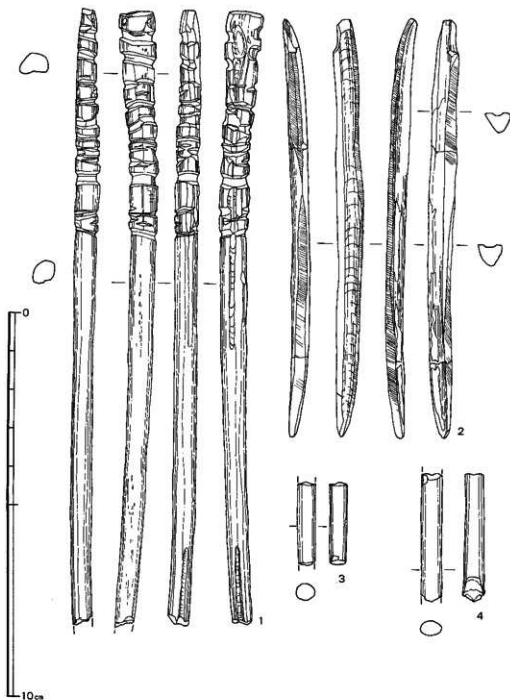


Fig. 58 骨実測圖 I

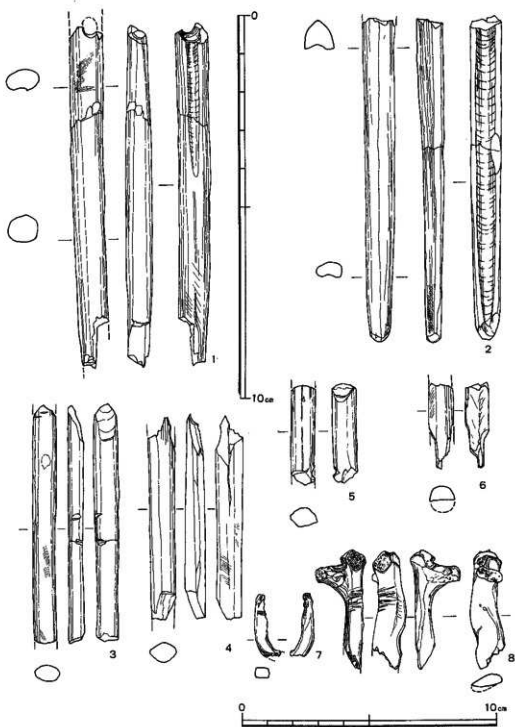


Fig.59 笄类图Ⅱ

3は現在長2.1cm、径0.5cmを測る。A-2区出土。4は現存長3.3cm、幅0.6cm、厚0.4cmを測る。A-3区出土。

Fig.59-1は頭部の一部と下半部を欠失しているが、全形は推測することができる。鹿の四肢骨を素材としている。頭部には片側から穿孔された孔があるが、その部分で折れている。孔径0.3cm。片面には孔の下に骨の凹みが溝状に残っている。頭部はやゝ薄く、下方に向かって丸味を増す。全体に良く研磨され、製作痕を消している。全体に光沢がある。頭部の装飾は孔のみと考えられるが、製作等から優品と考えられる。現存長9.0cm、幅0.8cm、厚0.5~0.7cmを測る。全長は20cm前後になるうか。A-2区貝層4出土。2は下半部の破片である。骨製で先端に向けて細くなりながら端部は丸くおさめている。側面の割れ口のみを研磨し、他の部分はそのまま利用する。Fig.58-2と同様の粗製品と考えられる。先端部は薄くなり扁平であり、中央部は断面三角形をなす。現存長9.5cm、幅0.6~0.8cm、厚0.4cm~0.7cmを測る。B-1区貝層1出土。3~6は体部破片である。3は現存長6.3cm、幅0.6cm、厚0.4cm、断面は楕円形をなす。鹿角製で全体に良く研磨される。製作痕も消し、光沢がある。優品に分類できる。A-2・3区間ベルトの攪乱層より出土。4は現存長5.3cm、幅0.7cm、厚0.5cm、断面は菱形に近い楕円形。骨製で、全体に研磨されるが、研磨は丁寧でない。粗製品に分類される。A-1区出土である。5は現存長2.6cm、幅0.7cm、厚0.5cmを測り、断面は菱形に近い楕円形をなす。骨製で全体に研磨されるが、一部、研磨されない部分もあり粗製品に分類される。A-2区貝層4出土である。6は現存長2.2cm、幅0.7cm、厚0.4(0.7)cmを測り、断面は円形をなすが、半載し、半円状をしている。骨製で全体に研磨される。A-2区貝層4出土。

(8) 耳飾り (Fig.60-1~12)

耳飾りと考えられる遺物には角製と骨製の二種類がある。角製は鹿角製で骨製はサメ背椎骨を利用したものである。ただし、背椎骨利用のものは玉との区別が困難であるため一括して説明する。

Fig.60-1は鹿角を輪切りにした素材を利用する。側面を深くえぐりを入れ滑車形に整形し、髄の部分に穿孔している。2~12はいずれもサメの背椎骨を利用したものである。2は外側面に研磨を加えている。3、4は共に横に半載している。また、側面に研磨を加えている。5以下は小型でいずれも玉に使用されたと考えられるものである。側面に研磨を加え、滑車形に整形したものもある。5は平面形が六角形をなす。計測値はTab.8に示す。

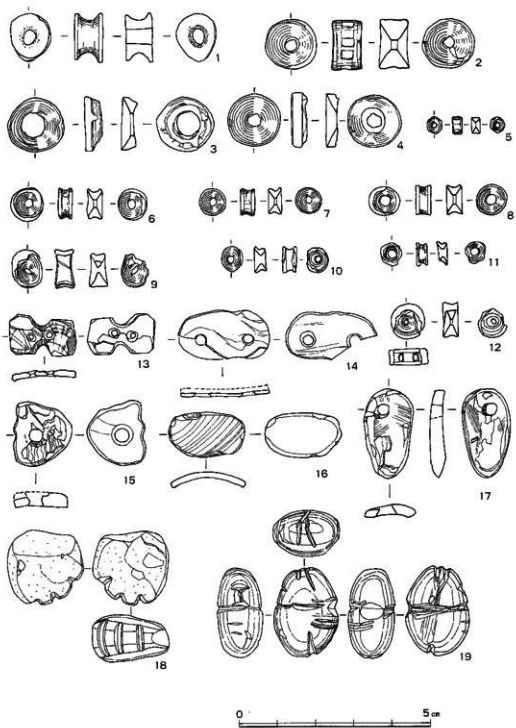


Fig. 60 骨・貝・石製装身具実測図

Tab.8 骨製耳飾(骨製玉)計測表

	発掘区	押込No.	径 (cm)	高 (cm)	孔径 (cm)	材質	備考
1	A-3区	Fig.60-1	1.0×0.8	0.7	0.4×0.3	鹿角	耳飾
2	A-3区	Fig.60-2	1.9×1.3	0.7	0.3×0.3	サメ背椎骨	耳飾
3	A-2区貝層4	Fig.60-3	1.5×1.4	0.4	0.6×0.6	サメ背椎骨	耳飾
4	A-3区	Fig.60-4	1.4×1.4	0.4	0.4×0.3	サメ背椎骨	耳飾
5	A-1・2ベルト	Fig.60-5	0.4×0.4	0.3	0.2×0.1	サメ背椎骨	玉
6	A-3区	Fig.60-6	0.8×0.9	0.4	0.2×0.2	サメ背椎骨	玉
7	A-2貝層4	Fig.60-7	0.7×0.7	0.3	0.2×0.2	サメ背椎骨	玉
8	B-1区	Fig.60-8	0.8×0.8	0.4	0.3×0.3	サメ背椎骨	玉
9	A-1・2ベルト	Fig.60-9	0.8+α×0.9+α	0.5	0.2×0.1	サメ背椎骨	玉
10	A-1・2ベルト	Fig.60-10	0.5+α×0.7	0.4	0.2×0.2	サメ背椎骨	玉
11	A-2区貝層4	Fig.60-11	0.6×0.6	0.3	0.2×0.2	サメ背椎骨	玉
12	A-1区西側貝層	Fig.60-12	0.7・α×0.6+α	0.3	0.15×0.1	サメ背椎骨	玉

(9) 貝製装飾品 (Fig.60-13~17)

貝殻を利用した装飾品と考えられるもので5点がある。いずれも1~2孔を穿っている。

Fig.60-13は、ウミキクガイあるいはチリボタンを利用した貝製品である。表面には貝の赤色があざやかに残っている。全体を長方形に整形し、長辺の中央の上下に挟りを入れ全体に蝶形にし、挟りの両側に孔を穿っている。孔は両面からの穿孔で、孔径1.0mm、長1.1cm、幅1.7cm、厚0.1cm。A-2区貝層4出土。14はアワビガイを素材としている。表面は外表が剥離しているが、内側には真珠光沢が残っている。全体を2.4cm×1.2cmの楕円形に整形し、長軸の両端に穿孔している。穿孔は内側からの片方のみからで、孔径0.25cm。A-3区出土。15もアワビを素材としている。一部残存する外表は薄く赤色が残り、内面は真珠光沢を残している。全体を1.5cm×1.7cmの略隅丸三角形に整形し、中央に一孔を穿っている。孔は両面からあけられ、孔径3.5mmを測る。また、一辺に挟り2ヶ所を入れ波状にしている。A-2・3区間の攪乱層より出土。16は二枚の貝殻(種不明)を2.0cm×1.1cmの長楕円形に整形したものである。A-3区貝層7出土。17はやゝ厚い貝殻を2.3cm×1.3cmの長楕円に整形し、研磨を加えている。片側に寄って孔があくが、これは自然にいたものを利用している。A-3区貝層出土。

(10) 石製品 (Fig.60-18、19)

小型の石製品 2点がある。図面の都合上、ここで説明を加える。

Fig. 60-18は軽石製品である。2.0cm×2.0cm×1.2cmの扁平な不整形の一边に3ヶ所の刻目を入れた製品である。同様の軽石製品は南の鹿児島県を中心に分布する遺物で、本例は最も北に分布する例である。19は火山岩質の小円礫(1.7cm×2.4cm×1.2cm)に線刻を施したものである。線刻は長軸に対し、胴中央を区切るような大きな刻みがあり、これが腰のくびれの表現とみれば、下方の太い線刻は足を現していると考えられ、上方の二本の刻みは頭部を現したものと理解できる。全体として、南九州に分布する岩偶との類似点があげられる。18と共に南九州との関係の深い遺物である。18はA-1・B-1区間ベルト出土。19は、A-2、3区間ベルト出土である。

(11) 貝製玉 (Fig. 61・62)

貝製玉類には、アマオブネ、ヒロクチカノコガイの殻頂部を研磨し穿孔したものの、マガキガイの上半部を切り取り、殻頂部に穿孔したものの、マクラガイの殻軸を抜き取り玉としたもの、カノコアサリの殻頂部を研磨し、穿孔したものなど、多種多様である。主なものについて説明を加える。

Fig. 61-1、2はアマオブネ製の貝玉である。1は保存状態が悪く、細部加工は不明。2は、全面を研磨している。薄くカノコ文様が残っている。3～13はヒロクチカノコガイ製の玉である。殻頂部以外に研磨は加えられていない。14はマガキガイ製の玉。15はマクラガイ製の玉。表面に薄く文様が残っている。

Fig. 62-1～8はカノコアサリを利用した貝玉。殻頂部を研磨する以外、特別の加工は加えられていない。

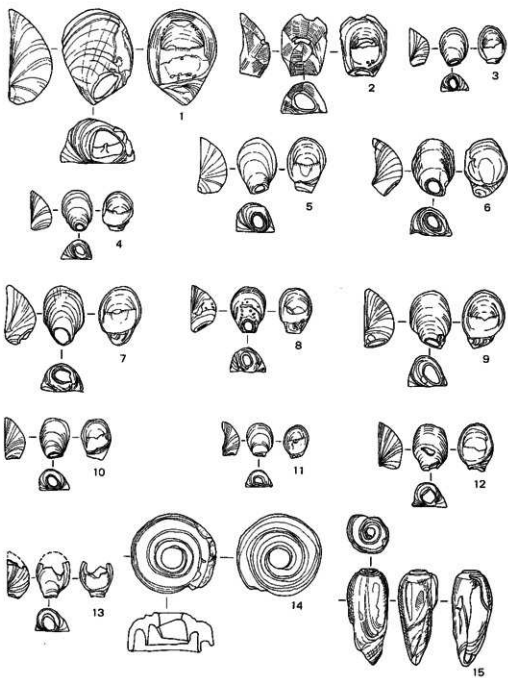
各玉類の計測値は Tab. 9 に示した。

(12) 歯牙製玉 (Fig. 62-10～12)

鹿の上顎門歯でつくられた玉 3点がある。いずれも歯根部に横から穿孔している。穿孔は両面から行われている。同一個体の歯が利用されていると考えられ、右側 I₁、左側の I₁ が使用されている。A-2区貝層 4出土。

(13) 石製玉 (Fig. 62-9)

緑色的小円礫を素材とした玉未製品 1点がある。石材は緑色の石に石英脈が重層的にはいつて



0 5cm

Fig. 61 貝製裝身具実測図

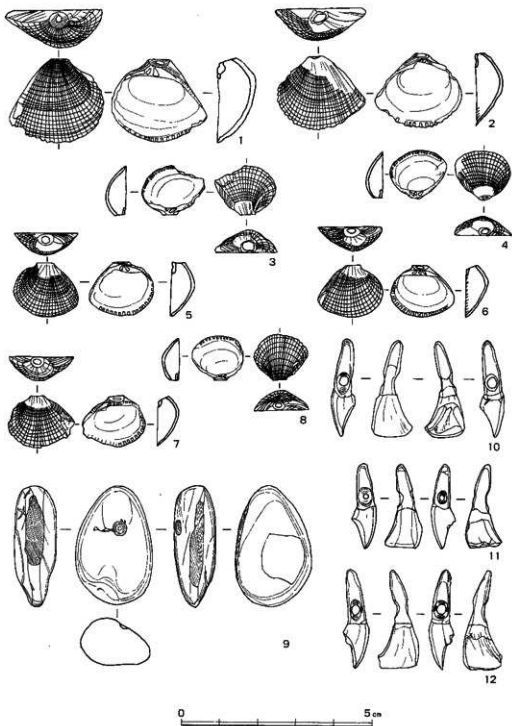


Fig. 62 貝・齒牙・石製裝身具実測図

いて美しい。側面1ヶ所に研磨痕が残っている。また、片面のやや上方中央部に穿孔途中の浅い凹みがある。長径3.2cm、短径2.0cmの下太りの楕円形をなし、厚さ1.1cmを測る。A-1区東側貝層4出土。

Tab.9 貝製玉計測表

	発掘区	押図No	材質	殻高(cm)	殻長(cm)	厚 (cm)	備考
1	B-1区下部貝層	Fig.61-1	アマオブネガイ	2.4	1.4	1.15	
2	A-2区貝層4	Fig.61-2	アマオブネガイ	1.6	1.2	0.85	全面研磨
3	A-1・2ベルト、カクラン	Fig.61-3	ヒロクチカノコガイ	1.0	0.8	0.5	
4	A-2・3ベルト、カクラン	Fig.61-4	ヒロクチカノコガイ	1.0	0.8	0.5	
5	A-2区貝層4	Fig.61-5	ヒロクチカノコガイ	1.5	1.1	0.75	
6	A-2区貝層4	Fig.61-6	ヒロクチカノコガイ	1.5	1.1	0.8	
7	A-2区貝層4	Fig.61-7	ヒロクチカノコガイ	1.6	1.1	0.7	
8	A-3区	Fig.61-8	ヒロクチカノコガイ	1.2	1.0	0.6	
9	A-1・B-1ベルト	Fig.61-9	ヒロクチカノコガイ	1.5	1.6	0.8	
10	A-2貝層4	Fig.61-10	ヒロクチカノコガイ	1.1	0.8	0.55	
11	A-2・3ベルト、カクラン	Fig.61-11	ヒロクチカノコガイ	0.9	0.7	0.5	
12	A-2・3ベルト、カクラン	Fig.61-12	ヒロクチカノコガイ	1.2	1.0	0.6	
13	A-3区	Fig.61-13	ヒロクチカノコガイ	0.9+α	0.9	0.6	
14	A-2区貝層4	Fig.61-14	マガキガイ	1.0	2.0×2.2	1.0	
15	A-3区貝層7	Fig.61-15	マクラガイ	2.5	1.6×1.1	1.0	
16	A-1区西側貝層4	Fig.62-1	カノコアサリ	1.2	2.5	1.0	
17	A-1区	Fig.62-2	カノコアサリ	1.9	2.3	0.8	
18	A-1区	Fig.62-3	カノコアサリ	1.2	1.6	0.6	
19	A-1東側区貝層7	Fig.62-4	カノコアサリ	1.3	1.5	0.5	
20	B-1区貝層2	Fig.62-5	カノコアサリ	1.4	1.7	0.6	
21	A-2区貝層4	Fig.62-6	カノコアサリ	1.3	1.7	0.6	
22	A-2区貝層4	Fig.62-7	カノコアサリ	1.3	1.7	0.65	
23	A-2区貝層4	Fig.62-8	カノコアサリ	1.2	1.4	0.5	
24	A-2区貝層4	Fig.62-9	シカ門歯	1.5	1.1	0.7	
25	A-2区貝層4	Fig.62-10	シカ門歯	1.2	1.0	0.7	
26	A-2区貝層4	Fig.62-11	シカ門歯	1.5	1.1	0.7	

14 貝輪 (Fig.63~66)

計38点の貝輪および未製品(失敗品)が出土している。貝輪の素材として利用されている貝種はウミギク、オオツタノハ、アカガイ、サルボウ、タマキガイ、ペンケイガイ等である。南方産貝類であるオオツタノハ1点、種不明の巻貝製貝輪(?)1点が含まれていることは注目

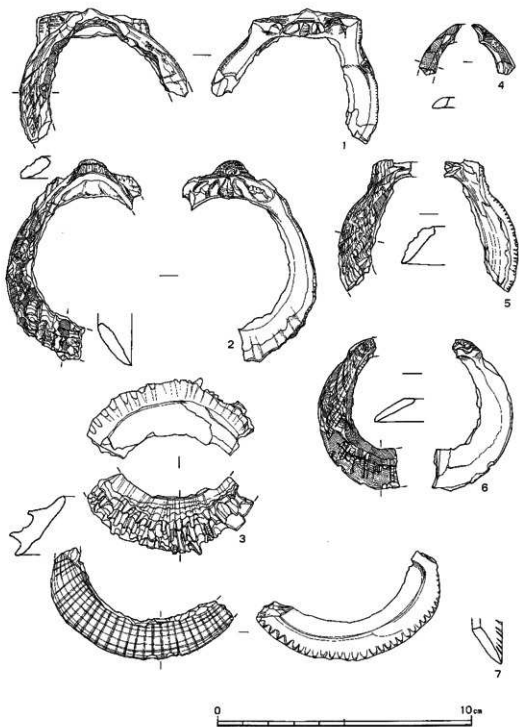


Fig. 63 貝輪實測圖 I

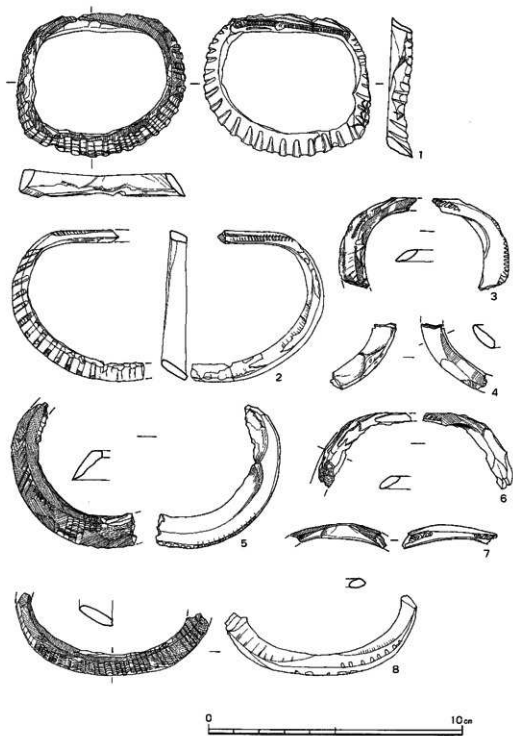


Fig. 64 貝輪実測図Ⅱ

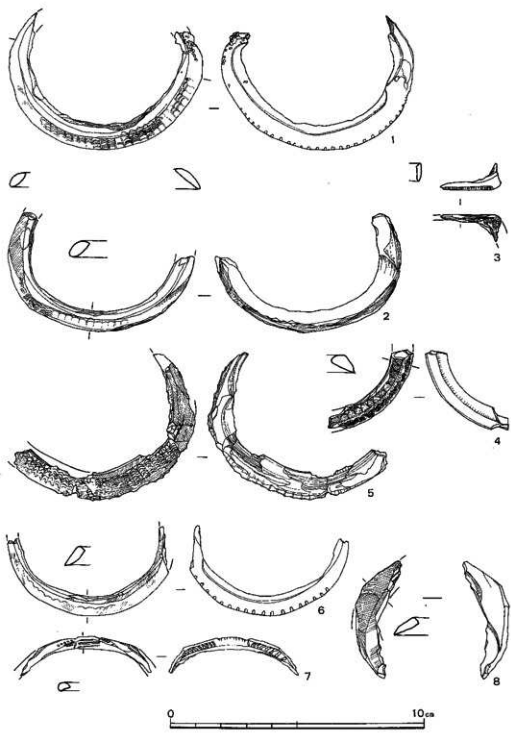


Fig. 65 貝輪實測圖Ⅲ

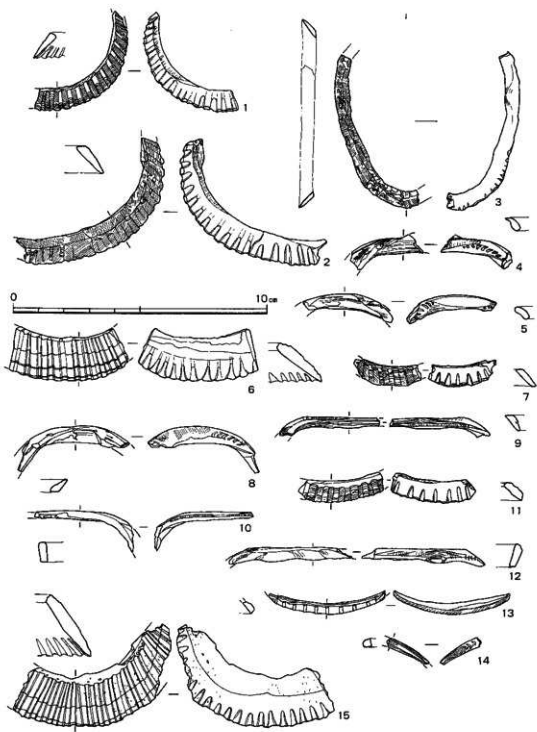


Fig. 66 貝輪実測圖IV

される。また、少なからずウミギク製貝輪が含まれていることである。貝殻には赤い色素が残っている。未製品（失敗品）が多いことは、この地で貝輪生産がおこなわれたことを証明している。貝輪の製作工程は以下になると考えられる。

第1工程、貝種の選定、第2工程、粗割で貝に孔をあける。第3工程、孔に細部加工を加え、原形の仕上げ、第4工程、研磨、この段階において破損するものが多い。粗割段階のひび割れが原因。第5工程、完成。

このような貝輪製作工程は、他の遺跡でもにかよった状況である。以下、貝輪の計測値はTab.10に示した。

Tab.10 貝輪（未製品）計測表

	発掘区	挿図No	見 種	工程	殻高 (cm)	殻長 (cm)	高 (cm)	備 考
1	A-2区	Fig.63-1	ウミギク	未製品	5.3+α	6.6+α	0.9	一部研磨
2	A-2区貝層4	Fig.63-2	ウミギク	未製品	8.0+α		1.3	一部研磨
3	B-1区下部貝層	Fig.63-3	ウミギク	未製品			2.3	粗割
4	A-2・3区ベルト、カクラン	Fig.63-4	タマキガイ科	完成品			0.4	
5	A-1区西側貝層	Fig.63-5	ウミギク	未製品			1.5	一部研磨
6	A-2区貝層4	Fig.63-6	ウミギク	未製品	6.0+α		0.9	一部研磨
7	A-3区	Fig.63-7	タマキガイ科	未製品			1.2	粗割
8	A-2区貝層4	Fig.64-1	サルボウ	未製品	5.6	6.6	0.9	完形、一部研磨
9	A-3区	Fig.64-2	サルボウ	完成品	6.0		1.0	二次的に火を受ける
10	A-1セB-1ベルト	Fig.64-3	タマキガイ科	完成品			1.2	
11	A-2区	Fig.64-4	タマキガイ科	未製品			0.4	一部研磨
12	A-2区	Fig.64-5	タマキガイ科	完成品			0.9	
13	A-3区	Fig.64-6	タマキガイ科	完成品			0.5	保存状態不良
14	A-2区貝層4	Fig.64-7	タマキガイ科	完成品			0.3	
15	A-2・3区ベルト、カクラン	Fig.64-8	アカガイ	完成品			0.8	手づれ
16	A-1・2区ベルト	Fig.65-1	タマキガイ科	完成品		7.6	0.8	手づれ
17	A-1・2区ベルト	Fig.65-2	タマキガイ科	完成品		7.4	0.7	
18	B-1区貝層2	Fig.65-3	タマキガイ科	完成品				
19	表様	Fig.65-4	タマキガイ科	完成品			0.7	
20	A-2区貝層4	Fig.65-5	タマキガイ科	完成品			0.3	保存状態不良
21	A-2区貝層4	Fig.65-6	フネガイ科	未製品			0.7	一部研磨
22	A-2区貝層4	Fig.65-7	タマキガイ科	完成品			0.7	手づれ
23	A-1西側貝層7	Fig.65-8	タマキガイ科	完成品			0.7	二次的に火を受ける
24	A-2・3区ベルト	Fig.66-1	アカガイ	未製品			1.0	一部研磨

	発掘区	押図No	見 様	工 程	投高 (cm)	投長 (cm)	高 (cm)	備 考
25	A-3区	Fig.66-2	アカガイ	未製品			1.1	全面研磨
26	A-2区貝層4	Fig.66-3	オオツツノハ	完成品			0.5	
27		Fig.66-4	タマキガイ科	未製品				粗割り
28	A-3区	Fig.66-5	タマキガイ科	完成品			0.5	
29	A-1東1/2区貝層6	Fig.66-6	アカガイ	未製品			1.5	粗割り
30	A-1東1/2区貝層4	Fig.66-7	フネガイ科	完成品			0.7	
31	A-3区	Fig.66-8	タマキガイ科	完成品			0.5	
32	A-3区	Fig.66-9	フネガイ科	完成品			0.6	
33	A-1東1/2区貝層7	Fig.66-10	フネガイ科	完成品			0.8	手づれ
34	A-1区西側貝層	Fig.66-11	フネガイ科	未製品			0.7	一部研磨
35	A-1・2区ベルト	Fig.66-12	フネガイ科	完成品			0.9	手づれ
36	B-1区貝層2	Fig.66-13	巻貝?	完成品				
37	A-1区東1/2区貝層16	Fig.66-14	タマキガイ科	完成品			0.3	保存不良
38	A-2区貝層4	Fig.66-15	アカガイ	未製品			2.4	粗割

(5) 切痕ある骨 (Fig.59-7・8)

出土獣骨には解体の時ついたと考えられる切痕をもつものが少なからずある。2例を示しておく。7は小動物の骨で、直交して二条の切痕、8は同様に小動物の骨で、間接部下に骨に直交する切痕が無数に残っている。自然遺物についてはについては、現在、整理中であり今後を期す。

4. 網 (炭化物)

PL.50下に示した網の炭化した遺物が出土した。B-1区、下部貝層からの出土である。細い撚りをかけた紐を結び網としている。詳細については現在、検討中であり、今後を期したい。

第6章 自然遺物

本貝塚は第4章、発掘調査の記録でのべたように、包含層(貝層)をすべて取り上げ、1mmメッシュによって水洗いしたため自然遺物は莫大な量にのぼる。貝類をはじめとして、獣骨、魚骨、植物遺存体等があり、種類も多い。選別、種の同定、分析、考察等にはさらに時間を要するので、本章では、種の同定ができたもの限り、その種名を提示し、詳細については後日を期したい。

1. 貝類

腹足綱 GASTROPODA

1. アワビの一種 *Nordotis* sp 潮間帯下~20m岩礁
2. マツバガイ *Cellana nigrolineata* (REEVE) 潮間帯岩礁
3. コシダカガンガラ *Omphalius rusticus* (GMELIN) 潮間帯岩礁底
4. クボガイ *Chlorostoma argyrostoma lischkei* (TAPPARONE-CANEFRI) 潮間帯岩礁底
5. ヘソアキクボガイ *Chlorostoma argyrostoma turbinatum* (A. ADAMS) 潮間帯岩礁底
6. クマノコガイ *Chlorostoma xanthostigma* (A. ADAMS) 潮間帯岩礁底
7. イシダタミガイ *Monodonta labio* (LINNE) 潮間帯岩礁底
8. イボキサゴ *Umbonium* (*Suchium*) *moniliferum* (LAMARCK) 潮間帯岩礁底
9. サザエ *Batillus cornutus* (LIGHTFOOT) 潮間帯岩礁
10. スガイ *Lunella coronata* (GMELIN) 潮間帯岩礁底
11. アマオブネガイ *Theliostyla albicilla* (LINNE) 潮間帯岩礁底
12. ヒロクチカノコガイ *Dostia violacea* (GMELIN) 汽水
13. ヤマトニシ *Cyclophorus herklotsi* V. MARTENS 山林、小石・落葉間
14. ヘナタリ *Cerithideopsis cingulata* (GMELIN) 潮間帯砂泥底
15. フトヘナタリ *Cerithidea rhizophoram* A. ADAMS 湾奥潮間帯泥底、小石
16. イボウミナ *Batillaria zonalis* (BRUGUIÈRE) 潮間帯砂泥底
17. ウミナ *Batillaria multiformis* (LISCHKE) 潮間帯砂、小石
18. ケクスズメガイ *Amathea conica* SCHUMACHER サザエ、アワビ等の殻上
19. マガキガイ *Conomurex luhnanus* (LINNE) 潮間帯~20mの砂、小石底
20. ツメタガイ *Neverita* (*Glossaulax*) *didyma* (RODING) 潮間帯下の細砂底
21. タカラガイ科の一種 *Cypraeidae* sp.

22. オニサザエ *Chicoreus asianus* KURODA 潮間帯付近岩礁
23. アカニシ *Rapana thomasiana* CROSSE 内海潮間帯~20m 砂泥底
24. レイシガイ *Thais bronni* (DUNKER) 潮間帯岩礁底
25. イボニシ *Thais clavigera* (KÖSTER) 潮間帯岩礁底
26. バイ *Babylonia japonica* (REEVE) 潮間帯~20m 砂底
27. ミクリガイ *Siphonalia cassiariaeformis* (REEVE) 潮間帯~50m 砂底
28. コナガニシ *Fusinus perplexus ferrugineus* (KURODA et HABE) 潮間帯砂泥底
29. ナガニシ *Fusinus perplexus* (A. ADAMS) 潮間帯下砂泥底
30. テングニシ *Hemifusus tcrnatonus* (GMELIN) -10~50m 砂底
31. キセルガイ科の一種 *Clausiliidae* sp.
32. オカチョウジガイ科の一種 *Subulinidae* sp.
33. ヒラマキガイ科の一種 *Planorbidae* sp.
34. マクラガイ *Oliva mustalina* LAMARCK - 5~30m 細砂底

斧足綱 PELECYPODA

1. コシロガイ *Acar plicatum* (DILLWYN) 潮間帯岩礁底
2. カリガネエガイ *Barbatia* (*Savignyarca*) *virescens* (REEVE) 潮間帯岩礁底
3. ハイガイ *Tegillaeca granosa* (LINNÉ) 内海奥の潮間帯~10m 泥底
4. サルボウガイ *Scapharca subcrenata* (LISCHKE) 潮間帯~10m 泥底
5. アカガイ *Scapharca broughtonii* (SCHRENCK) 内海潮間帯~50m 泥底
6. タマキガイ *Glycymeris vestita* (DUNKER) 浅海の砂底
7. ベンケイガイ *Glycymeris albokineata* (DUNKER) 水深5~20m 砂底
8. イタヤガイ *Pecten* (*Notovola*) *albicans* (SCHRÖTER) 水深20~50m 細砂底
9. ウミギクガイ *Spondylus barbatus* REEVE 潮間帯~10m 岩礁
10. イタボガキ *Ostrea denselamellosa* LISCHKE 内湾浅海の岩や小石
11. マガキ *Crassostrea gigas* (THUNBERG) 内湾の潮間帯岩礁
12. ヤマトシジミガイ *Corbicula japonica* PRIME 河口、潟等の汽水域
13. トリガイ *Fulvia mutica* (REEVE) 内海水深10~30m 砂泥底
14. アサリ *Tapes* (*Amygdala*) *philippinarum* (ADAMS et REEVE) 潮間帯~10m 砂泥底
15. オキシジミガイ *Cyclina sinensis* (GMELIN) 内湾奥部潮間帯泥底
16. スダレガイ *Paphia euglypta* (PHILIPPI) 水深10~30m 細砂底
17. カガミガイ *Dosinorbis* (*Phacosoma*) *japonicus* (REEVE) 浅海砂底
18. ハマグリ *Meretrix lusoria* (RÖDING) 潮間帯・浅海砂泥底

19. カノコアサリ *Glycydonta marica* (LINNÉ) 潮間帯下砂泥底
20. バカガイ *Mactra chinensis* PHILIPPI 潮間帯細砂泥底
21. シオフキガイ *Mactra veneriformis* REEVE 内湾潮間帯砂泥底
22. ゴイスキガイ *Macoma tokyoensis* MAKIYAMA 内海泥底
23. アケガイ *Paphia vernicosa* (GOULD) 浅海砂底
24. サツマアサリ *Antigona lamcllaris* SCHUMACHER 浅海の砂底
25. イソハマグリ *Atactodea striata* (GMELN) 潮間帯上部砂底
26. マテガイ *Solen strictus* GOULD 内湾潮間帯細砂底
27. オオノガイ *Mya (Arenomya) arenaria oonogai* (MAKIYAMA) 潮間帯砂泥底

多板綱 POLYPLACOPHORA

1. ヒザラガイ *Liolophura japonica* (LISCHKE) 潮間帯岩小石底

2. 哺乳類

1. シカ *Cervus nippon* TEMMINCK
2. エホンイノシシ *Sus scrofa leuco my stax* TEMMINCK
3. ノウサギ *Lepus brachyurus* TEMMINCK
4. クジラ類

3. 魚類

1. ネコザメ *Heterodontus japonicus* (DUMÉNIL) 沿岸のやや深い海底
2. ツノザメ科 *Squalidae* sp.
3. ネズミザメ *Lamna ditropis* HUBBS & FOLLETT
4. トビエイ
5. アカエイ *Dosyatis akajei* (MÜLLERE & HENLE) 内湾砂底
6. マイワシ *Sardinops melarosticta* (TEMMINCK & SCHLEGEL) 外洋
7. ホンサバ *Pneumatophorus japonicus* (HOULTUYN)
8. カツオ *Katsuwonus pelamis* (LINNÉ) 外洋
9. マアジ *Trachurus trachurus* (LINNÉ) 外洋
10. スズキ *Lateolabrax japonicus* (CUVIER & VALENCIENNES) 海岸付近
11. ヘダイ *Rhabdosargus sarba* (FORSKÅL) 沿岸魚

12. クロダイ *Mylio macrocephalus* (BASILEWSKY) 沿岸魚、内湾 5～10mの砂泥底
13. マダイ *Chrysophrys major* TEMMINCK & SCHLEGEL 30～150mの岩礁底
14. チダイ *Evynnis japonica* TANAKA 30～150mの岩礁底
15. ベラ科 *Labridae* sp.
16. マフグ科 *Tetraodontidae* sp.

4. 植物遺存体

植物として、多量の炭化種子があるが未同定であり、今後、専門家の同定を得て種を明らかにしたい。

第7章 まとめにかえて

一尾貝塚の発掘調査は擁壁工事に伴う緊急調査で、調査体制もなく短期間の調査であったが、十分な成果をあげることができた。以下、いくつかの項目を検討し、まとめとしたい。

1. 土器の編年問題

遺跡は考えていた以上に貝塚の堆積が厚く、貝層を何枚も確認することができた。貝層は大きく、上部貝層と下部貝層に分けることができ、土器編年を考える上で好都合であった。土層と土器についてみてみよう。

下部貝層より下の砂層には並木式、阿高式土器など中期土器が出土し、この遺跡の初源を示している。下部貝層からは後期初頭の南福寺土器が単純に出土している。上部貝層からは出水式、市来式、鐘ヶ崎式、北久根山式土器が出土しているが、時間的に充分検討していないので、今後を期したい。この中で市来式土器は量的に少なく、搬入品であることがわかる。また、鐘ヶ崎式土器、北久根山式土器の精製品の中には、文様帯を丹で塗り、他を黒色顔料で塗り、いわゆる彩文土器が少なからず存在する。注目されることである。土器型式と層位の関係については、今後、充分検討したうえで、稿を改めたいと考えている。

2. 石器・骨角器・自然遺物からみた生産活動

石器・骨角器が少なからず出土していて、自然遺物と関連させ、一尾貝塚における生産の活動の復原が可能である。ここでは、その概略をみておく。

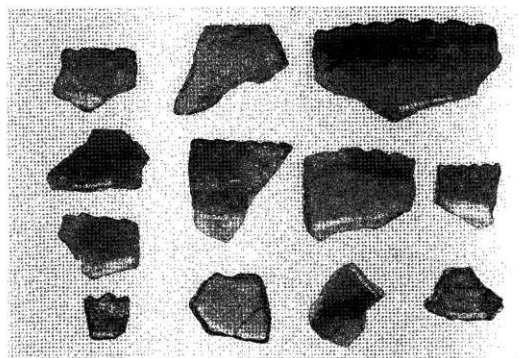
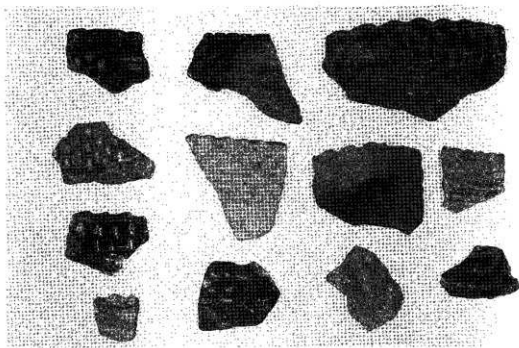
狩猟具については石鏃がある程度で、あまり活発とはいえない。それを反映するようにシカ、イノシシ等の獣骨は目立つ存在ではない。漁撈具ではオサンニ型結合釣針、単式釣針をはじめ、離頭鈎、ヤス、組合せ石鈎、双角状礫石器、石錘等がある。道具の種類も多く、活発であったことがわかる。それを裏づけるように魚骨の量は莫大である。マダイ、クロダイ、ヘダイ等の大型魚が目立っている。釣漁、刺突漁、網漁がおこなわれている。貝の殻軸でつくられたオサンニ型結合釣針軸部、網の炭化物は注目される遺物である。

植物採集、その処理具として、磨石、叩石、凹石、石皿等がある。量的に多く、主要な生産活動であったことがうかがえる。炭化種子も多量に出土しているが未同定である。

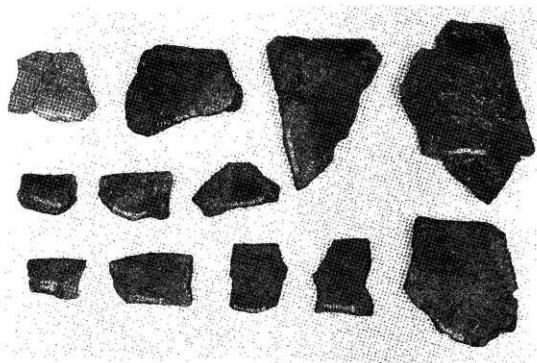
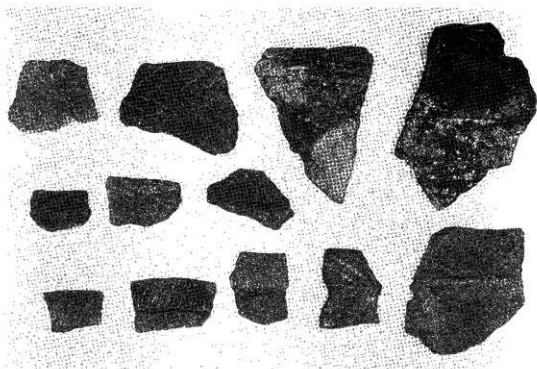
今後、自然遺物の同定、検討した上で稿を改めたいと考えている。

圖 版

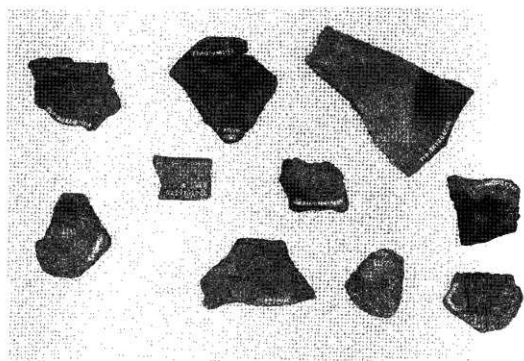
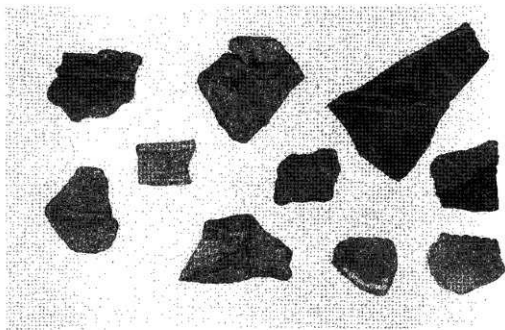
PLATES



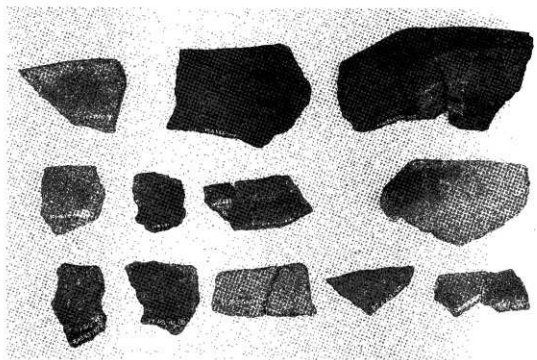
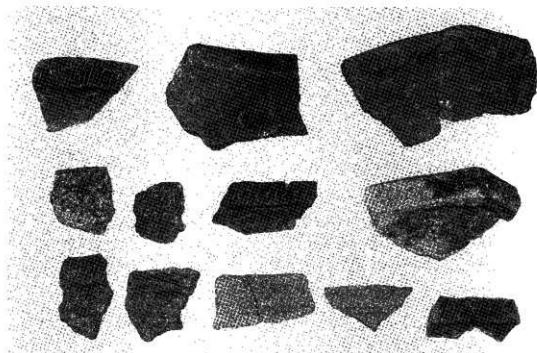
網文土器 I (上・表、下・裏)



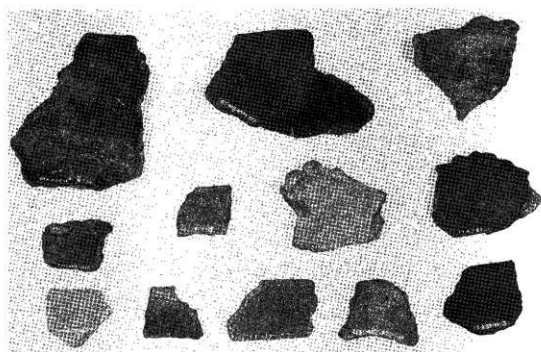
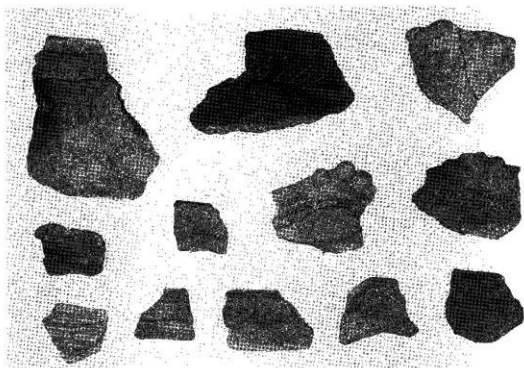
縄文土器Ⅱ (上・表、下・裏)



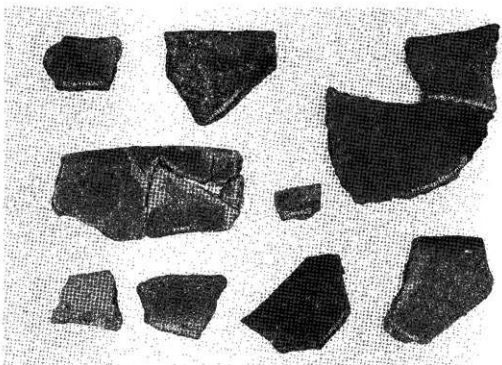
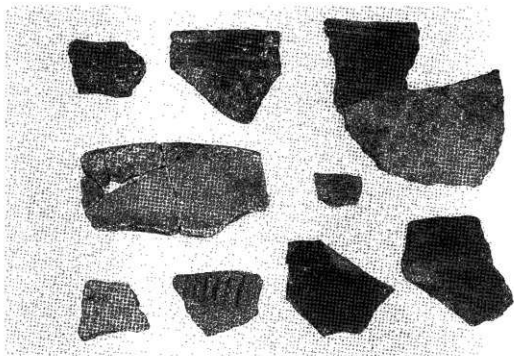
縄文土器Ⅲ（上・表、下・裏）



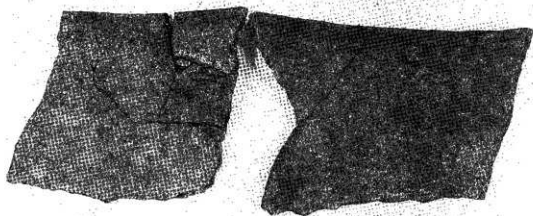
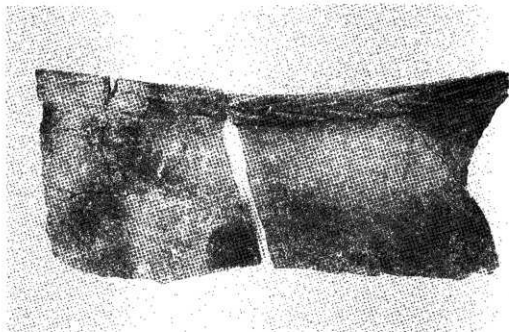
縄文土器Ⅳ(上・表、下・裏)



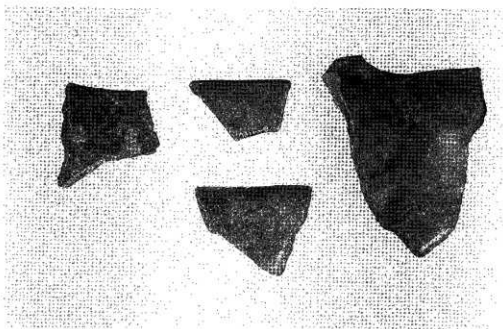
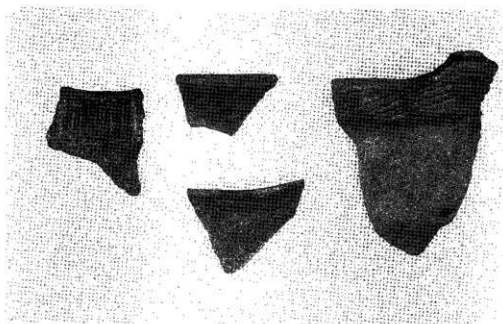
縄文土器V (上・表、下・裏)



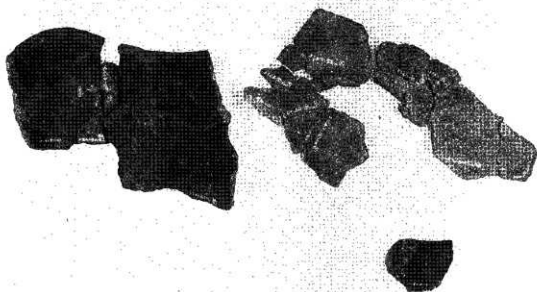
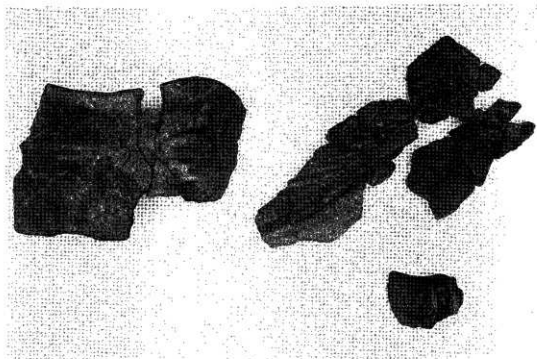
縄文土器Ⅵ (上・表、下・裏)



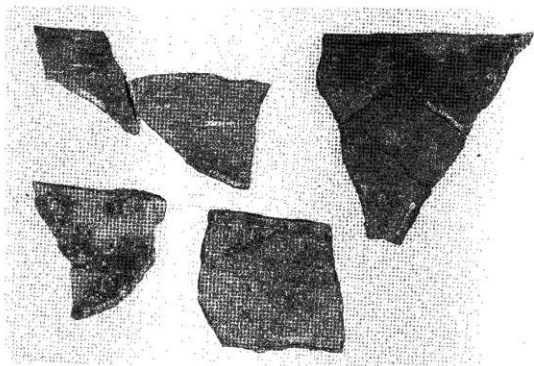
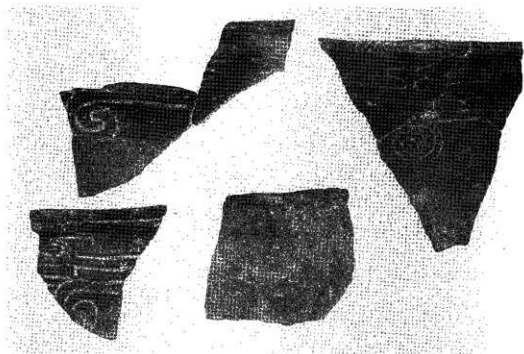
縄文土器Ⅶ（上・表、下・裏）



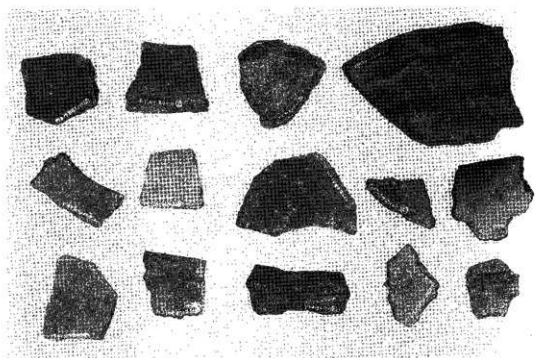
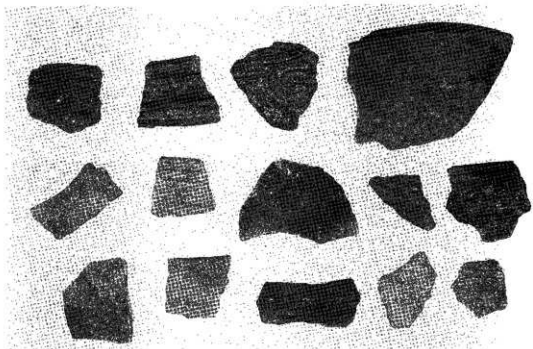
細文上器Ⅶ(上・表、下・裏)



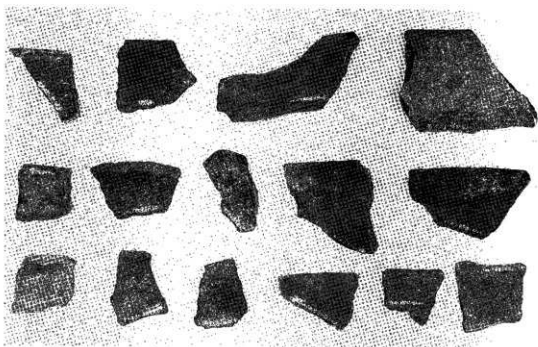
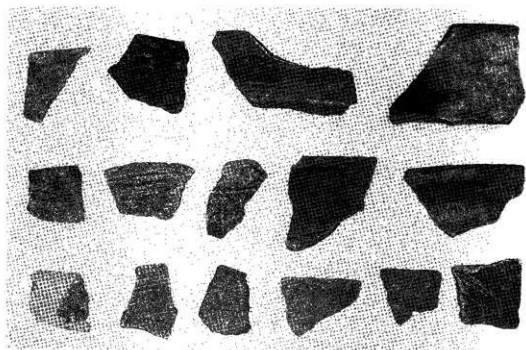
縄文土器Ⅸ（上・表、下・裏）



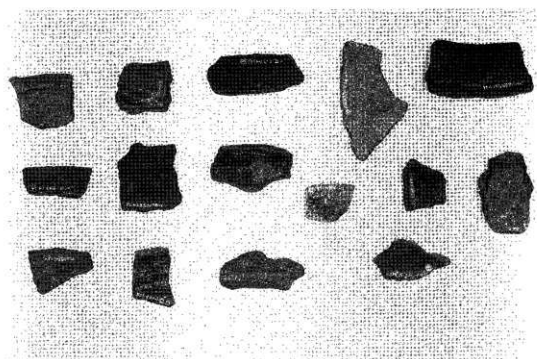
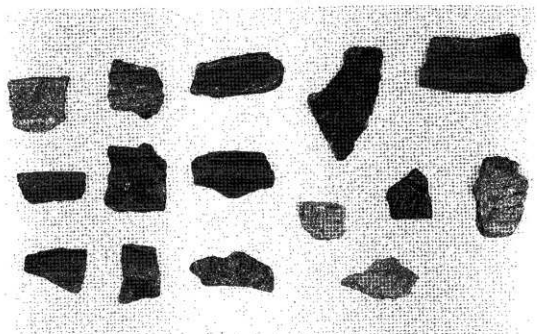
網文土器X (上・表、下・裏)



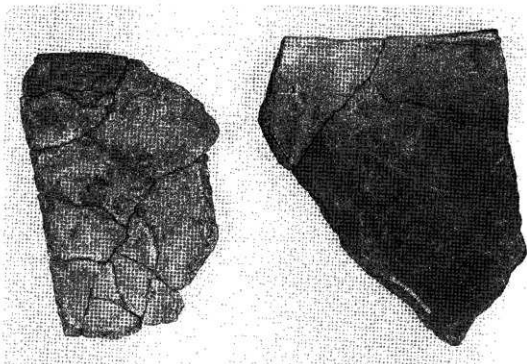
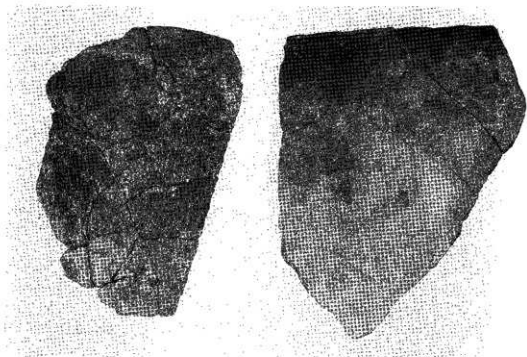
縄文土器Ⅻ (上・表、下・裏)



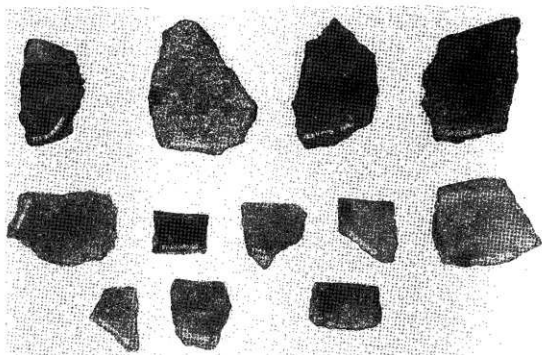
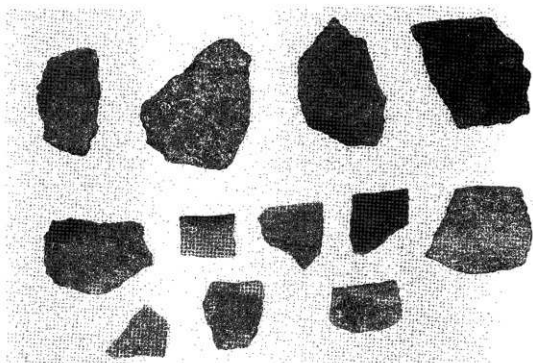
縄文土器知 (上・表、下・裏)



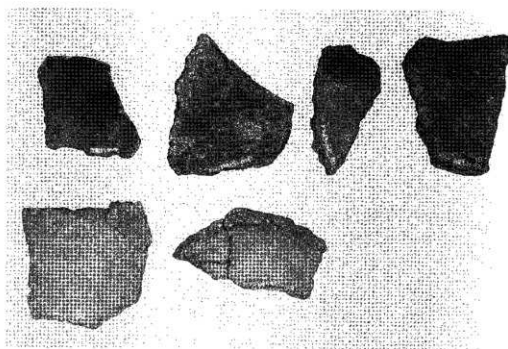
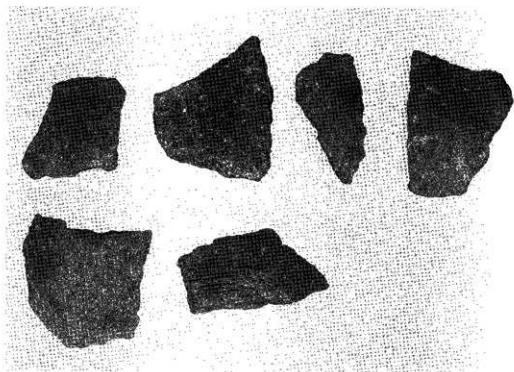
縄文土器Ⅱ (上・表、下・裏)



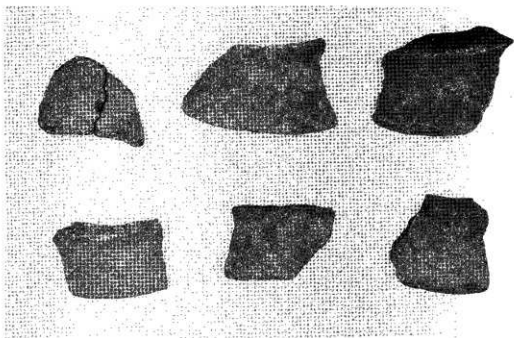
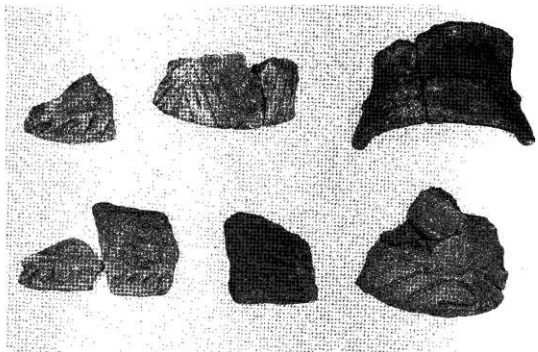
縄文土器Ⅳ(上・表、下・裏)



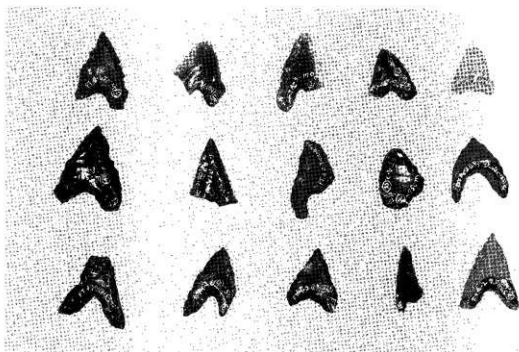
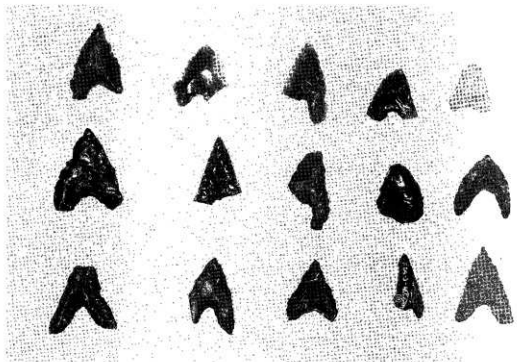
縄文土器Ⅳ(上・表、下・裏)



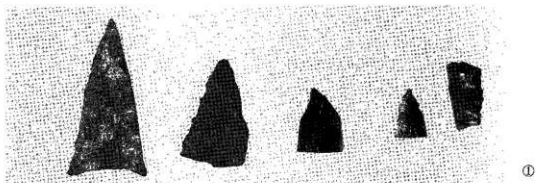
縄文土器Ⅳ(上・表、下・裏)



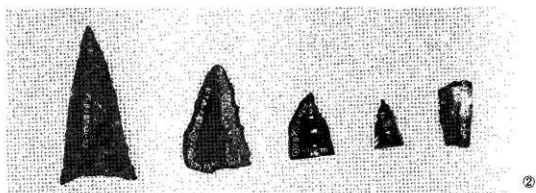
縄文土器M (上・脚台有文土器、下・脚台無文土器)



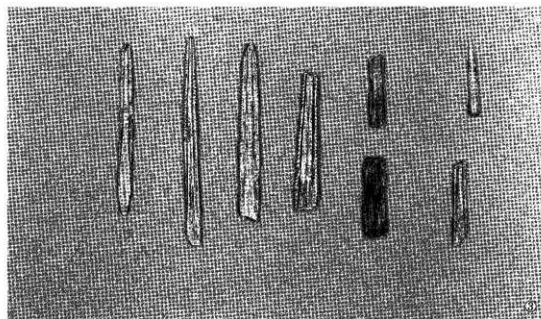
石 鏃(上・表、下・裏)



①

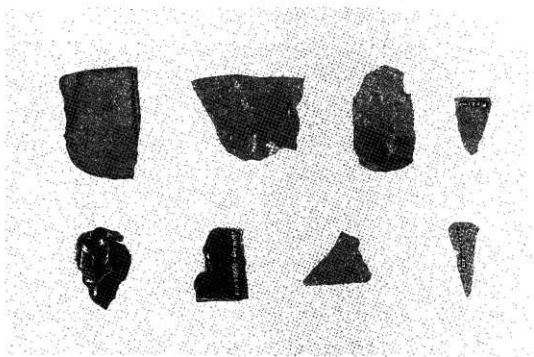
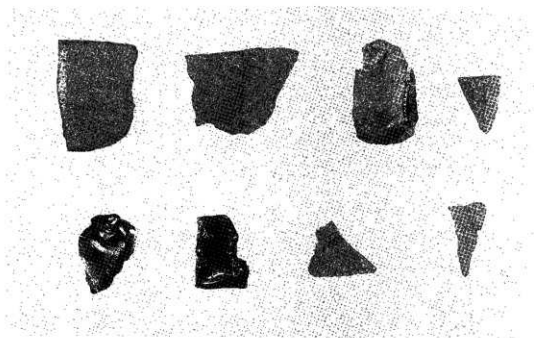


②

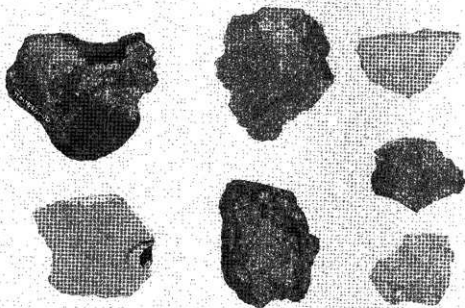
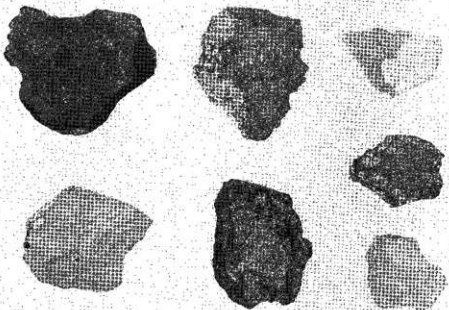


③

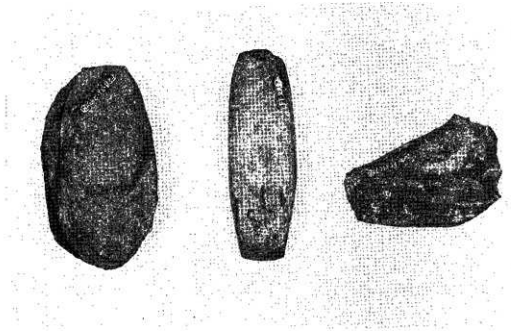
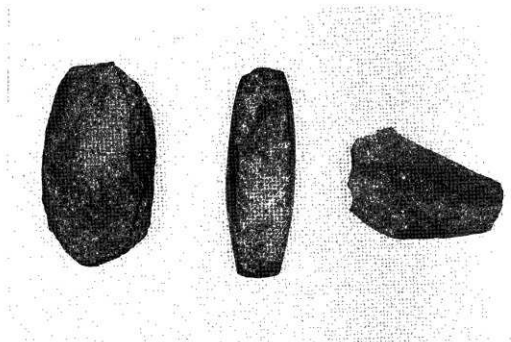
石鈺、石鋸、尖頭狀石器、(①及、②裏) ③エイ尾刺骨製刺突具



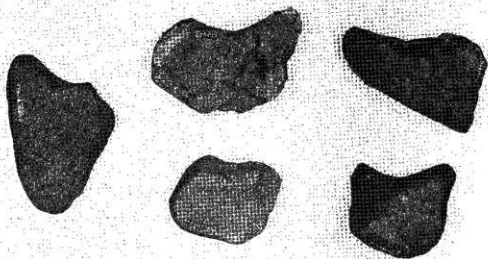
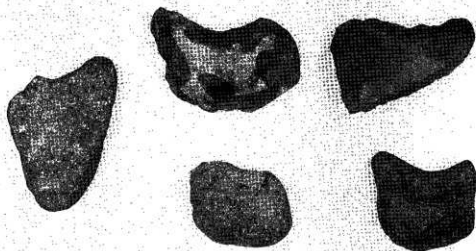
スクレイパー類1 (上・表、下・裏)



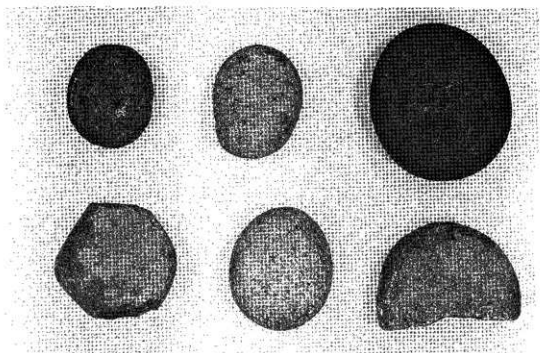
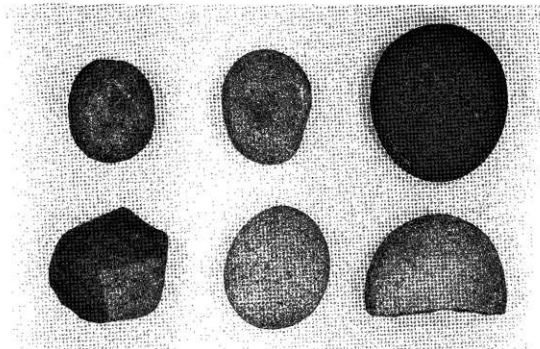
スクレイパー類II (上・表、下・裏)



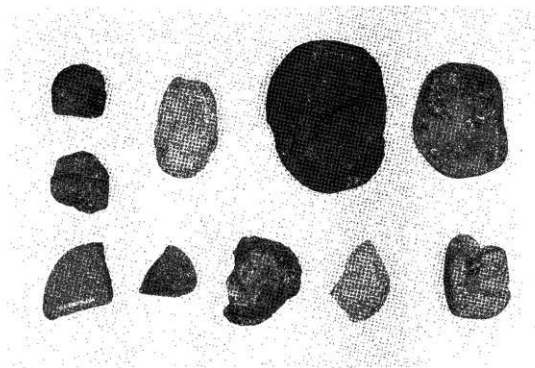
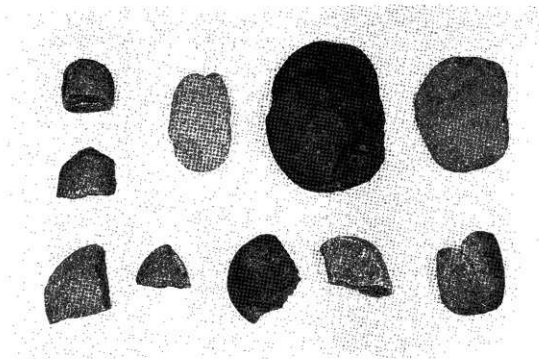
磨製石斧（上・表、下・裏）



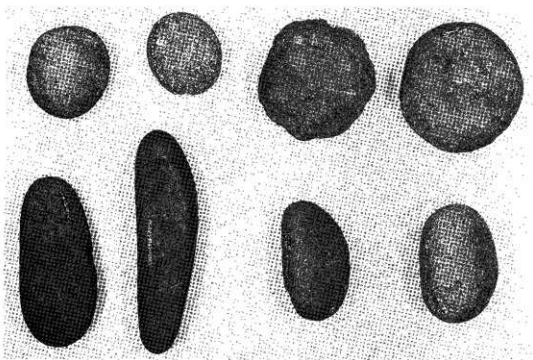
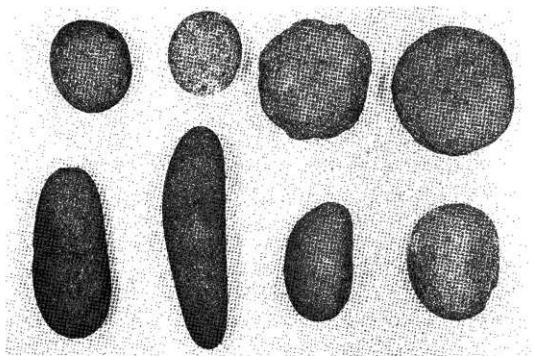
双角状礫石器(上・表、下・裏)



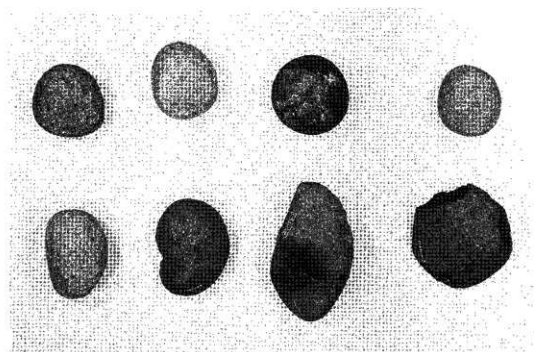
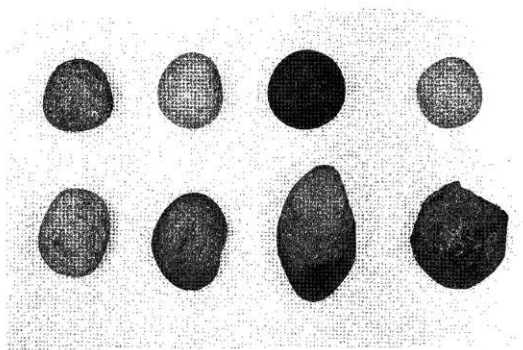
磨石、叩石、凹石類 I (上・表、下・裏)



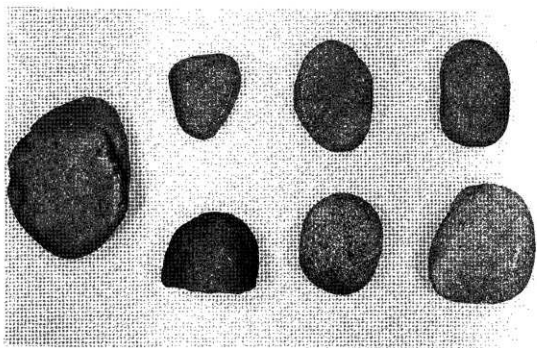
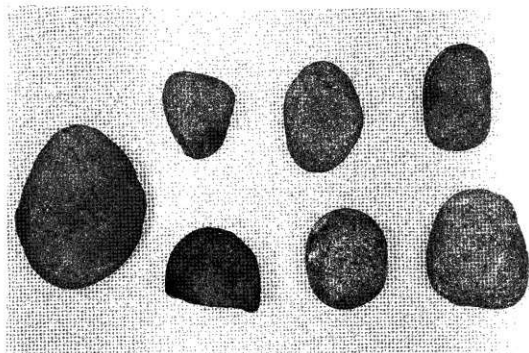
磨石、叩石、凹石類Ⅱ（上・表、下・裏）



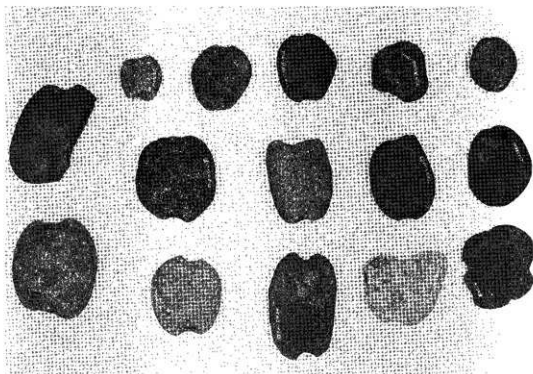
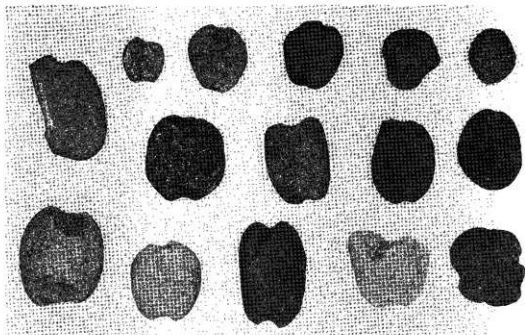
磨石、叩石、凹石類Ⅲ(上・表、下・裏)



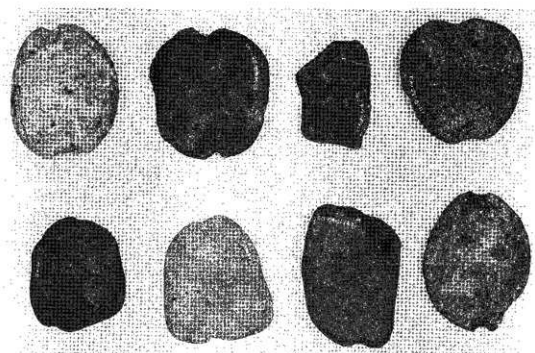
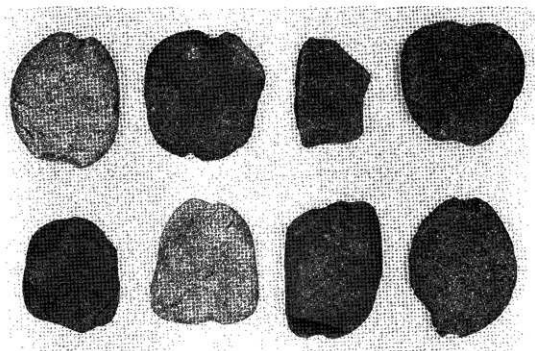
磨石、叩石、凹石類Ⅳ(上・表、下・裏)



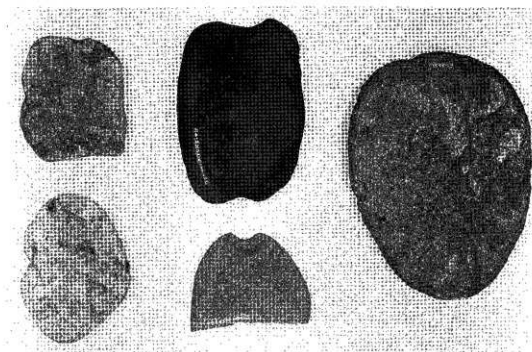
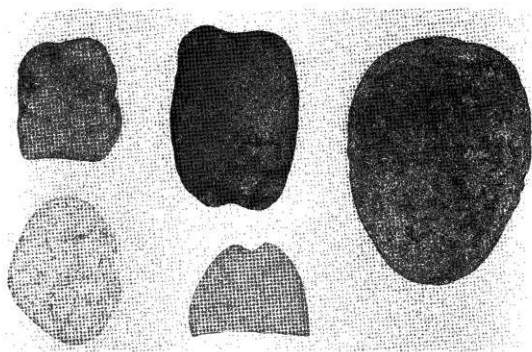
磨石、叩石、凹石類V (上・表、下・裏)



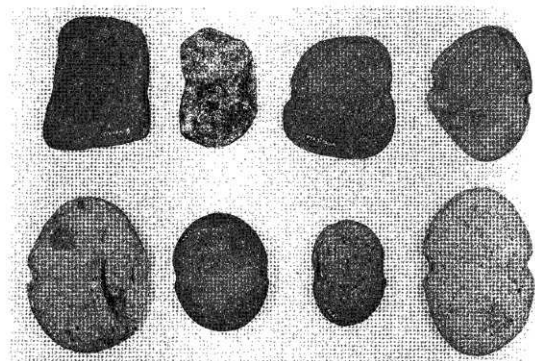
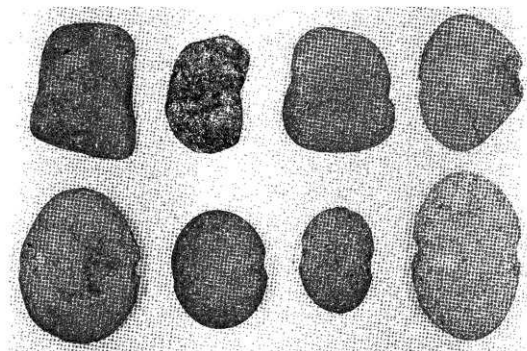
石鏝 I (上・表、下・裏)



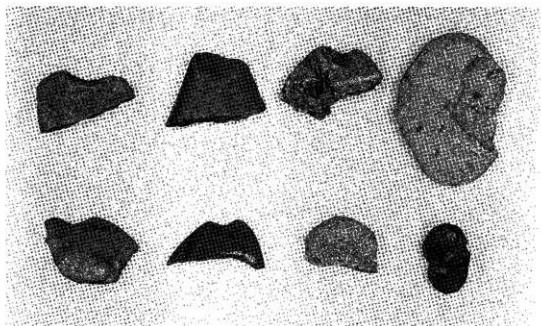
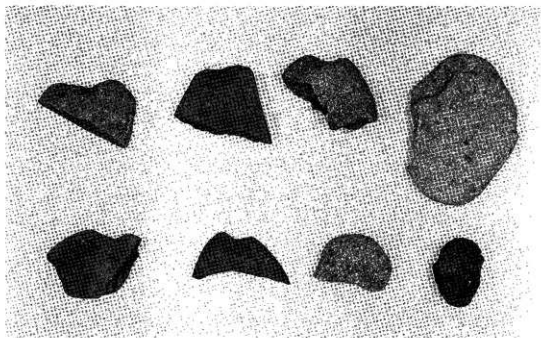
石錘Ⅱ (上・表、下・裏)



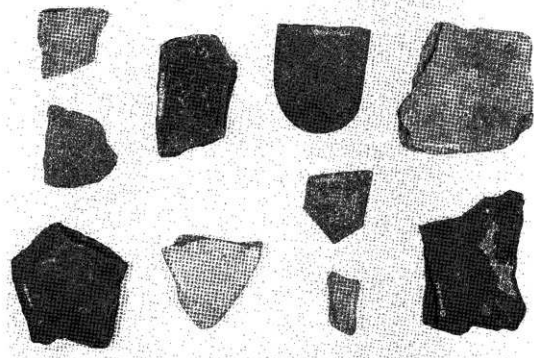
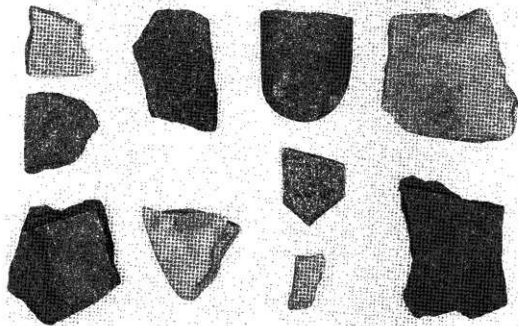
石鏡Ⅲ (上・表、下・裏)



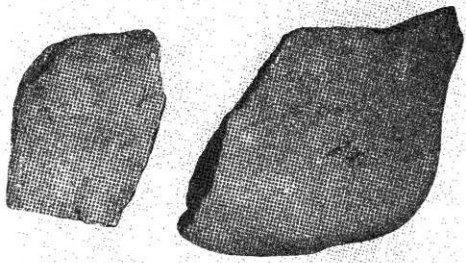
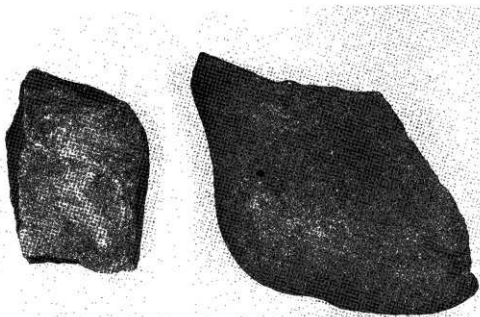
石錘IV (上・表、下・裏)



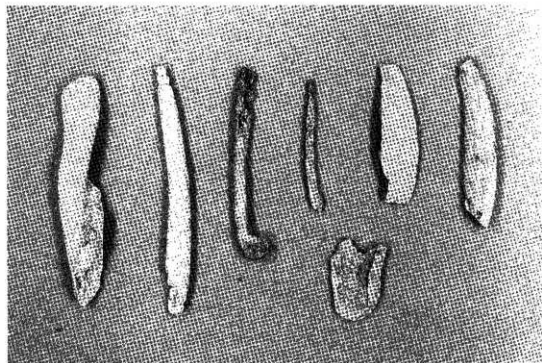
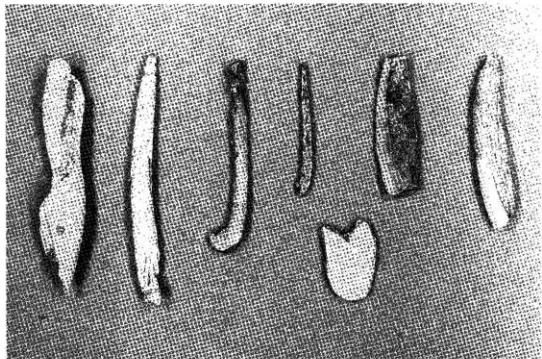
石鏡V (上・表、下・裏)



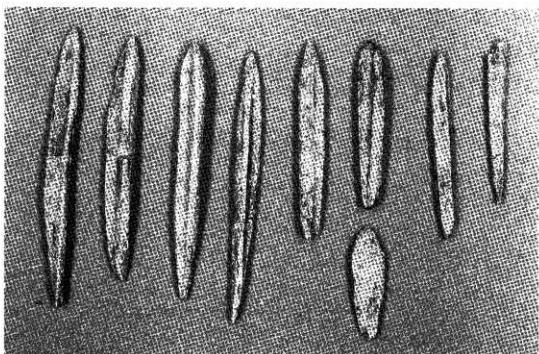
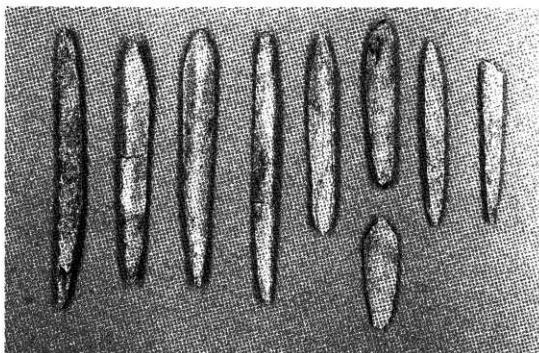
砥石(上・表、下・裏)



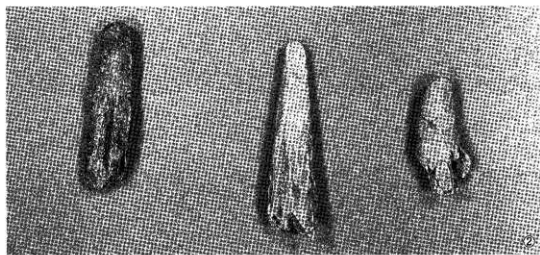
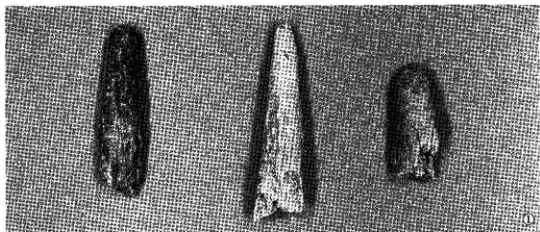
石皿(上・表、下・裏)



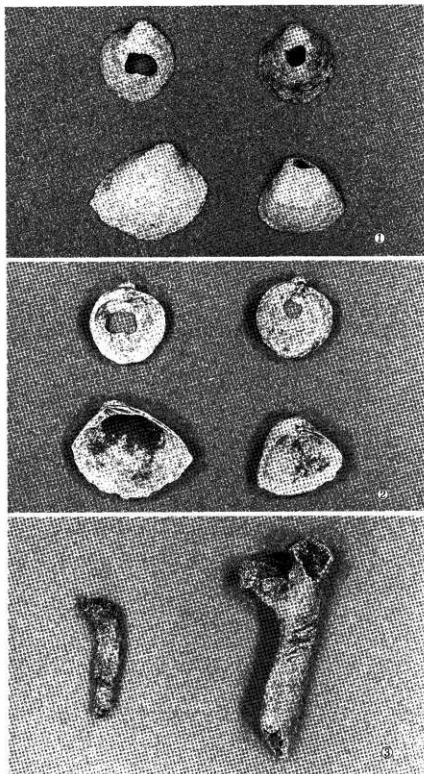
結合釣針、單式釣針、釣針木製品(上・表、下・裏)



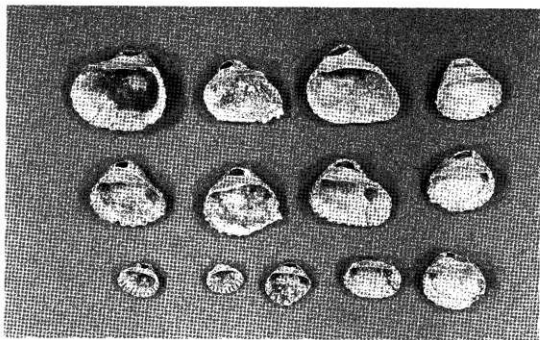
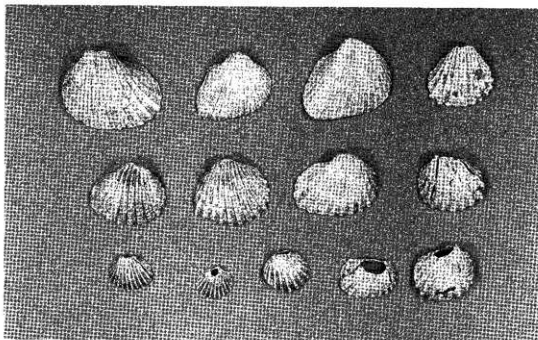
椎頭結、ヤス類 (上・表、下・裏)



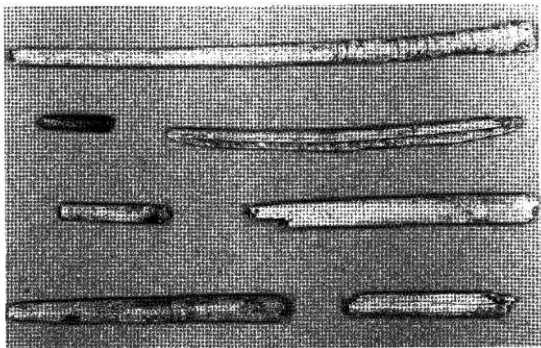
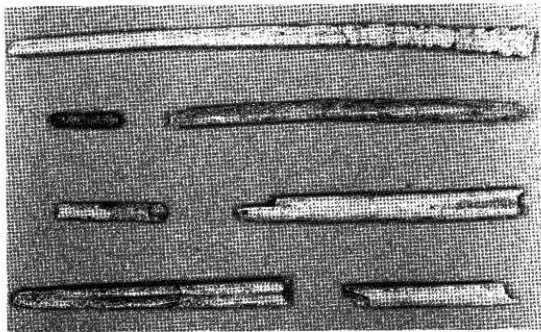
鹿角製品 (①表、②裏) ③骨角器類



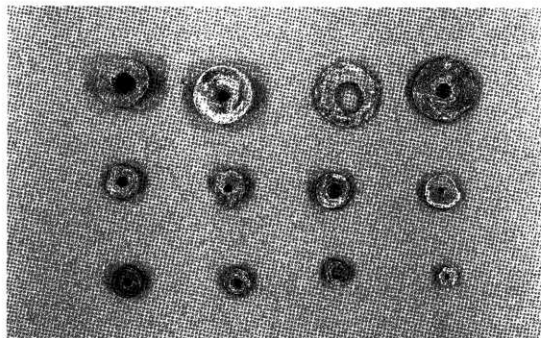
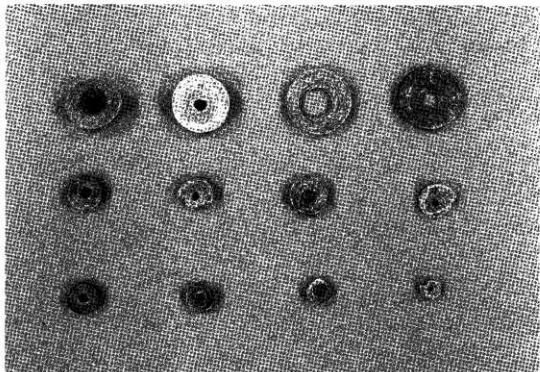
貝片 (①表、②裏) ③傷ある骨片



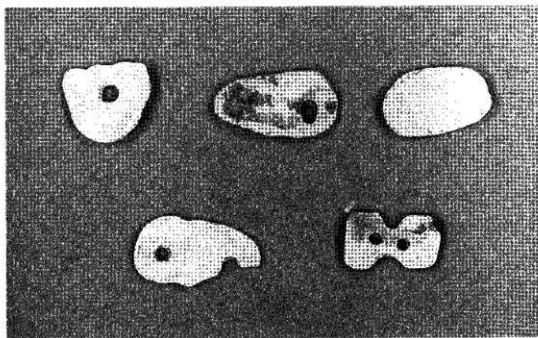
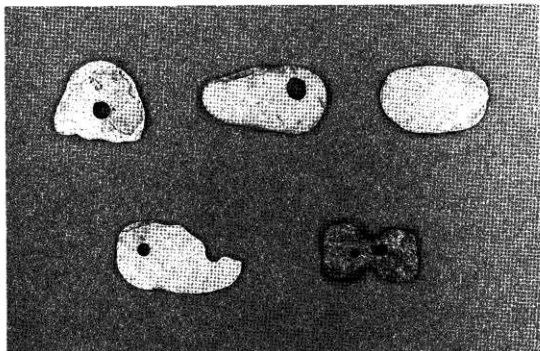
貝類(上・表、下・裏)



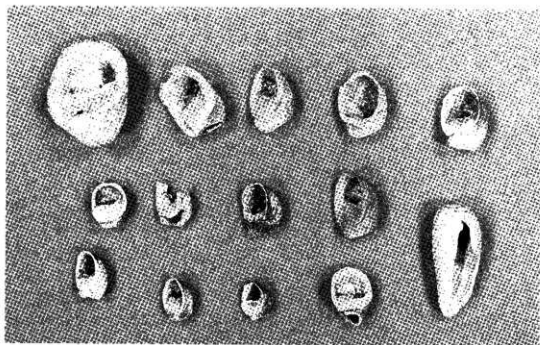
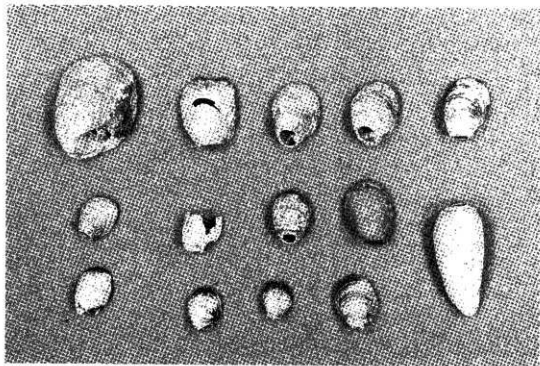
箭(上·表、下·裏)



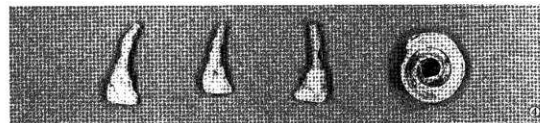
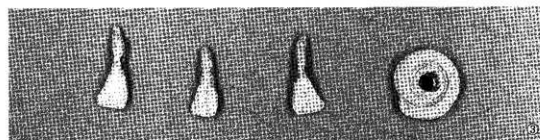
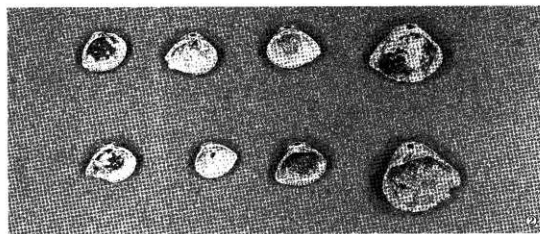
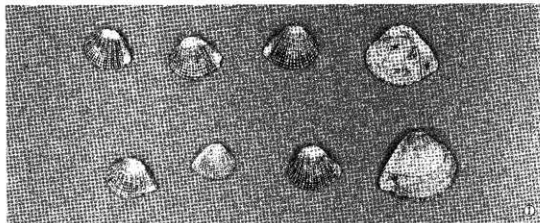
鹿角製耳飾、サメ背椎骨製耳飾(玉)(上・表、下・裏)



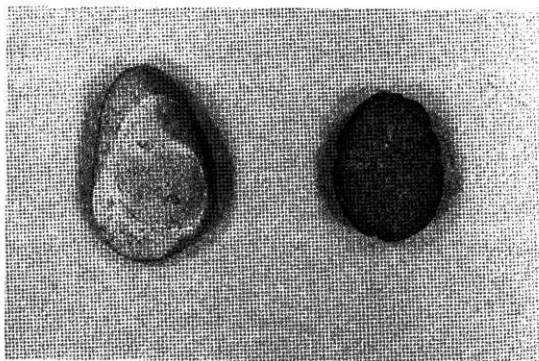
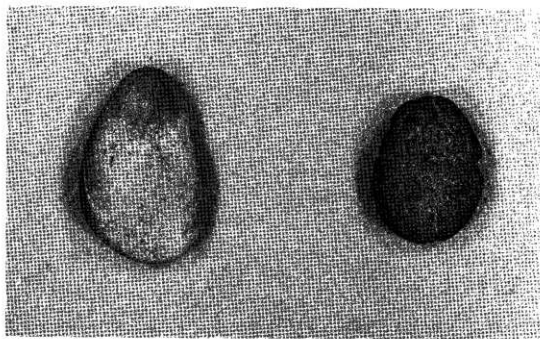
貝製重飾品（上・表、下・裏）



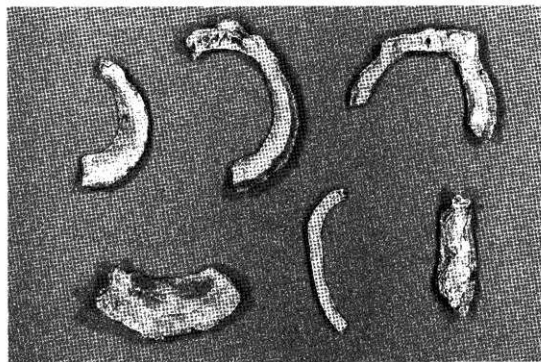
貝製玉類 (上・表、下・裏)



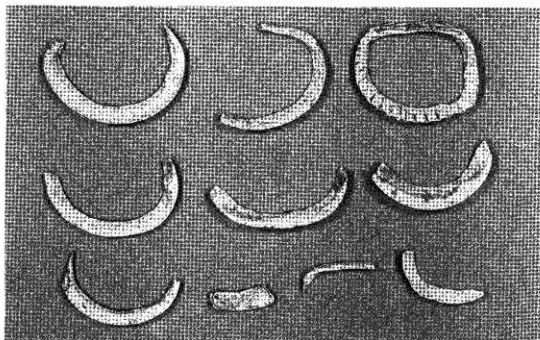
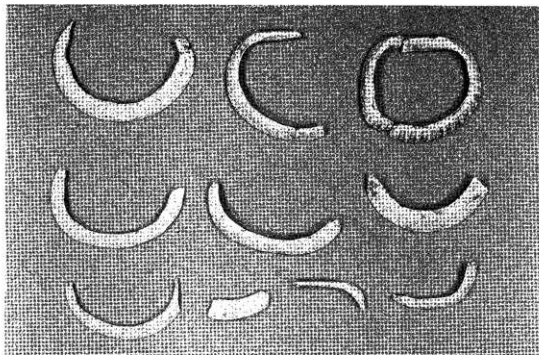
貝製玉類、鹿門齒製玉類 (①表、②裏、③友、④裏)



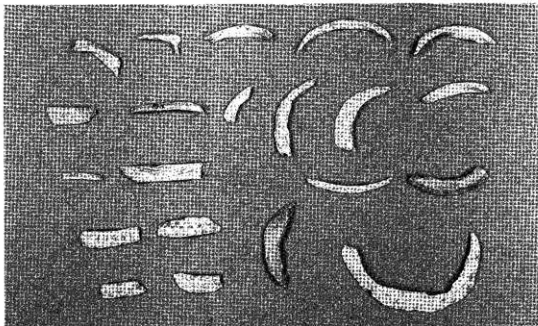
石製玉木製品と線刻確（上・表、下・裏）



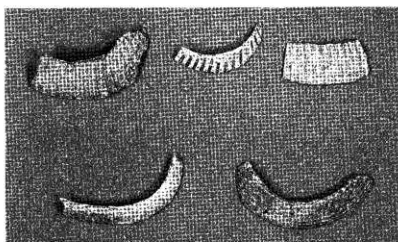
貝輪I (上・表、下・裏)



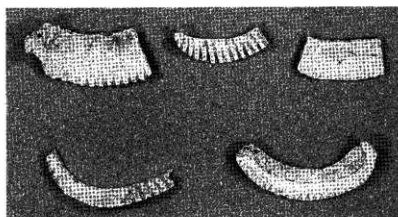
貝輪Ⅱ (上・表、下・裏)



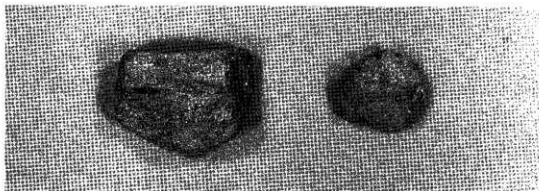
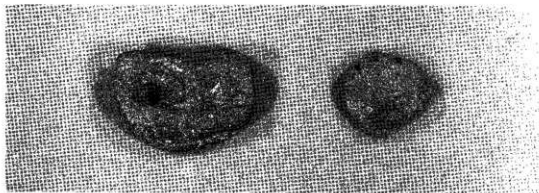
貝輪Ⅲ



表



裏



輕石製品 (上)、網炭化物 (下)

五和町史資料編（その11）

一 尾 貝 塚

熊本県天草郡五和町大字御領字浜田所在縄文時代貝塚の調査

平成12年3月31日

〔編 集〕

五和町史編纂委員会

〔発 行〕

五和町教育委員会

〒863-2201 熊本県天草郡五和町大字御領2943

TEL 0969-32-1111（代表）

〔印 刷〕

（株）川島弘文社

〒812-0051 福岡市東区箱崎ふ頭6丁目6-41

TEL 092-641-2665
